

資 料

日本における化学史文献：世界篇

大 野 誠

はじめに

研究の核心は「継承」と「批判」にある、とよく言われる。「継承」にせよ、「批判」にせよ、いずれにしてもその前提にあるのは「先行」研究である。したがって、あるテーマについて先行研究のリストを作成することは、研究の第一歩を踏み出したことになる。このようなことは、卒業論文や大学院生の論文を指導する教員なら、いつも学生に述べていることである。もちろん、個々の研究者は何らかの形で必ず、自分の研究領域に関する先行研究のリストをつくっている。だが、不思議なことにそうしたものの集合体はどの学問分野でも稀にしか公表されない。本文献集の目的は、わが国における化学史研究の今後の発展のために、その基礎としてこれまでの研究成果を一覧できる文献目録を提供することにある。この試みはわが国の科学史学界では初めてのことである。しかし、掲載すべき情報を書き漏らしていることも多いと思われる。初めての試みに免じてご容赦いただきたい。

本文献集の編集責任は筆者にあるが、以下の方々から数多くの情報をお寄せいただいた。最初に記して謝意を表したい。

編集協力者：吉本秀之、園部利彦、古川安、
内田正夫、河野俊哉、梶雅範。

1. 編集方針

- (1) 本文献集に掲載する書誌情報は、化学史上の原典翻訳と研究文献についてのものである。
- (2) 原典の翻訳については、可能な限り原語の表題などの情報も付記する。

- (3) 本稿での研究文献とは、著書に加えて、「論文」・「寄書」・「研究ノート」・特集企画の論稿を指し、書評・発表要旨・学術集会の報告などは含まない。日本で公刊されたものに限る。英語で書かれたものも含める。
- (4) 文献で扱われているテーマについては、日本化学史以外の化学史・化学技術史、およびこれらに関係するものとする。また扱われている時代は、古代から第二次世界大戦直後頃までとする。*日本化学史については、本号とは別に今後文献集を作成する予定である。
- (5) 各文献の掲載回数は1回とし、同一文献を二箇所以上で掲載することはない。

2. 本文献集の情報源

- (1) 著作については、国立情報学研究所のウェブサイト NACSIS。
- (2) 論文については、国立情報学研究所のウェブサイト CiNii。
- (3) 『化学史研究』の論文については学会のホームページ。
- (4) その他、編集委員会へ寄せられた情報

3. 掲載事項の凡例

- (1) 同一項目内の研究文献は、刊行年の古い順に配列し、刊行年が同一の場合は、著者の氏名の「あいうえお」順に並べた。
- (2) 文献の表記方式は、次のものを基本とするが、頁数を表記しない場合も多い。
著者名「題目」『著作や雑誌のタイトル』巻・号数（刊行年）：掲載頁。

目 次

A. 全般にわたるもの

事典	195
科学史	
技術史・産業史	
歴史における科学的認識	
ジェンダーと科学	
論文集	
化学史の通史	197
化学技術・化学工業の通史	
人物科学史	
化学史の方法	200
化学史と教育	
化学の発見史	
原子論史・物質観史	
元素の発見史・物質と歴史	203
薬・毒の歴史	
試薬の歴史	
実験器具・装置・実験室	
化学史研究文献	
その他	

B. 時代別

化学考古学	
古代	206
プラトン	
アリストテレス	
原子論など	
中世	208
錬金術	
パラケルスス	
ルネサンス	212
17 世紀	213
ボイル	
ニュートン	
18 世紀	217
化学革命	
フロジストン説	
シュタール	

シェーレ	
プリーストリ	
ラヴォアジエ	
19 世紀	221
原子論	
分子論	
アウオガドロ	
ドルトン	
ベルセーリウス	
ファラデー	
結晶学	
有機化学	
リービッヒ	
ケクレ	
周期律	
生化学	
パストゥール	
物理化学	
オストヴァルト	
立体化学	
希ガス	
20 世紀	239
原子構造	
ボーア	
ラザフォード	
レントゲン	
マリー・キュリー	
ポーリング	
フェルミ	
量子化学	
構造化学	
触媒・界面化学	
ラングミュア	
有機電子論	
高分子化学	
ノーベル賞	
DNA 構造	
化学技術史	
戦争と化学	
環境と化学	

A. 全般か複数の領域にわたるもの

事 典

伊東俊太郎・坂本賢三・山田慶児・村上陽一郎編『科学史技術史事典』弘文堂（1983）.
橋本毅彦・梶雅範・廣野喜幸監訳『科学大博物館一装置・器具の歴史事典一』朝倉書店（2005）.

科 学 史

永井潜『アリストテレスよりニュートンまで』春秋社（1929）.
ギリスピー（島尾永康訳）『科学思想の歴史』みすず書房（1965）.
村上陽一郎『西欧近代科学：その自然観の歴史と構造』新曜社（1971）.
H. カーニイ（中山茂・高柳雄一訳）『科学革命の時代：コペルニクスからニュートンへ』平凡社（1972）.
ジョセフ・ニーダム（橋本敬三ほか訳）『中国の科学と文明』全11巻，思索社（1974-1981）.
アーサー・O・ラヴジョイ（内藤健二訳）『存在の大いなる連鎖』晶文社（1975）.
シュテーリヒ（菅井準一・長野敬・佐藤満彦訳）『西洋科学史』（全5冊），社会思想社教養文庫（1975-76）.
島尾永康『物質理論の探求：ニュートンからドールトンまで』岩波新書（1976）.
ダンネマン（安田徳太郎訳）『新訳 ダンネマン大自然科学史』12巻＋別巻1，三省堂（1977-1980）.
島尾永康編著『科学の歴史』創元社（1978）.
大沼正則『科学の歴史』青木書店（1978）.
坂本賢三『科学思想史』岩波全書（1984）.
D. M. ナイト（柏木肇・柏木美重訳編著）『科学史入門：史料へのアプローチ』内田老鶴圃（1984）.
F. V. ハント（平松幸三訳）『音の科学文化史：ピュタゴラスからニュートンまで』海青社（1984）.
遠山啓『科学史の流れに学ぶ：遠山啓のコペルニクスからニュートンまで』太郎次郎社（1985）.
平田寛『図説科学・技術の歴史：ピラミットから進化論まで』上下巻，朝倉書店（1985）.
コリン・ロナン（村上陽一郎監訳）『図説科学史』東京書籍（1985）.
大沼正則『科学史を考える』科学全書，大月書店（1986）.
中山茂・石山洋『科学史研究入門』東京大学出版会（1987）.
E. A. バート（市場泰男訳）『近代科学の形而上学的基礎：コペルニクスからニュートンへ』平凡社（1988）.
吉仲正和『力学はいかにして創られたか：コペルニクスからニュートンへ』玉川大学出版部（1988）.
キース・トマス（山内昶監訳）『人間と自然界：近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局（1989）.
古川安『科学の社会史：ルネサンスから20世紀まで』南窓社（1989，増訂版：2000）.
ロバート・K. G. テンプル（牛山輝代監訳）『図説中国の科学と文明』河出書房新社（1992）.
井山弘幸『偶然の科学誌』大修館書店（1995）.
山本義隆『古典力学の形成：ニュートンからラグランジュへ』日本評論社（1997）.
チャールズ・ウェブスター（金子務監訳，神山義茂・織田紳也訳）『パラケルススからニュートンへ：魔術と科学のはざま』平凡社（1999）.
中山茂『20・21世紀科学史』NTT出版（2000）.
K. ファン・ベンケル（塚原東吾訳）『オランダ科学史』朝倉書店（2000）.
松山壽一『ニュートンからカントへ：力と物質の概念史』晃洋書房（2004）.

技術史・産業史

奥村正二『製鉄製鋼技術史』伊藤書店（1944）。

『近代熔鋼法の誕生：ヘンリー・ベッセマーの苦闘』八幡製鉄株式会社販売部（1954）。

関野唯一『世界糖業文化史』邦光書房（1955）。

立川昭二「銅冶金の起源と発展」『科学史研究』第40号（1956年）：1-6。

松井悦造「漆の研究史」『科学史研究』第44号（1957）：10-17。

中沢護人「冶金学誕生の序曲」『科学史研究』第54号（1960年）：9-20。

ルードウィヒ・ベック（中沢護人訳）『鉄の歴史』5巻（16分冊），たたら書房（1968-1986）。

シンガー，ホームヤード，ホール，ウィリアムズ（平田寛・八杉龍一・田中実他訳編）『技術の歴史』14巻，筑摩書房（1978-81）。

ヨハン・ベックマン（特許庁内技術史研究会訳）『西洋事物起源Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ』ダイヤモンド社（1980）；岩波文庫（4分冊，1999-2000）。

村上陽一郎編『知の革命史7 技術思想の変遷』朝倉書店（1981）。

三輪茂雄『粉の文化史—石臼からハイテクノロジーまで』新潮社（1987）。

中沢護人『栄光のいばらの道：ベッセマーの溶鋼法の発明』アグネ（1989）。

中国硅酸盐学会『中国陶磁通史』平凡社（1991）。

『「火」—火の生活文化史・火の博物館』KBI出版（1994）。

ベッセマー（中沢護人・田川哲哉訳）『ベッセマー自叙伝：20世紀文明の基礎を築いた発明家』日鉄技術情報センター（1999）。

磯田浩『火と人間』法政大学出版局（2004）。

糖業協会『糖業技術史—原初より近代まで』丸善プラネット（2004）。

糖業協会『現代糖業技術史—第二次大戦終了以後 甘蔗糖編』丸善プラネット（2006）。

糖業協会『現代糖業技術史—第二次大戦終了以後 精製糖編』丸善プラネット（2006）。

糖業協会『現代糖業技術史—第二次大戦終了以後 ビート糖編』丸善プラネット（2006）。

歴史における科学的認識

柏木肇「自然認識の歴史的規定性」『思想』No.541（1967）：40-52。

G. バッシュラール（及川稔・小井戸光彦訳）『科学的精神の形成—客観的認識の精神分析のために—』国文社（1975）。

廣田鋼蔵・慶伊富長・栗本慎一郎『Michael Polanyi』カルビー（1986）。

大塚明郎・栗本慎一郎・慶伊富長・児玉信次郎・廣田鋼蔵『創発の暗黙知—マイケル・ポランニー その哲学と科学—』青玄社（1987）。

唐木田健一「定量的科学におけるあいまいさについての考察」『化学史研究』第16巻（1989）：49-54。

ガリー・ガッティング（成定薫・金森修・大谷隆昶訳）『理性の考古学：フーコーと科学思想史』産業図書（1992）。

金森修『バッシュラール：科学と詩』現代思想の冒険者たち，講談社（1996）。

唐木田健一「理論評価におけるいわゆる「社会的要因」の関与について」『化学史研究』第27巻（2000）：169-175。

金森修『科学的思考の考古学』人文書院（2004）。

ジェンダーと科学

- 小川真里子「Women in Science ことはじめ」『化学史研究』第19巻（1992）：110-122.
- ロンダ・シービンガー（小川真里子・藤岡伸子・家田貴子訳）『科学史から消された女性たち』工作舎（1992）.
- エヴリン・フォックス・ケラー（幾島幸子・川島慶子訳）『ジェンダーと科学：プラトン、ペーコンからマクリントックへ』工作舎（1993）.
- L. J. シェパード（小川真里子・服部範子・小田敦子訳）『ヴェールをとる科学：科学と女性性』誠信書房（1997）.
- 川島慶子「「ロージー」のめがね—試論：科学者伝における「言説」と「ジェンダー」」『化学史研究』第25巻（1998）：194-209.
- マーガレット・アーリク（上平初穂・上平恒・荒川泓訳）『男装の科学者たち：ヒュパティアからマリー・キュリーへ』北海道大学図書刊行会（1999）.
- 猿橋勝子監修『親愛なるマリー・キュリー：女性科学者10人の研究する人生』東京図書（2002）.
- 川島慶子『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ，18世紀フランスのジェンダーと科学』東京大学出版会（2005）.

論文 集

- 渡辺正雄『文化史における近代科学』未来社（1963）.
- 伊東俊太郎『文明における科学』勁草書房（1976）.
- 村上陽一郎編『科学史の哲学』朝倉書店（1980）.
- 吉仲正和『科学者の発想：ガリレイ・ニュートン・寺田寅彦・橋田邦彦』玉川大学出版部（1984）.
- 佐々木力『科学革命の歴史構造』上下巻，岩波書店（1985）.
- M. L. R. ボネリ・W. R. シエイ編（村上陽一郎ら訳）『科学革命における理性と神秘主義』新曜社（1985）.
- 伊東俊太郎・村上陽一郎編『講座科学史1 西欧科学史の位相』培風館（1989）.
- 伊東俊太郎・村上陽一郎編『講座科学史2 社会から読む科学史』培風館（1989）.
- 伊東俊太郎・村上陽一郎編『講座科学史3 比較科学史の地平』培風館（1989）.
- 横山輝雄・井山弘幸・橋本毅彦編『科学における論争・発見』木鐸社（1989）.
- 大野誠・小川真里子編著『科学史の世界』丸善（1991）.
- 佐々木力『近代学問理念の誕生』岩波書店（1992）.
- 下村寅太郎『下村寅太郎著作集2 近代科学史論』みすず書房（1992）.
- 吉本秀之・川崎勝・大野誠・藤井清久・柏木肇・梅田淳・古川安・鎌谷親善・亀山哲也『科学と国家と宗教』平凡社（1995）.
- 日吉芳朗『足跡（あしあと）』私製本（2003）.
- 金森修『科学的思考の考古学』人文書院（2004）.

化学史の通史

- 松野吉松『一般化学及化学史』共立社（19—）.
- 久木田隊伍『化学史及化学大家伝』多良木出版所（1916）.
- 中瀬古六郎『世界化学史』カニヤ書店（1924）.

- 中瀬古六郎『近代化学史』カニヤ書店 (1927).
- 西田博太郎・益田苦良『化学史概説』寶文館 (1927).
- 山岡望『化学史伝』(初版) 裳華房 (1927): (脚注版) 内田老鶴圃新社 (1968).
- 中瀬古六郎『化学史』岩波書店 (1931, 増訂版 1933).
- 中瀬古六郎『世界化学史要』山雅房 (1942).
- スヴェドベリー (田中實訳)『物質観の歴史』白水社 (1942, 新版 1952).
- 久保昌二『化学史: 化学理論發展の歴史的背景』上・下巻, 白水社 (1949, 1950).
- 田中実『化学の歴史』学芸図書 (1951).
- 白井俊明編『化学の歴史』毎日新聞社 (1954).
- 田中実『近代化学史: 化学理論の形成』中央出版 (1954).
- 初等化学講座編集委員会編『化学の歴史』朝倉書店 (1965).
- チャールス・A・ライヘン著 (田中実訳)『化学の歴史』恒文社 (1965).
- 武田和子『化学と人間の物語: たのしく読める化学史』河出書房新社 (1966).
- 吉岡甲子郎・竹内敬人『化学の歴史』出光書店 (1973).
- 都築洋次郎『化学史: その思想と技術』朝倉書店 (1966, 補訂版 1976).
- 紫藤貞昭・都築洋次郎監修『化学のあゆみ』第一法規出版 (1970).
- A. サトクリッフ・A. P. D. サトクリッフ (市場泰男訳)『エピソード科学史 1 化学編 (1)』社会思想社 (1971).
- A. J. アイド (鎌谷親善・藤井清久・藤田千枝訳)『現代化学史』全 3 巻, みすず書房 (1972).
- A. フィンドレイ (都築洋次郎・塩川久男訳)『近代化学史』講談社 (1972).
- 田中実『科学の歩み: 物質の探求』ポプラ社 (1974).
- 山岡望「化学史塵 - 100 終 -」『アロマティックス』26 (9・10) ([1974.10]).
- 山岡望『化学史筆』内田老鶴圃新社 (1976).
- アイザック・アシモフ (玉虫文一・竹内敬人訳)『化学の歴史: プロメテウスから原子力まで』河出書房新社 (新装版 1977).
- 山岡望『化学史談 V: ベンゼン祭』内田老鶴圃新社 (1977).
- 山岡望『化学史傳』内田老鶴圃新社 (1979).
- 大沼正則「化学・その歴史と理論」(井本稔・大沼正則・道家達将・中川直哉編)『化学のすすめ』筑摩書房 (1980) 所収.
- 阪上正信『化学史の道・時とともに歩みつつ』私製本 (1981).
- H. M. レスター (大沼正則監訳, 脇岡義人・内田正夫訳)『化学と人間の歴史』朝倉書店 (1981).
- 渡辺啓・竹内敬人『読み切り化学史』東京書籍 (1987).
- サバドバリー (阪上・本浄・木羽・藤崎共訳)『分析化学の歴史』内田老鶴圃 (1988).
- D. M. ナイト (藤井清久訳)『化学の超経験的部分』内田老鶴圃 (1988).
- 日本化学会編『化学史・常識を見直す: 教科書の誤りはなぜ生まれたか?』講談社ブルーバックス (1988).
- 篠英之『百万人の化学史: 「原子」神話から実体へ』アグネ承風社 (1989).
- 曹元宇 (木田茂夫・山崎昶訳)『中国化学史話』(上・下), 裳華房 (1990).
- 松岡敬一郎『化学史』霞ケ関出版 (1991).
- 竹内敬人・山田圭一『化学の生い立ち』大日本図書 (1992).

- 竹内敬人『化学史』放送大学（1993）。
- 島尾永康『中国化学史』朝倉書店（1995）。
- 橋本毅彦『物理・化学通史—自然哲学から巨大科学まで』放送大学教育振興会（1999）。
- Edv. Hjelt（中神照太・横田徳郎訳）『古代より現代に至る有機化学史』（原著1916年刊行）私家版（2003）。
- 立花太郎『化学と化学史—化学者のための化学史案内—』私家版（2003）。
- W. H. ブロック（大野誠・梅田淳・菊池好行訳）『化学の歴史 I』朝倉書店（2003）。
- 五島綾子・中垣正幸『NANO ナノの世界が開かれるまで』海鳴社（2004）。
- 松本泉『偉人と語るふしぎの化学史：化学法則が生み出されるプロセスを追体験する』講談社ブルーバックス（2005）。
- アーサー・グリーンバーグ（渡辺正・久村典子訳）『痛快化学史』朝倉書店（2006）。

化学技術・化学工業の通史

- フェルフル&ズュッセングート（原野太郎訳）『化学技術史』慶應書房（1942）。
- 山崎俊雄『化学技術史：大工業と化学技術』（科学史大系6）中教出版（1953）。
- 道野鶴松『化学技術史』朝倉書店（1965）。
- 山田圭一『現代化学技術史』コロナ社（1966）。
- 本田一二『ものがたり化学技術史』科学情報社（1970）。
- 高橋武雄『化学工業史』産業図書（1973）。
- 加藤邦興『化学の技術史』オーム社（1980）。
- 加来祥男『ドイツ化学工業史』ミネルヴァ書房（1986）。
- 鈴木明『人物・化学技術史』日刊工業新聞社（1987）。
- 岡崎達也『近代化学技術史ノート』（改訂第2版），徳島化学工学懇話会（1990）。
- フレッド・アフタリオン（柳田博明訳）『国際化学産業史』日経サイエンス社（1993）。

人物科学史

- 菅井準一ら『物理学者傳記・化学者傳記』（岩波講座物理学及び化学；別項）岩波書店（19—）。
- 矢川徳光『不滅の科学者：ケプラー，ガリレオ，ニュートン』潮文閣（1943）。
- 岡邦雄『大科学者傳：コペルニクス，ブラーエ，ガリレオ，ケプラー，ニュートン：生涯と學説』文理書院（1948）。
- 菅井準一『真理愛の科学者：パスカル・パストゥール・キューリー夫妻の物語』文理書院（1950）。
- J. G. クラウザー（鎮日恭夫訳）『産業革命期の科学者たち』岩波書店（1964）。
- 原光雄『化学を築いた人々』中公自然選書（1973）。
- 植村琢『化学領土の開拓者たち』朝倉書店（1976）。
- マノロフ（早川光雄訳）『化学をつくった人びと』上下，東京図書（1979）。
- セグレ（久保亮五・矢崎裕二訳）『X線からクォークまで：二十世紀の物理学者たち』みすず書房（1983）。
- 東京工業大学科学史ゼミナール編『宇宙とその法則をめぐる』（英文で読む大科学者のことば1）講談社（1985）。
- 東京工業大学科学史ゼミナール編『物質と生命をめぐる』（英文で読む大科学者のことば2）講談社

(1985).

ポーター (市場泰男訳)『大科学者たちの肖像』朝日新聞社 (1989).

村上枝彦『人物化学史事典：化学をひらいた人々』海游舎 (1994).

小山慶太『ケンブリッジの天才科学者たち』新潮社 (1995).

園部利彦『化学者 111 話：化学が歩んだ道』近代文芸社 (1995).

竹内均『科学の世紀を開いた人々 く上』ニュートンプレス (1999).

アナン『大学のドンたち』みすず書房 (2002).

島尾永康『人物化学史：パラケルススからポーリングまで』朝倉書店 (2002).

竹内均編『大事業をおこした技術者列伝：ブルーネル/ソルベー/ツィオルコフスキー』ニュートンプレス (2003).

竹内均編『現代物理学の扉を開いた人々：ラザフォード/ボーア/キュリー/湯川秀樹』ニュートンプレス (2003).

アブラハム・パイス (杉山滋郎・伊藤伸子訳)『物理学者たちの 20 世紀：ボーア、アインシュタイン、オッペンハイマーの思い出』朝日新聞社 (2004).

ウォルター グラットザー (安藤喬志・井山弘幸訳)『ヘウレーカ！ ひらめきの瞬間—誰も知らなかった科学者の逸話集』化学同人 (2006).

化学史の方法

原光雄「化学史の方法論」『科学史研究』第 1 号 (1941)：39-83.

原光雄「近代化学成立の方法論的基礎—「化学史の方法論」への続論」『科学史研究』第 2 号 (1942)：13-32.

原光雄『化学入門』岩波新書 (1953).

大沼正則「原光雄氏の著書“化学入門”をめぐって」『科学史研究』第 28 号 (1954)：30-34.

大沼正則「原光雄氏の著書“化学入門”をめぐって (続)」『科学史研究』第 30 号 (1954)：14-17.

田辺振太郎「認識論と化学史の関係について」『科学史研究』第 31 号 (1954)：28-29.

大沼正則「化学概論と化学史：文科系向化学教科書から」『東京経大会誌』通号 21 (1958).

藤井陽一郎「化学史—近代化学の成立をめぐって—」『科学史研究』第 II 期第 10 巻 (通号 106) (1971).

柏木肇「化学史：近代化学の成立をめぐって」『科学史研究』第 2 期第 12 巻 (通号 106) (1973)：49-65.

柏木肇「化学史, By whom, For whom—その Historiography に関連して—」『化学史研究』第 1 号 (1974)：2-10.

仁田勇「化学史研究の健やかな発展を望んで」『化学史研究』第 2 号 (1974 年)：1-2.

田辺振太郎「化学史の Historiography と構造主義」『化学史研究』第 3 号 (1975)：4-10.

岡村誠三「基礎科学として重要な化学史研究」『化学史研究』第 30 号 (1985 年)：1.

廖正衡 (八耳俊文訳)「化学史研究に関する理論問題」『化学史研究』第 32 号 (1985)：125-135.

柏木肇「化学と化学史」『化学史研究』第 34 号 (1986)：1-2.

島尾永康「中国化学史研究の展望」『化学史研究』第 35 号 (1986 年)：72-81.

柏木肇「化学史, ディシプリンへの道」『化学史研究』第 38 号 (1987 年)：1-3.

金森修「分析への認識論的障害」『化学史研究』第 44 号 (1988)：101-111.

唐木田健一「科学史におけるのりこえの視点」『化学史研究』第 45 号 (1988)：185-190.

- 立花太郎「化学者による化学者のための化学史」『化学史研究』第17巻（1990）：1-2.
金森修「化学認識の言語束縛性」『化学史研究』第18巻（1991）：211-220.
半谷高久「科学史入門—化学史の見直し」『科学史研究』第2期第32巻（通号188）（1994）.
Trevor H. Levere “Past and Present in the History of Chemistry”『化学史研究』第32巻（2005）：1-19.
Michael Chayut, “From the Periphery to Scientific Revolutions”. *Historia Scientiarum*, **15**（2005）：1-22.

化学史と教育

- 山本〔シュン〕—「科学史と化学教育法について—化学史における19世紀初頭の化学量論 Stoichiometry に関する弁証論的展開を case history method の例として（安藤公平教授追悼号）」『日本大学文理学部（三島）研究年報・自然科学編』通号26（1977）.
林良重「化学教育における化学史の活用（これからの中学理科と高校化学〈特集〉）」『化学教育』**27**(4)（1979.08）.
伊能敬「博物館と化学のあゆみ（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
岩田敦子「化学の源流への旅—若人のための化学史読み物（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
金子六郎「産業考古学と化学教育（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
阪上正信「化学史の化学教育における意義と役割（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
竹林松二「私の化学史研究—その目的とおもしろさ（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
林良重「化学史教材と化学教育について（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
広田鋼蔵「体験による化学史研究論—化学教育への活用（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
武藤伸「日本の天然物化学—その一側面を探索（化学史-1-）」『化学教育』**30**(2)（1982.04）.
伊藤信隆「[理科2]における化学史の事例—[理科2]の解説と化学史16mm短尺フィルムの紹介（化学史-2-）—（高等学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
大熊華子「燃焼—化学変化入門の授業（化学史-2-）—（中学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
倉田正也「企業における化学史の実感（化学史-2-）—（産業と化学史）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
須賀昭一「化学史を背景とした周期表の指導（化学史-2-）—（高等学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
竹内敬人「ワンポイント化学史のすすめ（化学史-2-）—（大学における化学史の活用）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
鳥山由子「化学史教材を使った中学校での授業例—質量保存の法則を中心にして（化学史-2-）—（中学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
馬場宏明「有機電子論—その生い立ちと発展（化学史-2-）—（大学における化学史の活用）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
日吉芳朗「天然物による実験とその発展—化学史でたどる化学実験より（化学史-2-）—（高等学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
松本昌治「電池（化学史-2-）—（高等学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
宮田光男「実験を中心とした気体に関する化学史の取り扱いについて（化学史-2-）—（高等学校における化学史教材）」『化学教育』**30**(3)（1982.06）.
廖正衡（小川郁夫訳）「化学史と化学教育の結合について」『化学史研究』第25号（1983年）：154-160.

- 阪上正信『たのしい化学実験—化学史でたどる』講談社 (1984).
- 島原健三「化学史・常識のウソ (1) はじめに—ウソの生まれる土台」『化学教育』**34**(4) (1986.08).
- 井上友昭「高校生徒実験における He, N₂, O₂ の分子量測定とアボガドロの法則の検証」『化学と教育』**36**(2) (1988.04).
- 石川伸明「プリーストリーの実験を話のきっかけにして地球的規模で環境問題を考える必要を説く授業の実践例」『生物教育』**29**(1・2) (1989.06).
- 柏木肇「化学史と化学教育」『化学史研究』第 16 巻 (1989): 1-3.
- 島原健三「(化学史) 年表作りの難しさと年表使いの難しさ」『化学と教育』**37**(1) (1989.02).
- 松森靖夫・雨宮祐二「呼吸と光合成における気体の出入りに関する高校生の認識状態について—プリーストリーの実験場面を事例にして」『日本理科教育学会研究紀要』**39**(2) (1998).
- 山田大隆「総合的理科教育と科学史—ケースヒストリーを活用した「理科基礎」の展開プラン—」『サイエンスネット』数研出版 7 号 (1999.11): 5-8.
- 山田大隆「総合的理科教育と科学史 (2)—科学者伝による「理科基礎」科目の展開例 (アインシュタイン)—」『サイエンスネット』数研出版 10 号 (2000.11): 1-3.
- 杉山滋郎編『科学史資料集ならびに科学史を利用した授業案集の開発に関する研究: 高校「数学基礎」「理科基礎」科目のために』(平成 11 年度~13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (1)) 研究成果報告書) (2002 年).
- 河野俊哉「化学教育のための化学史」『化学史研究』通号 104 号 (2003): 177-183.
- オリヴァー・サックス (斉藤隆央訳)『タングステンおじさん: 化学と過ごした私の少年時代』早川書房 (2003).
- 鬼塚史朗『近代科学の足跡をたどる: ニュートン力学の確立過程を概観する: 物理教育資料』東京図書出版会 (2004).
- 西條敏美『理科教育と科学史』大学教育出版 (2005).

化学の発見史

- 立山二郎『偉大なる法則の発見—原子の歴史—』民友社 (1950).
- 日本化学会『化学の発明発見』大日本図書 (1958).
- ヨッフエ (永井芳男訳)『化学が創る新しい世界』法政大学出版会 (1960); コスモスブックス (1972).
- 大沼正則『化学の発明発見物語: 酸素ガスからナイロンまで』国土社 (1983).
- ロイストン・M. ロバーツ (安藤喬志訳)『セレンディピティー—思いがけない発見・発明のドラマ』化学同人 (1993).
- アシモフ (小山慶太・輪湖博共訳)『アイザック・アシモフの科学と発見の年表』丸善株式会社 (1996).
- 竹内敬人『化学の基本 7 法則』岩波ジュニア新書 (1998).
- 竹内均編『化学の大発見物語: ラボアジエ, ブラウン, 高峰譲吉』ニュートンプレス (2002).

原子論史・物質観史

- 田中実『原子論の誕生・追放・復活』三一書房 (1949).
- Minoru Tanaka, “Ein Beitrag zur Geschichte der Atomistik: Über die Rolle der chemischen Forschung beim Werdegang der Modernen Atomistik”, *Japanese Studies in the History of Science*, No. 1 (1962):

111-116.

Minoru Tanaka, "Ein Beitrag zur Geschichte der Atomistik (II) : Über die Gründe der Verspätung der Anerkennung der Avogadroschen Hypothese", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 2 (1963) : 127-135.

Minoru Tanaka, "Über Ursprünge skeptischer Auffassungen gegen Atomhypothese der Chemie neuuzehnten Jahrhunderts : Ein Beitrag zur Geschichte der Atomistik (III)", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 5 (1966) : 87-99.

Isao Ohami, "On Indian Atomism (I)", *Japanese Studies of History of Science*, No. 6 (1967) : 41-46.

Minoru Tanaka, "Chemical and Physical Models for Atomistic Notion—Its Conceptual Development in Relation to the Evolution of the Concept of Chemical Substance. A Contribution to the History of Atomism (IV)", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 8 (1969) : 125-143.

スコーンランド（広重徹・常石敬一訳）『原子の歴史：ドルトンから量子力学まで』みすず書房（1971）。

Minoru Tanaka, "Einige methodologischen Probleme des klassischen Begriffs der chemischen Struktur und dessen Übergang zum gegenwärtigen Begriff—Beitrag zur Geschichte der Atomistik (V)", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 11 (1972) : 113-126.

江沢洋『だれが原子をみたか』岩波書店（1976）。

板倉聖宣編『原子・分子の発明発見物語：デモクリトスから素粒子まで』国土社（1983）。

板倉聖宣『原子論の歴史』上・下巻，仮説社（2004）。

井上尚之『原子発見への道—ギリシャからドルトンへ』関西学院大学出版会（2006）。

元素の発見史・物質と歴史

ヨハンゼン（三谷耕作訳）『鐵の歴史』慶応書房（1942）。

オッター・ヨハンセン（市川弘勝・鈴木章共訳）『一般人の鐵の歴史』興亞書房（1944）。

高見沢栄寿「ニッケル発見史論考（寄書）」『科学史研究』第34号（1955）：43-47。

スミス（日本銅センター訳）『銅の6000年』アグネ（1966）。

大作勝・称宜田久男「藍（青藍）—インジゴの研究を通して見た構造化学史の一断片」『化学史研究』第7号（1978）：27-31。

杉下龍一郎「科学史資料としての美術材料」『化学史研究』第9号（1979年）：19-22。

マクドナルド&ハント（田中貴金属工業株式会社訳）『プラチナとその同族金属の歴史』田中貴金属工業株式会社（1983）。

大沼正則編『元素の事典』三省堂（1985）。

杉下竜一郎「絵画の顔料と化学史」『色材協会誌』59(3)（1986.03）。

シドニー・W. ミンツ（川北稔・和田光弘訳）『甘さと権力—砂糖が語る近代史』平凡社（1988）。

M. E. ウィークス・H. M. レスター（大沼正則監訳）『元素発見の歴史』全3巻，朝倉書店（1988-90）。

川井雄「古くて新しき問題—ガラスの構造について—」『化学史研究』第16巻（1989）：11-19。

R. P. マルソーフ（市場泰男訳）『塩の世界史』平凡社（1989）。

岡田功編『化学元素百科—化学元素の発見と由来—』オーム社（1991）。

D. N. トリフォノフ・V. D. トリフォノフ（阪上正信・日吉芳朗訳）『化学元素発見のみち』内田老鶴園（1994）。

- 増田義郎『黄金の世界史』小学館 (1997).
- 青木康征『南米ポトシ銀山』中公新書 (2000).
- 近藤仁之「水銀アマルガム法, 水銀供給源, 及び「価格革命」: ポトシ銀山とウアンガベリ水銀鉱山」『社会経済史学』Vol. 25, No. 2-3 (1959), pp. 128-158.
- 北村次一「オーストラリ水銀業における初期独占」『社会経済史学』Vol. 25, No. 5 (1959), pp. 1-29.
- 藤瀬裕「貝紫と生物」『化学史研究』第 26 卷 (1999): 34-44.
- 奥山修平「超ウラン元素の探求—グレン・シーボークとエドウィン・マクミラン」『科学技術ジャーナル』(2001.2): 42-43.
- ピーター・バーンスタイン (鈴木主税訳)『ゴールド—金と人間の文明史』日本経済新聞社 (2005).

薬・毒の歴史

- 山崎幹夫『毒の話』中央公論新社 (1985).
- 杉山二郎・山崎幹夫『毒の文化史』學生社 (1990).
- 山崎幹夫『薬の話』中央公論社 (1991).
- 石田行雄『不老不死と薬—薬を求めた人間の歴史』築地書館 (1992).
- ジョン・マン (山崎幹夫訳)『殺人・呪術・医薬—毒とくすりの文化史』東京化学同人 (1995).
- 山崎幹夫『毒薬の誕生』角川書店 (1995).
- ジャン・タルデュード・マレッシ (橋本到・片桐祐訳)『毒の歴史—人類の営みの裏の軌跡』新評論 (1996).
- 山崎幹夫『歴史の中の化合物—くすりと医療の歩みをたどる』東京化学同人 (1996).
- ケンス・J・カーペンター (北村二郎・川上倫子訳)『壊血病とビタミン C の歴史: 「権威主義」と「思いこみ」の科学史』北海道大学図書刊行会 (1998).
- 月澤美代子「インスリンの発見—バンティング, ベスト, マクラウド, コリッパー」『科学技術ジャーナル』(1999.3): 42-43.
- ジャレド・ダイヤモンド (倉骨彰訳)『銃・病原菌・鉄—1 万 3000 年にわたる人類史の謎』上・下巻, 草思社 (2000).
- 月澤美代子「ビタミンの発見—エイクマン, ペーケルハリング, 鈴木梅太郎, フンク, ホブキンズ—」『科学技術ジャーナル』(2000.3): 48-49.
- 山川浩司『国際薬学史: 東と西の医薬文明史』南江堂 (2000).
- 山崎幹夫『歴史を変えた毒』角川書店 (2000).
- 山崎幹夫『毒薬の誘惑』角川書店 (2001).
- サラ・オーガスタ・ディクソン (たばこ総合研究センター訳)『万能の薬か高貴な毒か—16 世紀のたばこ論争』山愛書院 (2002).
- レスリー・アイヴァーセン (廣中直行訳・鍋島俊隆解説)『薬』岩波書店 (2003).
- 山崎幹夫『面白いほどよくわかる毒と薬—天然毒, 化学合成毒, 細菌毒から創薬の歴史まで, 毒と薬のすべてがわかる!』日本文芸社 (2004).

試薬の歴史

- 本净高治「無機化合物の有機溶媒への抽出の歴史—1842~1941—」『化学史研究』第 16 号 (1981): 22-27.
- 日吉芳朗「プルシアンブルーの源流をたずねる」『化学史研究』第 23 号 (1983 年): 56-60.

- 本浄高治「金属イオンの分析に用いられる合成有機試薬の歴史（1825～1953）」『化学史研究』第22号（1983年）：9-18.
- 竹林松二「フェーリング液とトレンス試薬」『化学史研究』第39号（1987）：73-76.
- 日吉芳朗・中山政紀「酒石酸とシュウ酸の単離実験—その歴史の実験から—」『化学史研究』第42号（1988年）：13-20.
- 本浄高治「化学分析において用いられた天然有機試薬の起源—定性分析試薬，酸・塩基指示薬，酸化・還元指示薬について—」『化学史研究』第43号（1988年）：63-66.
- 日吉芳朗・中辻慎一「赤血塩の発見をめぐる」『化学史研究』第44号（1988年）：112-118.
- 日吉芳朗「発見時の方法による Magnus 塩と Zeise 塩の合成—教材化と Zeise 塩の発見における疑問点—」『化学史研究』第16巻（1989）：97-103.
- 中原勝儼「酸と塩基」『化学史研究』第17巻（1990）：30-49.
- 竹林松二「フェント試薬を用いる酸化反応—その発見と解明—」『化学史研究』第19巻（1992）：36-39.
- 竹林松二「シッフ塩基とシッフ試薬」『化学史研究』第20巻（1993）：20-24.
- 日吉芳朗「プルシアンブルーの化学」『化学史研究』第23巻（1996）：54-67.
- 中辻慎一・日吉芳朗「レオポルド・グメリンによる赤血塩の発見」『化学史研究』第24巻（1997）：316-328.

実験器具・装置・実験室

- 藤田博「超遠心法の発展—超遠心機誕生からの半世紀を回顧して（生化学史シリーズ-1-）」『蛋白質核酸酵素』20(7)（1975.06）.
- 柴田和雄「可視・紫外分光測定法の伸展—私が接したその発達の一側面と懷古談（生化学史シリーズ-4-）」21(7)（1976.07）.
- 本浄高治「人名化学実験器具の起源」『化学史研究』第29号（1984）：146-155.
- O. T. ベンフィー（田坂興亜訳）「現代科学への東洋の貢献—化学機器の発明と明治期の科学者をめぐって—」『化学史研究』第38号（1987）：4-15.
- 橋本毅彦「実験と実験室（ラボラトリー）をめぐる新しい科学史研究」『化学史研究』第20巻（1993）：107-121.
- マルコ・ベレッタ（吉本秀之訳）「化学実験室の図像表示—ルネサンスからラヴォワジェまで—」『化学史研究』第27巻（2000）：1-15.
- 菊池好行「『舍密便覧』の原著者ヘンドリック・クラメル・ホメス—オランダにおける化学実験操作の図表化の社会的背景—」『化学史研究』第27巻（2000）：129-155.
- Nathan M. Brooks, “Chemistry Laboratories in Russia: 1700-1917”, *Historia Scientiarum*, 14 (2004) : 89-100.
- デービス・ベアード（松浦俊輔訳）『物のかたちをした知識：実験機器の哲学』青土社（2005）.

化学史研究文献

- アーネスト・ハムリン・ハントレス（永井芳男・増田杜男訳）『バイルシュタイン要典』白水社（1944）.
- 柏木肇「Ambix 最近の11年」『化学史研究』第3号（1975）：18-46.
- 山岡望「化学史関係の蔵書目録を作って配りましょう」『化学史研究』第8号（1978）：18-19.

- 柏木肇「アレンビック・クラブ・リプリントの目録」『化学史研究』第9号(1979):40-41.
藤井清久「*Chymia*の巻別目次と事項索引」『化学史研究』第12号(1980):36-43.
柏木肇「化学史文献—その種類と利用法について—」『化学史研究』第20号(1982):104-113.
柏木肇「50号までの足跡」『化学史研究』第17巻(1990):3-7.
大野誠「『化学史研究』20年間の歩み—回顧と展望—」『化学史研究』第20巻(1993):283-293.
小川雅彌著者代表『化学文献の調べ方:ケミカルアブストラクツ, バイルシュタイン, グメリン』化学同人(1995).

その他

- 高田誠二著『単位の進化:原始単位から原子単位へ』講談社(1974).
林良重「ヨーロッパ化学史探訪(化学と文化財〈特集〉)」『化学教育』27(1)(1979.02).
石田純郎『ヨーロッパ医科学史散歩:医史跡・医科学史博物館25カ国ガイド』考古堂書店(1996).
大塚滋「「食」の化学史—人はなにを, どう食べてきたのか」『Scias』2(21)[1997.11.07].
石田純郎『アジア医科学史散歩—アジア9カ国文化の旅ガイド』考古堂書店(1999).
阪上正信『恩故巡訪』私家版(1999).
唐木田健一「マイケル・ポラーニの進化思想」『化学史研究』第29巻(2002):31-42.
小岩昌宏『金属学プロムナード—セレンディピティを追って—』アグネ技術センター(2004).
飯田賢一「工場史へのひとつの反省—ことに鉄鋼業について—(寄書)」『科学史研究』第38号(1956年):36-40.
三輪礼二郎『化学の創られかた—一粒の砂の中にも宇宙がある』東京図書(2005).
下沢隆・田矢一夫・吉田俊久『身のまわりの化学』裳華房(1987).
B. ハイルマン(村上徹訳編)『プリニウスの迷信:荒れ狂うフッ素論争(フッ素論争に関するアメリカ化学学会の特別報告)』績文堂出版(1989).

B. 時 代 別

化学考古学

- Teruko Muroga, "A Chemical Study on Some Archaeological Samples from Marlik in Iran", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 8 (1969): 99-105.
Cult W. Beck and Teruko Muroga, "The Origin of the Amber found at Tepe Marlik", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 11 (1972): 99-102.
馬淵久夫・富永健編『続考古学のための化学10章』東京大学出版会(1986).

古 代

- ディオスコリデス(鷲谷いづみ訳;小川鼎三他編)『ディオスコリデスの薬物誌』エンタプライズ(1983).
プリニウス(中野定雄他訳)『プリニウスの博物誌』3分冊,雄山閣出版(1986).
プリニウス(岸本良彦他訳,大槻真一郎編)『プリニウス博物誌 植物篇,植物薬剤篇』八坂書房(1994).
H. ディールス(平田寛訳)『古代技術』鹿島出版会(1970).
J. L. ハイベルグ(平田寛訳)『古代科学』鹿島出版会(1970).

大槻真一郎『ディオスコリデス研究』エンタプライズ（1983）。

R. J. フォーブス（平田寛・道家達将・大沼正則・栗原一郎・矢島文夫監訳）『古代の技術史（上）—金属—』朝倉書店（2003）。

R. J. フォーブス（平田寛・道家達将・大沼正則・栗原一郎・矢島文夫監訳）『古代の技術史（中）—土木・鉱業—』朝倉書店（2004）。

プラトン

プラトン（山本光雄編）『プラトン全集』角川書店（1973）。

プラトン（田中美知太郎、藤沢令夫編）『プラトン全集』全10巻、岩波書店（1974）。

アレクサンドル・コイレ（川田殖訳）『プラトン』みすず書房（1972）。

アンデルス・ヴェドベリ（山川偉也訳）『プラトンの数理哲学』（阪南大学翻訳叢書1）法律文化社（1975）。

金松賢諒『プラトンの神学と宇宙論』法蔵館（1976）。

カール・R・ポパー（内田詔夫・小河原誠訳）『プラトンの呪文』未来社（1980）。

熊谷陽一「PLATONの物質理論」『化学史研究』第21号（1982年）：135-142。

K. ライデマイスター（中村清訳）『ギリシア人の精密思考：ユークリッド・プラトン・アリストテレス解釈試論』玉川大学出版部（1982）。

坂本賢三ら『技術 魔術 科学』（新・岩波講座哲学8）岩波書店（1986）。

新プラトン主義協会編『新プラトン主義の影響史』昭和堂（1998）。

新プラトン主義協会編『新プラトン主義の原型と水脈』昭和堂（2000）。

アリストテレス

アリストテレス（出隆監修；山本光雄編）『アリストテレス全集』全17巻、岩波書店（1968-1972）。

大沼正則編『アリストテレスからヘロンまで』（原典対照自然科学思想史概論/古代編；第2分冊），[出版者不明]，19—。

松本厚『アリストテレスの自然哲学』弘文堂書房（1948）。

田村松平責任編集『ギリシアの科学』（世界の名著9）中央公論社（1972）。

山本光雄『アリストテレス：自然学・政治学』岩波新書（1977）。

沢田允茂ら編『科学と存在論』思索社（1980）。

G. E. R. ロイド（山野耕治・山口義久訳）『初期ギリシア科学：タレスからアリストテレスまで』法政大学出版局（1994）。

G. E. R. ロイド（川田殖訳）『アリストテレス：その思想の成長と構造』みすず書房（1998）。

G. E. R. ロイド（山野耕治・山口義久・金山弥平訳）『後期ギリシア科学：アリストテレス以後』法政大学出版局（2000）。

坂下浩司『アリストテレスの形而上学：自然学と倫理学の基礎』岩波書店（2002）。

千葉恵『アリストテレスと形而上学の可能性：弁証術と自然哲学の相補的展開』勁草書房（2002）。

原子論など

エピクロス（出隆・岩崎允胤訳）『エピクロス：教説と手紙』，岩波文庫（2002）。

ルクレティウス（藤沢令夫・岩田義一訳）「事物の本性について」『ウェルギリウス；ルクレティウス』（世

- 界古典文学全集 21), 筑摩書房 (1965).
- 出隆『古代原子論哲學』(1・2) 東大協同組合出版部 (1946).
- ジャン・ブラン (有田潤訳)『エピクロス哲学』白水社文庫クセジュ (1960).
- 西川亮『デモクリトス研究』理想社 (1971).
- 斎藤忍随ら『哲学の原型と発展』(新・岩波講座哲学 14. 哲学の歴史 1) 岩波書店 (1985).
- 鈴木幹也『エンペドクレス研究』創文社 (1985).
- ジル・ドゥルーズ (原田佳彦・丹生谷貴志訳)『原子と分身：ルクレティウス/トゥルニエ』哲学書房 (1986).
- 潘吉星 (島尾永康訳)「古代中国の化学の概説」『化学史研究』第 34 号 (1986 年): 3-8.
- 新海邦治『初期多元論研究序説：エンペドクレスとアナクサゴラス』学術図書出版社 (1989).
- 堀田彰『エピクロスとストア』清水書院 (1989).
- エルヴィン・シュレーディンガー (河辺六男訳)『自然とギリシャ人：原子論をめぐる古代と現代の対話』工作舎 (1991).
- 和泉ちえ「古代ギリシャ原子論再考」『化学史研究』第 20 卷 (1993 年): 233-242.
- 北川透『デモクリトスの井戸』思潮社 (1995).
- 西川亮『古代ギリシアの原子論』溪水社 (1995).
- ミッシェル・セール (豊田彰訳)『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生：河川と乱流』法政大学出版局 (1996).
- カール・マルクス (中山元ら訳)『デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異』(マルクス・コレクション 1) 筑摩書房 (2005).

中 世

- アルベルトゥス・マグヌス (沓掛俊夫訳)『鉤物論』朝倉書店 (2004).
- 藪内清編『中国中世科学技術史の研究』角川書店 (1963).
- A. C. クロムビー (渡辺正雄・青木靖三訳)『中世から近代への科学史』上・下巻, コロナ社 (1968).
- E. グラント (横山雅彦訳)『中世の自然学』みすず書房 (1982).
- リン・ホワイト・Jr (内田星美訳)『中世の技術と社会変動』思索社 (1985).
- ハスキングズ (野口洋二訳)『十二世紀ルネサンス』創文社 (1985).
- Yasu Furukawa, "The Emergence of a Medieval Atomic Philosophy: Nicholas of Autrecourt and Anti-Aristotelian Atomism", 『横浜商大論集』Vol. 20, No. 1.2 (1987.3): 245-262.
- 上智大学中世思想研究所編『中世の自然観』創文社 (1991).
- 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス：西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店 (1993).
- 三浦伸夫「アラビア錬金術史の研究動向」『化学史研究』第 24 卷 (1997): 193-204.
- 平井浩「展望：西欧中世・近世化学史の研究動向」『科学史研究』[第 2 期] 第 40 卷 (No. 218) (2001): 65-74.
- 三浦伸夫「ジャービル・イブン・ハイヤーナー初期アラビア錬金術思想史」『化学史研究』第 32 卷 (2005): 153-169.

錬金術

- ピーター・コロシモ（坂齊新治訳）『惑星の錬金術』大陸書房（1976）（付：日夏響「解説錬金術誌」 pp. 209-268）。
- ヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（種村季弘訳）『化学の結婚』紀伊国屋書店（1993）。
- リモジョン・ド・サン=ディディエ（有田忠郎訳）『沈黙の書/ヘルメス学の勝利』白水社（1993）。
- ジャン・デスパニエ（有田忠郎訳）『自然哲学再興/ヘルメス哲学の秘法』白水社（1993）。
- ニコラ・フラメル（有田忠郎訳）『象形寓意図の書/賢者の術概要・望みの望み』白水社（1993）。
- マルクス・マニリウス（有田忠郎訳）『占星術または天の聖なる学』白水社（1993）。
- アルフレッド・モーリー（有田忠郎訳）『魔術と占星術』白水社（1993）。
- マルク=アントニオ=クラッセラム（有田忠郎訳）『闇よりおのずからほとぼしる光（付/ブルーノ・ド・ランサックによる注釈）』白水社（1994）。
- ラムスプリング/マテュラン・エイカン・デュ・マルティノー（有田忠郎訳）『賢者の石について/生ける潮の水先案内人』白水社（1994）。
- チョーサー（榎井迪夫訳）「錬金術師の従弟のはなし」『完訳カンタベリー物語』岩波文庫（1995），（下） pp. 102-139。
- ベン・ジョンソン（小田島雄志訳）「錬金術師」『ヴォルポーネ・錬金術師』白水社（1996）所収。
- ジョン・アディントン・シモンズ（岩崎洋一・古宮照雄訳）「『ベン・ジョンソン』第4章「ジョンソンの傑作」—『錬金術師』の翻訳」『木更津工業高等専門学校紀要』（37）（2004）。
- 文部省編（錦織精之進訳）『金類及錬金術』（文部省百科全書 6-[2]），文部省（1876），青史社（1984）。
- 近重眞澄『東洋錬金術』内田老鶴圃（1929）。
- Masumi Chikashige, *Alchemy and other chemical achievements of the ancient Orient: the civilization of Japan and China in early times as seen from the chemical point of view*, Rokakuho Uchida, 1936.
- F. S. テイラー「錬金術師」『世界ノンフィクション全集 12』筑摩書房（1961）所収。
- 吉田光邦『錬金術：仙術と科学の間』中公新書（1963）。
- Natan Sivin, "On the Reconstruction of Chinese Alchemy", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 6 (1967) : 60-86.
- 田中実「錬金術史考—その化学史における位置」『科学史集刊』（通号 5）（1967）。
- 『季刊 パイディア 10 特集=シンボル・錬金術』竹内書店（1971）。
- ジョセフ・ニーダム「東洋と西洋の連続—アルケミーと化学にみる—」『思想』1972 年 1 月号：120-136。
- R. ベルヌーイ（種村季弘訳）『錬金術—タロットと愚者の旅』青土社（1972）。
- セルジュ・ユタン（有田忠郎訳）『錬金術』白水社文庫クセジュ（1972）。
- Ho Peng Yoke and Beda Lim, "Ts'ui Fang, a Forgotten 11th Century Chinese Alchemist," *Japanese Studies in the History of Science*, No. 11 (1972) : 103-112.
- ベルトウロ（田中豊助・牧野文子訳）『錬金術の起源』内田老鶴圃新社（1973，改稿版。1984）。
- C. G. ユング著（池田紘一・鎌田道生訳）『心理学と錬金術』全 2 巻，人文書院（1976）。
- C. G. ユング & W. パウリ（河合隼雄・村上陽一郎訳）『自然現象と心の構造』海鳴社（1976）。
- ガストン・バシュラール（豊田彰訳）『原子と直観』国文社（1977）。
- F. S. テイラー（平田寛・大槻真一郎訳）『錬金術師』人文書院（1978）。
- アンリ・マスペロ（川勝義雄訳）『道教』平凡社東洋文庫（1978），平凡社（2000）。

- スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ (種村季弘訳) 『錬金術 (イメージの博物誌 6)』平凡社 (1978).
- C. G. ユング+R. ヴィルヘルム (湯浅泰雄・定方昭夫訳) 『黄金の華の秘密』人文書院 (1980).
- M. エリアーデ (大室幹雄訳) 『鍛冶師と錬金術師 (エリアーデ著作集 5)』せりか書房 (1981).
- 平田寛『錬金術の誕生：科学史とその周辺』恒和出版 (1981).
- O. T. Benfey (中山茂解説) “Spinach as an Alchemical Antidote to Heavy Metal Poisoning” 『化学史研究』第 15 号 (1981 年) : 8-12.
- マンリー・P・ホール著 (大沼忠弘ら訳) 『錬金術』(象徴哲学大系 4) 人文書院 (1981).
- ガストン・バシュラル (前田耕作訳) 『火の精神分析』せりか書房 (1983).
- Yasu Furukawa, “Chinese Alchemy: Its Origins and Development” 『横浜商大論集』Vol. 18, No. 1 (1984.9) : 95-110.
- 安江政一「アルケミー, ファルマシー, 錬金術および贗金造りの系譜—中世ヨーロッパにおける薬局技術の化学史的意義をめぐって—」『化学史研究』第 27 号 (1984 年) : 49-56.
- N. セビン著 (中山茂・牛山輝代訳) 『中国の錬金術と医術』思索社 (1985).
- 種村季弘『黒い錬金術』白水 U ブックス (1986).
- A. G. デイプス (坂本賢三訳) 「錬金術」『知のマトリクス』平凡社 (1987), pp. 54-83.
- 佐藤任・小森田精子訳著『インド錬金術』東方出版 (1989).
- 柴田有「初期錬金術の歴史と思想」『講座科学史 I : 西洋科学史の位相』培風館 (1989), pp. 45-82.
- ガストン・バシュラル (本間邦雄訳) 『火の詩学』せりか書房 (1990).
- 澤井繁男『錬金術：宇宙論的生の哲学』講談社現代新書 (1992).
- C. G. ユング (野村美紀子訳) 『変容の象徴』上・下巻, ちくま学芸文庫 (1992).
- 文芸春秋編『オカルティズムへの招待：西欧“闇”の精神史：黒魔術, 錬金術から秘密結社まで』文芸文庫 (1993).
- スタニスラス・クロソウスキー・ド・ローラ著 (磯田富夫・松本夏樹訳) 『錬金術図像大全』平凡社 (1993).
- ヨハanneス・ファブリキウス (大瀧啓裕訳) 『錬金術の世界』青土社 (1995).
- C. G. ユング (池田紘一訳) 『結合の神秘』I, II, 人文書院 (1995, 2000).
- 大槻真一郎編著『記号・図説錬金術事典』同学社 (1996).
- E. J. ホームヤード (大沼正則監訳) 『錬金術の歴史：近代化学の起源』朝倉書店 (1996).
- アンドレーア・アロマティコ (後藤淳一訳) 『錬金術：おおいなる神秘』(「知の再発見」双書 72) 創元社 (1997).
- 岩崎峰子「宮廷仮面劇における「錬金術」」『広島電機大学・広島自動車工業短期大学研究報告』(通号 30) (1997.12).
- 山田慶児『本草と夢と錬金術と』朝日新聞社 (1997).
- ロバート・ジャクソン (五十嵐洋子訳) 『錬金術：黄金と不老不死の妙薬』(開かれた封印古代世界の謎 15) 主婦と生活社 (1998).
- 吉村正和『フリーメイソンと錬金術：西洋象徴哲学の系譜』人文書院 (1998).
- アレン・G. ディーバス (川崎勝・大谷卓史訳) 『近代錬金術の歴史』平凡社 (1999).
- ガレス・ロバーツ (目羅公和訳) 『錬金術大全』東洋書林 (1999).
- ナイジェル・ウィルキンズ (小池寿子訳) 『ニコラ・フラメル 錬金術師伝説』白水社 (2000).
- 澤井繁男『魔術と錬金術』ちくま学芸文庫 (2000).

- 濱田あやの「チョーサー、ベン・ジョンソン、シェイクスピアにみる中世錬金術と「変容」」『神奈川大学大学院言語と文化論集』（通号 6）（2000.3）.
- M-L. フォン・フランツ（垂谷茂弘訳）『ユング思想と錬金術』人文書院（2000）.
- ゲルショム・ショーレム（徳永恂・波田節夫・春山清純・柴崎雅子共訳）『錬金術とカバラ』作品社（2001）.
- 東司昌子「鉛の思想から黄金の思想へー錬金術師ツァラトゥストラ」『哲学論文集』（37）（2001.9）.
- 平井浩「蒸留技術とイスラム錬金術（特集 イスラム文化の香りとハーブー中近東を中心に）」『Aromatopia』10(5)（通号 48）（2001）.
- 山川浩司「科学教養講座 東の薬学・西の薬学（1）古代からの医薬術と錬金術」『理大科学フォーラム』19（1）（通号 211）（2002.1）.
- 森ゆかり「ベン・ジョンソン『錬金術師』におけるサイモン・フォーマン」『愛知工業大学研究報告. A』（37A）（2002.3）.
- 森ゆかり「ベン・ジョンソン『錬金術師』における Geber's Cook」『愛知工業大学研究報告. A』（37A）（2002.3）.
- 嘉陽英朗「煙の錬金術ー16-17 世紀イギリス農学と錬金術化学（特集 社会思想史研究の現在）」『調査と研究』（25）（2002.10）.
- Noboru Okada, "The Invention of Gunpowder and Chinese Alchemy during the Tang Dynasty in China"『薬史学雑誌』37(2)（2002）.
- 高橋義人「ゲーテと錬金術」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』第 24 号（2002）：16-27.
- 平井浩「蒸留術とルネサンスの錬金術ーエクシルから第五精髓，そしてアルカナへ（特集 ルネサンスの文化とハーブ）」『Aromatopia』11(4)（通号 53）（2002）.
- 村本詔司「ユングと錬金術」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』第 24 号（2002）：28-46.
- 林英子・稲場秀明「錬金術師の反応の反応機構についての考察」『化学と教育』51(8)（2003.8）.
- 大野誠「錬金術の基礎理解」『サイエンスネット』（数研出版）21（2004.9）：5-8.
- トマス・レヴェンソン（中島伸子訳）『錬金術とストラディヴァリ：歴史のなかの科学と音楽装置』白揚社（2004）.
- アレクサンダー・ローブ（Masayuki Kosaka 訳）『錬金術と神秘主義：ヘルメス学の博物館』タッシェン・ジャパン（2004）.
- R. J. W. エヴァンズ（中野春夫訳）『魔術の帝国：ルドルフ二世とその世界』平凡社（1988）；ちくま学芸文庫（2006）.
- 柳田錦秀『中国道教錬金術』同友館（2006）.
- 村上嘉室「錬金術」『道教（I）』（平川出版社，1983），pp. 285-326.
- アレクサンダー・ローブ（Masayuki Kosaka 訳）『錬金術と神秘主義：ヘルメス学の陳列室』タッシェン・ジャパン（2006）.

パラケルスス

- パラケルスス（大槻真一郎訳）『奇蹟の医書』工作舎（1980）.
- パラケルスス（ヨラン・ヤコビ編，大橋博司訳）『自然の光』人文書院（1984）.
- パラケルスス「磁石の力について」，「聖ヨハネ草について」，「魔術について」，「神と人の合一について」，

- (中井章子ら訳)『近代の自然神秘思想』(キリスト教神秘主義著作集第16巻) 教文館 (1993).
- パラケルスス (大槻真一郎・澤元互訳)『奇蹟の医の糧：医学の四つの基礎「哲学・天文学・錬金術・医師倫理」の構想』 工作舎 (2004).
- スティルマン (原光雄訳)『パラケルスス』 創元社 (1943).
- 小川政修『パラツェルズス傳』 築地書店 (1944).
- 大橋博司『パラケルススの生涯と思想』 思索社 (1976).
- E. カイザー (小原正明訳)『パラケルススの生涯：近代医学の父、放浪の錬金術師』 東京図書 (1977).
- 種村季弘『パラケルススの世界』 青土社 (1977, 新訂版, 1996).
- 木村雄吉「パラケルススの医学術思想」『自然』(1978年5月号, 6月号, 7月号).
- F. ヴァインハンドル (大橋博司訳)「パラケルススとゲーテの哲学」『モルフォロギア パラケルススとゲーテ』第7号 (1985) : 2-13.
- 小原正明「パラケルススからゲーテへ：スバギリークの変遷に関連して」『モルフォロギア パラケルススとゲーテ』第7号 (1985) 14-24.
- 高橋義人「ホームクルス：錬金術から神話的自然讃歌へ」『モルフォロギア パラケルススとゲーテ』第7号 (1985) 25-44.
- K. ゴルトアンマー (柴田健策・榎木真吉訳)『パラケルスス：自然と啓示』 みすず書房 (1986).
- アレクサンドル・コイレ (鶴岡賀雄訳)『パラケルススとその周辺』 風の薔薇 (1987).
- ホルヘ・ルイス・ボルヘス (鼓直訳)『パラケルススの薔薇』 国書刊行会 (1990).
- 岡部雄三「自然の黙示録ーパラケルススの伝承空間ー」『ドイツ文学』第86巻 (1991) : 35-46.
- C. G. ユング (榎木真吉訳)『パラケルスス論』 みすず書房 (1992).
- 岡部雄三「天のしるしと神のこゝろーパラケルススにおける予言と預言についてー」(樺山紘一他)『ノストラダムスとルネサンス』 岩波書店 (2000), pp. 207-234.
- 小田川方子『生と知の根源：比較思想論集』 理想社 (2000).
- 菊地原洋平「パラケルススの物質観：四元素と三原基の構造関係について」『科学史研究』第40号 (2001) : 24-34.
- 菊地原洋平「パラケルススの植物観に見る形態と象徴ー西欧近代初期における錬金術と本草学への一考察」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』第24号 (2002) : 47-67.
- 菊地原洋平「あるいは彼自身困難な存在 パラケルススの「癒し」をめぐる」『Aromatopia』53号 (2002).
- 菊地原洋平「伝記パラケルススーパラケルススにおける著作とテキストをめぐる問題ー」『化学史研究』第99号 (2002年) : 1-31.

ルネサンス

- アグリコラ (三枝博音訳, 山崎俊雄編)『デ・レ・メタリカ 全訳とその研究』 岩崎学術出版社 (1968).
- G. デッラ・ポルタ (澤井繁男訳)『自然魔術』 青土社 (1990).
- アグリコラ (杳掛俊夫・山田俊弘・矢島道子訳)『地下の事物の起源と原因について』その1~その6『地質学史懇談会会報』No. 21 (2003) : 28-36, No. 22 (2004) : 35-44, No. 23 (2004) : 28-34, No. 24 (2005) : 30-37, No. 25 (2005) : 31-40, No. 26 (2006) : 30-35.
- 三枝博音『「デ・レ・メタリカ」と『天工開物』』『三枝博音著作集 第11巻 (技術の歴史)』 中央公論社

(1973) 所収。

E. ガレン（清水純一・斎藤泰弘訳）『イタリア・ルネサンスにおける市民生活と科学・魔術』岩波書店（1975）。

村上陽一郎『科学史の逆遠近法：ルネサンスの再評価』中央公論社（1982）。

フランセス・イエイツ（内藤健二訳）『魔術的ルネサンス：エリザベス朝のオカルト哲学』晶文社（1984）。

A. G. ディーバス（伊東俊太郎・村上陽一郎・橋本真理子訳）『ルネサンスの自然観』サイエンス社（1986）。

ピーター・J. フレンチ（高橋誠訳）『ジョン・ディー：エリザベス朝の魔術師』平凡社（1989）。

平井浩「最初の地学書：アグリコラの『地下の事物の起源と原因について』（1546年）」『地質学史懇話会会報』第18号（2002）：25-27。

平井浩「ルネサンスの種子の理論—中世哲学と近代科学をつなぐミッシング・リンク」『思想』2002年12月号：129-152。

平井浩「最初の地学書：アグリコラの『地下の事物の起源と原因について』（1546年）」『地質学史懇話会会報』第18号（2002）：25-27。

杵掛俊夫「占い杖（Dowser）と錫杖」『地質学史懇話会会報』第21号（2003）：14-24。

17 世紀

ユンギウス（玉虫文一・関田犀一郎訳）「自然物の基本成分について」『科学史研究』No. 53（1959/60）：39-45。

宋応星（藪内清訳注）『天工開物』（東洋文庫 130）平凡社（1969）。

ファン・ヘルモント（中井章子訳）『医術の日の出』（クノル・フォン・ローゼンロートのドイツ語訳からの抄訳）『キリスト教神秘主義著作集 16 近代の自然神秘思想』教文館（1993），pp. 67-112。

村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社（1976）。

R. S. ウェストフォール（渡辺正雄・小川真里子訳）『近代科学の形成』みすず書房（1980）。

潘吉星（大沢眞澄・塚原東吾共訳）「近代の考古学的発見とその科学研究による製紙の起源について」『化学史研究』第31号（1985年）：77-80。

ジョスリン・ゴドウィン（吉村正和訳）『交響するイコン：フラッドの神聖宇宙誌』平凡社（1987）。

新井明・鎌井敏和編『信仰と理性：ケンブリッジ・プラトン学派研究序説』御茶の水書房（1988）。

藤井清久「粒子論哲学からニュートン原子論へ—キリスト教的原子論の系譜」（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 1』学会出版センター（1989），pp. 5-32。

鈴木晃仁「魔女狩りと近代ヨーロッパ」『化学史研究』第20巻（1993）：37-53。

川田勝「メルセンヌの学問擁護論」『化学史研究』第22巻（1995）：263-287。

川田勝「メルセンヌの初期アカデミー思想（1623-1634）—メルセンヌアカデミー研究（Ⅰ）—」『化学史研究』第23巻（1996）：285-301。

川田勝「メルセンヌアカデミーの思想と展開—メルセンヌアカデミー研究（Ⅱ）—」『化学史研究』第25巻（1998）：108-125。

スティーヴン・シェイピン（川田勝訳）『「科学革命」とは何だったのか：新しい歴史観の試み』白水社（1998）。

M. ハンター（大野誠訳）『イギリス科学革命：王政復古期の科学と社会』南窓社（1999）。

本間栄男「デカルトと胃での消化」『化学史研究』第29巻（2002）：222-236。

脇岡義人「J. J. ベッヒャーの *Physica Subterranea* (1669) とその化学史的意義」『科学史研究』[第2期] 42(226) (2003.夏).

三宅中子『創造と共生：ピュロン・ガッサンディ・マッハ』南窓社 (2003).

山田俊弘「君主と鉱物 エラスムス・バルトリン『氷州石の実験』(1669)の含意するもの」『科学史・科学哲学』No. 17 (2003): 69-87.

本間栄男「『エピクロスへの註釈』(1649年)におけるガッサンディの生理学」『化学史研究』第108号 (2004): 1-16.

本間栄男「17世紀 Leiden 大学の医学教授たち：付録登場人物略伝」『哲学・科学史論叢』6 (2004): 1-28.

大野誠「近代科学の誕生と結社：王立協会」(綾部恒雄監修・川北稔編)『結社のイギリス史：クラブから帝国まで』山川出版 (2005), pp. 106-117.

本間栄男「17世紀ネーデルラントにおけるルネサンス生理学」『哲学・科学史論叢』8 (2006): 1-63.

本間栄男「消化という物語をくわかる」17世紀西欧生理学の理解と認知」『UTCP 研究論集』Vol. 5 (2006): 27-44.

ボ イ ル

ボイル (大沼正則訳)『懐疑的な化学者』(世界大思想全集第32巻；社会・宗教・科学思想篇)河出書房新社 (1963).

ボイル (田中豊助・原田紀子・石橋共訳)『懐疑の化学者』内田老鶴圃 (1987).

ボイル (赤平清蔵訳)『形相と質の起源』(科学の名著第2期8『ボイル』)朝日出版社 (1989).

ボイル (吉本秀之訳)「原子論哲学について」('Of ye Atomically Philosophy', [ca. 1651]), (吉本秀之訳)『個別的質の歴史』(*The History of Particular Qualities*, 1672), (化学史学会編)『原子論・分子論の原典1』学会出版センター (1989), pp. 33-35, 47-65.

原光雄「ボイルの自然観および化学的業績 (1)・(2)」『科学史研究』第3号 (1942年): 84-107, 第4・5号 (1943年): 12-34.

田中実「物質研究におけるボイルの寄与」『科学革命』森北出版 (1960), pp. 264-282.

大沼正則「「懐疑的化学者」とロバート・ボイルーとくに第4命題をめぐる」『東京経済大学人文自然科学論集』通号1 (1962).

大沼正則「ロバート・ボイル「形相と質の起源」と粒子哲学」『東京経済大学人文自然科学論集』通号10・11 (1965).

工藤喜作「ボイルとスピノザ」『科学基礎論研究』第7巻 (1965): 53-60.

月沢美代子・道家達将「硝石の再生実験におけるボイルとスピノザの論争」『東京工業大学人文論叢』(1979).

鎌井敏和「ボイルにおける科学と宗教」(新井明・田中浩編)『近世イギリスの文学と社会』金星堂 (1980) 所収.

内田正夫「ロバート・ボイルにおける元素転換と成分粒子の概念」『和光大学人文学部紀要』通号18 (1983).

吉本秀之「ロバート・ボイルにおける科学と宗教の関係」『科学史研究』[第2期], 23(通号152) (1985.02), 24(通号153) (1985.05).

吉本秀之「ロバート・ボイルの質の理論—一次性質・二次性質の区別の分析—」『化学史研究』第36号

(1986)：97-113.

田村均「「形相と性質の起源」におけるロバート・ボイルの物質観」『香川大学教育学部研究報告第1部』通号70 (1987).

田代勇司訳編『自然学入門：R. ボイルを中心とする』ソルト出版 (1989).

吉本秀之「最近のボイル研究：文献リスト」『化学史研究』第17巻 (1990)：56-59.

吉本秀之「初期ボイルの化学—ヘルモント主義の位相と種子原理—」『化学史研究』第19巻 (1992)：233-246.

マイケル・ハンター（吉本秀之訳・解説）「新しいボイル像」『化学史研究』第26巻 (1999)：125-141.

吉本秀之「ボイルとスピノザ」『スピノザーナ』第3号 (2001/2002)：23-45.

吉本秀之「17世紀後半の水銀学派の腐敗/発酵理論」『腐敗と再生—身体医文化論3』慶應義塾大学出版会 (2004), pp. 115-134.

吉本秀之「ロバート・ボイルの読書/引用/執筆—ボイルのマージナリアの分析」『東京外国語大学論集』通号68 (2004).

吉本秀之「ボイル思想の自然誌的背景」『東京外国語大学論集』第67号 (2004)：85-105.

吉本秀之「弱視の貴族科学者ロバート・ボイル」『サイエンスネット』(数研出版) 24 (2005.9)：6-9.

ニュートン

ニュートン（阿部良夫・堀伸夫訳）『光学』岩波文庫 (1940).

ニュートン（大沼正則ら訳）『プリンキピア』（世界大思想全集第32巻；社会・宗教・科学思想篇）河出書房新社 (1963).

ニュートン（河辺六男訳）『自然哲学の数学的諸原理』（*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*, 3rd. ed, 1760）（河辺六男責任編集『ニュートン』（世界の名著26））中央公論社 (1971).

アイザック・ニュートン（中野猿人訳・注）『プリンシピア：自然哲学の数学的原理』講談社 (1977).

ニュートン（田中一郎訳）『光学』（*Opticks: or A Treatise of the Reflections, Refractions, Inflections and Colours of Light*, 4th ed., 1730）（渡辺正雄責任編集『ニュートン』（科学の名著6））朝日出版社 (1981).

ニュートン（島尾永康訳）『光学』（*Opticks*, 3rd ed. 1721）岩波文庫 (1983).

ニュートン（藤井清久訳）「初源物質について」, 「真空と原子とについて」, 「原子について」 ('Of the first matter', 'Of a vacuum and atoms', 'Of atoms' いずれも1661年に書かれた手稿 *Questiones Quaedam Philosophicae* より), (化学史学会編)『原子論・分子論の原典1』学会出版センター (1989), pp. 37-45.

三好愛吉『ニュートン』（世界歴史譚；第36編）博文館 (1902).

阿部良夫『ニュートン自然哲学の数学的原理』岩波書店 (1935, 復刻版1985).

ド・モルガン（森島恒雄訳）『人間ニュートン』創元社 (1951).

エス・イ・ヴァヴィロフ（三田博雄訳）『アイザック・ニュートン』東京図書 (1958).

E. N. ダ・C. アンドレード（久保亮五・久保千鶴子訳）『ニュートン：私は仮説をつくらない』（現代の科学14）河出書房新社 (1968).

大塚誠造『ニュートンの発見』（世界の科学者7）岩崎書店 (1975).

スーチン（渡辺正雄監訳, 田村保子訳）『ニュートンの生涯』東京図書 (1977).

島尾永康『ニュートン』岩波新書 (1979).

- 吉仲正和『力学的世界の創造：ガリレイ・デカルト・ニュートン』中公新書（1979）。
- 荻原明男『ニュートン』（人類の知的遺産 37）講談社（1982）。
- 吉仲正和『ニュートン力学の誕生：現代科学の原点をさぐる』サイエンス社（1982）。
- 渡辺正雄編著『ニュートンの光と影』共立出版（1982）。
- 大橋幹一『人間：それはニュートンの林檎』電気通信協会（1983）。
- ペー・エム・ゲッセン（秋間実ら訳）『ニュートン力学の形成：『プリンキピア』の社会的経済的根源』法政大学出版局（1986）。
- 吉田忠編『ニュートン自然哲学の系譜：プリンキピアとオプティックスまで』平凡社（1987）。
- 小山慶太『ニュートンの秘密の箱：ドラマティック・サイエンスへの誘い』丸善（1988）。
- 藤岡啓介『ニュートン外伝：科学革命の舞台裏』アイピーシー（1988）。
- A. N. ホワイトヘッド・B. ラッセル（岡本賢吾ら訳）『プリンキピア・マテマティカ序論』哲学書房（1988）。
- Yasu Furukawa, “Newton and Atomism”『東京電機大学工学部研究報告』No. 7（1988）：25-31。
- 高木秀男『『プリンキピア』への道：力学史に見る近代科学の誕生』〔高木秀男〕（1989）。
- マーガレット・ジェイコブ（中島秀人訳）『ニュートン主義者とイギリス革命』学術書房（1990）。
- ピエール・チュイリエ（高橋純訳）『ニュートンと魔術師たち：科学史の虚像と実像』工作舎（1990）。
- P. M. ラッタンシ（吉仲正和訳）『ニュートンと重力』玉川大学出版部（1991）。
- リチャード・S・ウェストフォール（田中一郎・大谷隆昶訳）『アイザック・ニュートン』全2巻，平凡社（1993）。
- B・J・T・ドブズ（寺島悦恩訳）『ニュートンの錬金術』平凡社（1995）。
- スティーヴ・パーカー（小出昭一郎訳）『ニュートン』岩波書店（1995）。
- J. フォーベル編（平野葉一・川尻信夫・鈴木孝典訳）『ニュートン復活』現代数学社（1996）。
- 芦名定道『近代科学の成立と自然神学の関連をめぐって：ニュートン主義の神学的受容を中心に』科研費報告書（1999）。
- 辻仁成『ニュートンの林檎』全2巻，集英社文庫（1999）。
- 佐藤満彦『ガリレオの求職活動 ニュートンの家計簿：科学者たちの生活と仕事』中公新書（2000）。
- B. J. T. ドブズ（大谷隆昶訳）『錬金術師ニュートン：ヤヌスの天才の肖像』みすず書房（2000）。
- 長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙：不完全な機械の喩』名古屋大学出版会（2001）。
- 芦名定道『近代科学の成立と自然神学との関連をめぐって：ニュートン主義から理神論，進化論へ』科研費報告書（2002）。
- 金子務「ニュートン科学における錬金術研究の意義」『モルフォロギア ゲーテと自然科学』第24号（2002）：2-15。
- D. H. クラーク・S. P. H. クラーク（伊理由美訳）『専制君主ニュートン：抑圧された科学的発見』岩波書店（2002）。
- 高橋秀裕『ニュートン：流率法の変容』東京大学出版会（2003）。
- ジェイムズ・グリック（大貫昌子訳）『ニュートンの海：万物の真理を求めて』日本放送出版協会（2005）。
- 西脇与作・和泉雅人，慶応義塾図書館編集・執筆『近代科学の黎明：コペルニクス，ニュートン，そしてケルヒャー：第18回慶応義塾図書館貴重書展示会』慶応義塾図書館（2005）。
- 北畠耀『色彩学貴重書図説：ニュートン・ゲーテ・シュヴルール・マンセルを中心に』日本塗料工業会

(2006).

松山壽一『ニュートンとカント：自然哲学における実証と思弁』晃洋書房（改訂版 2006）.

18 世紀

R. J. ボスコヴィチ（赤平清蔵訳）『自然哲学の理論』（抜粋訳）（Roger Joseph Boscovich, *A Theory of Natural Philosophy* (1763), tr. by J. M. Child, 1922）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 1』学会出版センター（1989），pp. 101-115.

H. ブールハーヴェ（藤井清久訳）「化学溶媒について」（Herman Boerhaave, 'Of Chemical Menstruums' in *Elements of Chemistry* (1732), tr. by Timothy Dallowe, 1735）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 1』学会出版センター（1989），pp. 69-83.

P. J. マケ（大野誠訳）「元素，原質，物体の合成，物体の分解，分析，空気」（Piere Joseph Maquer, 'Element', 'Principle', 'Composition of Body', 'Decomposition of Body', 'Analysis', 'Air', in *A Dictionary of Chemistry* (1766), tr. by James Keir, 2nd ed., 1777）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 1』学会出版センター（1989），pp. 175-191.

L. J. プルースト（武藤伸訳）「銅の研究」（'Recherches sur le cuivre', *Annales de Chimie*, **32** (1799) : 26-54）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター（1990），pp. 23-39.

エマヌエル・カント（田中豊助・石橋・原田紀子共訳）『火について』内田老鶴圃（1985）

板橋重夫「イギリス急進主義運動におけるナショナル・ディセンターズの伝統」『史林』第 49 巻（1966）：74-101.

Eri Yagi, "Stephen Hales' Work in Chemistry: A Newtonian Influence on 18th Century Chemistry", *Japanese Studies of History of Science*, No. 5 (1966) : 75-86.

阿知波五郎『ヘルマン・ブールハーヴェ 1668-1738 その生涯，思想，わが蘭学への影響』緒方書店（1969）.

ポール・アザール（野沢協訳）『ヨーロッパ精神の危機』法政大学出版局（1973）.

吉田忠「斥力，空気，蒸気—ニュートン，ヘールズ，デザグリエー」『化学史研究』第 2 号（1974）：16-23.

Yukitoshi Matsuo, "Henry Cavendish: A Scientist in the Age of the *Révolution Chimique*," *Japanese Studies in the History of Science*, No. 14 (1975) : 83-94.

脇岡義人「Philosophical Transactions に見る 18 世紀前半の化学と社会」『科学史研究』[第 II 期]（I）第 18 巻（No. 129）（1979），（II）第 18 巻（No. 130）（1979）.

ピーター・ゲイ（中川久定・鷺見洋一・中川洋子・永見文雄・玉井通和訳）『自由の科学：ヨーロッパ啓蒙思想の社会史』I・II，ミネルヴァ書房（1982-86）.

L. リッチ・コールダー（笠耐訳）「パーミンガムのルナー協会」『サイエンス』1982 年 8 月号：104-114.

藤井清久「「ベルトゥレーブルースト論争」考—一定比例の法則の成立—」『化学史研究』第 31 号（1985）：136-144.

Yasu Furukawa, "Boscovich and the Atomic Theory"『横浜商大論集』Vol. 19, No. 1 (1985) : 128-137.

藤井清久「化学史・常識のウソ（4）「定比例の法則」論争—勝ったのはベルトレカプルーストか」『化学と教育』**35**(1)（1987.02）.

大野誠「近代的元素概念の確立をめぐる」（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 1』学会出版センター（1989），pp. 125-156.

- 藤井清久「非国教徒学校における化学教育」『化学史研究』第16巻(1989):55-71.
- 古川安「ボスコヴィチの原子論」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典1』学会出版センター(1989), pp.85-100.
- 藤井清久「「ベルトレ・プーースト論争」考」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典2』学会出版センター(1990), pp.5-22.
- 川崎勝「ヘイルズ研究の新視点—18世紀イギリス科学史の革新のために—」『化学史研究』第19巻(1992年):159-171.
- 川島慶子「デュ・シャトレ夫人とヴォルテールの「化学」研究:「火の本性と伝播についての論考」」『化学史研究』第24巻(1997):261-280.
- 三時眞貴子「ウォリントン・アカデミー(Warrington Academy, 1757-86)の新たな研究に向けて」『化学史研究』第26巻(1999):65-78.
- 杓掛俊夫「グノーシスとしての地質学鉱物学研究—フリーメイソンのヴェルナーとゲーテ—」『地質学史懇話会会報』第14号(2000):10-12.
- 隠岐さや香「18世紀パリ王立アカデミー終身書記における「科学の有用性」をめぐる言説の変遷とその背景」『化学史研究』第29巻(2002):154-171.
- 杓掛俊夫「ビュフォン『鉱物の博物誌』について」『地質学史懇話会会報』第18号(2002):23-24.
- 杓掛俊夫「占い杖(Dowser)と錫杖」『地質学史懇話会会報』第21号(2003):14-24.
- 寺田元一『編集知の世紀:18世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』日本評論社(2003).
- Keiko Kawashima, 'Birth of Ambition: Madam du Chatelet's Institutions de physique', *Historia Scientiarum*, Vol. 14, No. 1 (2004): 49-66.
- 林真一郎「ヘンリ・キャベンディッシュ:風変わりな自然哲学者が残した業績」『化学史研究』第31巻(2004):179-194.
- Keiko Kawashima, 'The Issue of Gender and Science: A Case Study of Madame du Chatelet's Dissertation sur le feu', *Historia Scientiarum*, Vol. 15, No. 1 (2005): 23-43.
- 島尾永康編・解説『ディドロ『百科全書』産業・技術図版集』朝倉書店(2005).

化学革命

- 大沼正則「近代化学における定量的方法の確立—ボイルからラヴァジェーへ—」『科学史研究』第49号(1959):19-28.
- 横田輝雄「化学革命と科学方法論」『化学史研究』第26号(1984年):10-16.
- 内田正夫「近代化学成立の一断面」(山崎正勝・兵藤友博・奥山修平・大沼正則編著)『科学史:その課題と方法』青木書店(1987), pp.79-97.
- 大野誠「化学革命とは何か:ヒストリオグラフィの検討」(横山・井山・橋本編)『科学における論争・発見:科学革命の諸相』木鐸社(1989), pp.241-272.
- Masao Uchida, "The Recognition of Chemical Composition in the Eighteenth Century", *Historia Scientiarum*, 40 (1990): 41-57.
- Masao Uchida, "The Establishment of the Acidic Nature of Fixed Air", 『和光大学人文学部紀要』25 (1991): 163-177.
- 藤井清久「「化学革命論」の諸位相」『化学史研究』第18巻(1991年):11-18.

島尾永康「酸素の発見をめぐる物語—化学革命の2人のライバル，プリーストリとラヴォワジエ（科学をめぐるもう1つの物語—科学ってこんなにも人間臭いのだ!!〈特集〉）—（科学者にまつわる5つのドラマ）」『化学』47(10)（1992.10）.

大野誠「「化学革命」とフランス革命への対抗—ロバート・ハリントン著「フランス化学理論への死刑執行令状」（1804年）をめぐる—」『化学史研究』第20巻（1993）：93-106.

西村顕治「17-18世紀化学革命を担った人々が生命に向けたまなざし」『慶應義塾大学日吉紀要（自然科学）』通号18（1995）.

フロギストン説

柏木肇「反フロギストン思想における R. カーウオンの投影」『名古屋大学教養部紀要 B 自然科学・心理学』通号14（1970）：13-37.

市村浩「植物による脱フロギストン空気生産への固定空気の関与—光合成研究史-2-」『生物科学』35(4)（1983.11）.

井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィー11 完. フロギストン理論は非科学的か？」『化学』42(2)（1987.02）.

大野誠「「敗者」のゆくえ—それでも私はフロギストン説を信じる（科学をめぐるもう1つの物語—科学ってこんなにも人間臭いのだ!!〈特集〉）—（科学者にまつわる5つのドラマ）」『化学』47(10)（1992.10）：660-663.

村田徳治「錬金術師の忘れもの——環境汚染と化学物質—第2限—フロギストン VS 酸素の勝者は？」『資源環境対策』33(2)（1997.02）.

シュタール

G. E. シュタール（八耳俊文訳）「序論」「化学の一般理論」（Georg Ernst Stahl, 'Preliminaries', 'The General Theory of Chemistry', in *Philosophical Principles of Universal Chemistry* (1723), tr. by Peter Shaw, 1730）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典1』学会出版センター（1989），pp. 157-173.

ゲオルク・エルンスト・シュタール（田中豊助・石橋裕訳）『合理と実験の化学』（*Fundamenta Chymiae Dogmaticae et Experimentalis* (1720) のドイツ語訳書からの翻訳）内田老鶴圃（1992）.

川崎勝「シュタール化学の原像—18世紀化学の一つの出発点—」『化学史研究』第44号（1988）：119-134.

シェーレ

日吉芳朗「有機酸の研究とシェーレのとりくみ」『化学史研究』第21号（1982）：143-153.

日吉芳朗「シェーレにかかわる7つの疑問」『化学史研究』第18巻（1991）：11-18.

日吉芳朗「カール・ウィルヘルム・シェーレーその生涯と業績」『化学史研究』第95号（2001）：1-17.

プリーストリ

プリーストリ（原光雄訳編）『酸素の発見』大日本出版（1946）.

原光雄「プリーストリの唯物論—産業革命期のイギリス唯物論」『理論』2(10)（1948.12）.

野田又夫「唯物論と宗教—ジョセフ・プリーストリの場合」『人間』4(5)（1949.05）.

菅井準一「多彩な頭脳の人—牧師プリーストリ」『ニューエイジ』1(6)（1949.06）.

- 原光雄「プリーストリの唯物論」(原光雄)『自然弁証法の諸問題』法律文化社(1954), pp. 241-272.
- 永井義雄「イギリス急進主義の一潮流—プライスとプリーストリ」『経済科学』6(3)(1959).
- 杉山忠平「理性と革命—プリーストリとバーミンガム事件」『思想』通号 469(1963.07).
- 杉山忠平著『理性と革命の時代に生きて—J. プリーストリ伝—』岩波新書(1974).
- 野田又夫「唯物論と宗教—ジョセフ・プリーストリの場合」(野田又夫)『西洋近世の思想家達』岩波書店(1974), pp. 149-184.
- 安川哲夫「プリーストリの歴史教育論」『九州教育学会研究紀要』(1976): 105-112.
- 杉山忠平「プリーストリとスミス—八世紀思想史の一局面」『思想』通号 655(1979.01).
- 杉山忠平「古典経済学と J. プリーストリ (英仏古典経済学の諸問題 <特集>)」『経済研究』30(3)(1979).
- 西条敏美「静電気力に関するプリーストリーキャベンディッシュの逆二乗法則」『徳島高等学校理科学会誌』第 21 号(1980): 13-20.
- 杉山忠平「ウィリアム・コベットのプリーストリ批判(社会科学分野の書誌とドキュメンテーション <特集>)」『一橋論叢』86(3)(1981).
- 安川哲夫「ジョセフ・プリーストリー教育による進歩思想の確立者—」(白石晃一・三笠乙彦編)『現代に生きる教育思想 2—イギリス—』ぎょうせい(1982), pp. 43-78.
- 柏木肇「プリーストリーは何故に化学への道を歩んだか」『化学史研究』第 26 号(1984): 30-40.
- 藤井清久「神と物質—プリーストリの神学」(大野誠・小川真理子編)『科学史の世界』丸善(1990), pp. 93-110.
- 池田稔「ウォリントン・アカデミーとジョセフ・プリーストリー研究ノート」『教育研究』通号 35(1991).
- 島尾永康「酸素の発見をめぐる物語—化学革命の 2 人のライバル, プリーストリとラヴォワジエ(科学をめぐるもう 1 つの物語—科学ってこんなにも人間臭いのだ!! <特集>—(科学者にまつわる 5 つのドラマ)」『化学』47(10)(1992.10).
- 草薙喜義「J. プリーストリーにおける「自由論」」『法政大学教養部紀要』通号 87(1993).
- 藤井清久「18 世紀ユニテリアンの教育理念—J. プリーストリとマンチェスター知識人の教養教育論」(吉本秀之他)『科学と国家と宗教』平凡社(1995), pp. 89-111.
- 立川潔「市民的自由と洗練された習俗—ジョウゼフ・プリーストリと近代ヨーロッパ君主政」『経済学論纂』44(5・6)(2004).
- 河野俊哉「プリーストリ研究の新潮流」『化学史研究』第 32 巻(2005): 45-60.
- 河野俊哉「プリーストリの電気研究」『化学史研究』第 32 巻(2005): 85-103.
- 河野俊哉「実験哲学としてのプリーストリの化学」『化学史研究』第 32 巻(2005): 201-216.

ラヴォアジエ

- ラボアジエ(田中豊助・原田紀子共訳)『化学のはじめ』内田老鶴圃(1973).
- ラヴォアジエ「動物の呼吸と動物の肺を通過する間に空気が受ける変化についての実験(*Mem. de l'Acad. des sciences*, 1777, 185/94 抄録)」『生物学史研究』通号 23(1973).
- A. L. ラヴォアジエ(武藤伸解説・訳)「一般に燃焼を論ず」『化学史研究』第 4 号(1975): 29-33.
- ラヴワジエ(柴田和子訳)『化学原論』(*Traite Élémentaire de Chimie*, 1789)(坂本賢三編)『ラヴワジエ』(科学の名著第 II 期 4)朝日出版社(1988).
- ラボアジエ(田中豊助・原田紀子・牧野共訳)『物理と化学』内田老鶴圃(1976).

- ラボアジェ（田中豊助・原田紀子・牧野共訳）『化学命名法』内田老鶴圃（1976）.
エドアール・グリモー（江上不二夫訳）『ラヴォアジェ伝』白水社（1941）.
原光雄「無実の告発？—ラヴォアジェの死」『日本評論』24(10)（1949.10）.
原光雄『ラヴォアジェ』弘文堂（1950）.
馬永康「Lavoisier に及ぼした影響の系譜」『科学史研究』[第II期] 第60号（1961）：1-8.
武藤伸「化学史・常識のウソ（2）質量保存の法則は発見されたのか—Lavoisier は何をしたか」『化学教育』34(5)（1986.10）.
大野誠「伝統的なラヴワジェ像とその問題点」『化学史研究』第42号（1988）：30-42.
大野誠「ラヴワジェ研究文献案内（1963～1985）」『化学史研究』第43号（1988）：67-73.
杉山滋郎「ラヴワジェとラプラスの共同研究」『化学史研究』第43号（1988）：74-85.
内田正夫「ラヴワジェの元素表（単一物質表）」『化学史研究』第16巻（1989）：173-183.
柴田和子「化学における定量化問題—ラヴワジェの定量分析の手法とは—」『化学史研究』第16巻（1989）：154-172.
島原健三「ラヴワジェとカロリク論」『化学史研究』第16巻（1989）：20-29.
鶴田治之・大野誠「ラヴワジェの酸理論」『化学史研究』第16巻（1989）：72-83.
川崎勝「文献案内 Part 2（1985-1990）—ラヴワジェ『化学原論』200周年祭を終えて—」『化学史研究』第18巻（1991）：137-143.
中川鶴太郎『ラヴォアジェ』清水書院（1991）.
川島慶子「ラヴワジェ伝の中のラヴワジェ夫人像」『化学史研究』第19巻（1992）：188-204.
原光雄「ラヴォアジェの銅像」『科学史研究』[第2期] 33（通号190）（1994.06）.
川島慶子「『フロギストン論考』仏訳におけるラヴワジェ夫妻の協力」『化学史研究』第22巻（1995）：163-179.
エドアール・グリモー（田中豊助・原田紀子・牧野文子訳）『ラボアジェ：1743-1794』内田老鶴圃（1995）.
飯田清人「技術者・研究者のための創造力開発講座 科学技術革新の着眼点（8）近代化学の父ラヴォアジェとドルトン」『研究開発マネジメント』通号120（2001.2）.
マルコ・ベレッタ（吉本秀之訳）「アントワーン・ローラン・ラヴォワジェ」『化学史研究』第97号（2001）：1-10.
川島慶子「マリー・アンヌ・ラヴワジェ（1758-1836）—二つの革命を生きた女—」『化学史研究』第107号（2004）：1-31.

19 世紀

- L. プレイフェア（山口達明訳）「19世紀中葉におけるイギリスの科学技術教育—1851年ロンドン大博覧会に関するL. プレイフェアの講演—」『化学史研究』第21号（1982年）：161-173.
H. デイヴィ（小塩玄也訳）「対話7：化学元素について」（Humphry Davy, 'Dialogue the Seventh, On the Chemical Elements' in *Consolation in Travel: or the Last Days of a Philosopher*, 1830）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典1』学会出版センター（1989），pp. 117-122.
H. デイヴィ（大野誠訳）「未分解物質どうしの類似性について」（'On the analogies between the undecomposed substances' in *Elements of Chemical Philosophy*, 1812）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典1』学会出版センター（1989），pp. 193-210.

- C. L. ベルトレ (藤井清久訳) 「化合物における元素の化合比について:『化学静力学論』より」(Claude Louis Berthollet, 'Des proportions des elements dans les combinaisons' in *Essai de statique chimique*, 1803) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 41-62.
- 田中実「19 世紀化学史の諸問題 (I) —方法についての考察—」『科学史研究』第 27 号 (1953): 1-6.
- 稲子和江「ジュールによる熱の仕事当量発見の過程—とくに電気化学的研究の意義—」『科学史研究』[第 II 期] No. 81 (1967).
- D. M. Knight (柏木肇解説) “Chemistry in Britain at the End of the Nineteenth Century”『科学史研究』第 8 号 (1978): 7-17.
- 藤井清久「コントの実証哲学における化学」『科学史研究』第 7 号 (1978): 9-19.
- 都築洋次郎「化学者としての BORODIN」『科学史研究』[第 II 期] 第 18 巻 (No. 131) (1979).
- J. H. Brooke (柏木肇解説) “The Chemistry of Organic and the Inorganic: A Study in the Dynamic Interaction of Concepts”『科学史研究』第 13 号 (1980): 37-60.
- デイヴィッド・ナイト (柏木肇訳編) 「イングランドの自然誌と化学—18 世紀末から 19 世紀初期にかけて」『科学と実験』1981 年 6 月号: 83-89, 7 月号: 81-87.
- 戸倉仁一郎『化学のあけぼの: 化学者カンニツァロの生涯』共立出版 (1982).
- 榊原郁子「マルセッ夫人著『化学の対話』に関する研究」(第 1 報)・(第 2 報), 『北海道教育大学紀要』(第 2 部 A), 第 34 巻第 1 号 (1983): 57-68, 第 39 巻第 1 号 (1988): 23-29.
- 楊根述 (島尾永康訳) 「中国の近代化学の先駆者徐寿の生涯と貢献」『科学史研究』第 34 号 (1986 年): 9-14.
- 梶雅範「「ジェラルル」と「ゲルアルト」」『サジアトーレ』No. 17 (1988): 60-62.
- 杉山滋郎「ジョン・ティンダルの粒子論的物質観と化学への寄与」『科学史研究』第 18 巻 (1991): 179-192.
- 梶雅範「19 世紀ロシアにおける化学者集団の形成—ロシア最初の専門化学雑誌『H. ソコロフと A. エンゲリガルトの化学雑誌』—」『科学史研究』No. 187 (1993): 129-141.
- 梶雅範「19 世紀ロシアにおける科学者集団の形成についての考察—ロシアの化学者を中心として」(北海道大学スラブ研究センター)『スラブ研究センター研究報告シリーズ』第 52 号 (1994): 110-119.
- 立花太郎「トーマス・グレアムのコロイド研究再考」『科学史研究』第 22 巻 (1995): 1-14.
- 渡邊慶昭「評伝 西洋の化学者 (第 2 回) カール・ヴィルヘルム・ゴットロープ・カストナー—リービッヒの師の評伝」『科学史研究』通号 87 号 (1999): 79-95.
- 山口歩「19 世紀物理学の金字塔—エネルギー保存則とジュール」『科学技術ジャーナル』(2000.5): 50-51.

原 子 論

- P. L. デュロン・A. T. プティ (斎藤茂樹訳) 「熱理論の重要な二、三の点について」(Pierre Louis Dulong and Alexis Thérèse Petit, 'Recherches sur quelques points importants de la théorie de la chaleur', *Annales de Chimie et de Physique*, **10** (1819): 395-413) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 135-147.
- J. ボストック (井山弘幸訳) 「物体が相互に結合する際の様式に関するドールトン氏の仮説に対する見解」(John Bostock, 'Remarks on Mr. Dalton's Hypothesis of the manner in which Bodies combine with each other', (*Nicholson's*) *Journal of Natural Philosophy, Chemistry and the Arts*, **28** (1811): 280-292)

- (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 161-173.
- W. H. ウラストン (島原健三・下田礼子訳)「化学当量用計算尺」(William Hyde Wollaston, 'A Synoptic Scale of Chemical Equivalents', *Philosophical Transactions*, **104** (1814) : 1-23) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 175-196.
- W. ヒューエル (梅田淳訳)「原子論」(William Whewell, 'The Atomoc Theory' in *Philosophy of Inductive Sciences*, 1840, vol. 1, pp. 405-422) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 199-213.
- 脇岡義人「William Higgins と原子論」『化学史研究』第 2 号 (1974) : 24-39.
- Akira Yoshida, "Charles Adolphe Wurtz et la théorie atomique", *Japanese Studies of History of Science*, No. 16 (1977) : 129-135.
- 藤井清久「原子量と原子構造—プラウトの仮説の誕生・没落・復活—」『化学史研究』第 16 号 (1981) : 29-38.
- 井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィー5. プラウトの仮説は否定できるか?—科学と非科学をわかつ境界は何か」『化学』**41**(8) (1986.08).
- 小塩玄也「化学史・常識のウソ (6) 原子量が先か当量が先か—19 世紀と現代におけるその消長」『化学と教育』**35**(3) (1987.06).
- 梅田淳・藤井清久「ドールトン原子論への懐疑」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 149-160.
- 稲生勝「ヘーゲルの化学説—原子-分子概念の混乱の化学史のなかで (科学哲学から自然科学へ〈特集〉)」『理想』通号 649 (1992.06).

分 子 論

- A. M. アンペール (橋本毅彦訳)「化合量子内の微粒子の数・配置, ならびにそれより帰結される物質の結合比の決定について: ベルトレ氏への書簡」(A. M. Ampère, 'Lettre de M. Ampère à M. le comte Berthollet, sur la détermination des proportions dans lesquelles les corps se combinent d'après le nombre et la disposition respective des molécules dont leurs particules intégrantes sont composées', *Annales de Chimie*, **90** (1814) : 43-86) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 107-119.
- M. A. A. ゴーダン (斎藤茂樹訳と解説)「限られた無機物体の内部構造の探究, および電気・熱の伝導度…」(Marc Antoine Augustin. Gaudin, 'Recherches sur la Structure intime des Corps inorganiques définis, et Considérations générales sur le rôle que jouent leurs...', *Annales de Chimie et de Physique*, **52** (1833) : 113-133)『化学史研究』第 6 号 (1977) : 33-39.
- M. A. A. ゴーダン (橋本毅彦訳)「無機物質の内部構造について…」(原論文は上記と同じ) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 123-132.
- J. ヘラパース (阿部裕子訳)「熱, 気体, 重力などの原因, 法則および主な現象に関する数学的研究」(John Herapath, 'A Mathematical Inquiry into the Causes, Laws, and principal Phenomena of Heats, Gases, Gravitation, etc.', *Annals of Philosophy*, Series 2, **1** (1821) : 273-293, 340-351, 401-416)」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター (1993), pp. 151-188.
- ウォータストン (藤崎千代子訳)「運動状態にある自由な完全弾性分子から構成されている媒体の物理学に

ついて」(John James Waterston, 'On the Physics of Media that are Composed of Free and Perfectly Elastic Molecules in a State of Motion', *Philosophical Transactions*, **183** (1893): 1-79) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター (1993), pp. 191-219.

山口達明「分子概念の形成に関するもう一つの論考」『化学史研究』第 16 卷 (1989): 84-86.

大野誠「分子概念の成立に関する拙考への批判に答えて I」『化学史研究』第 16 卷 (1989): 104-110.

大野誠「分子論史の新たな展開のために」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター (1993), pp. 55-88.

阿部裕子「ヘラパース, ウォータストンの気体運動論」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター (1993), pp. 135-150.

アヴォガドロ

A. Avogadro (斎藤茂樹訳・解説)「物体の元素粒子の相対的質量とそれらの化合比の決定方法についての試論」(Amedeo Avogadro, 'Essai d'une manière de déterminer les masses relatives des molécules élémentaires des corps, et les proportions selon lesquelles elles entrent dans ces combinaisons', *Journal de Physique, de Chimie et d'Histoire Naturelle*, **73** (1811): 58-76)『化学史研究』第 2 号 (1974): 40-50.

A. アヴォガードロ (橋本毅彦訳)「物体の元素粒子の相対的質量と, 化合物中の元素粒子の化合比とを決定する方法についての試論」(原論文は上記と同じ) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 89-105.

大野誠「アヴォガドロの 1811 年論文の再検討」『化学史研究』第 31 号 (1985): 95-107.

唐木田健一「我々にとってアヴォガドロとは何か?」『化学史研究』第 33 号 (1985): 186-192.

井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィー 7. アボガドロは本当に無視されたのか? — 50 年間忘れ去られた仮説をめぐる —」『化学』**41**(10) (1986.10).

大野誠「化学史・常識のウソ (5) アヴォガードロは分子概念を提起したか」『化学と教育』**35**(2) (1987.04).

朽津耕三・田中充「どうやってそれを求めたの (4) アボガドロ定数」『化学と教育』**46**(10) (1998.10).

大西寛「モル, ロシュミット数及びアボガドロ定数 (または数) の初期の使用」『化学史研究』通号 106 号 (2004): 35-39.

ドルトン

ドルトン (井山弘幸抄訳)『気象観測および論文集』(John Dalton, *Meteorological Observations and Essays*, 1793) (村上陽一郎編)『ドルトン』(科学の名著第 II 期第 6 卷)朝日出版 (1988) 所収.

ドルトン (井山弘幸訳)「色覚に関する異常な事実—観察記録」('Extraordinary Facts relating to the Vision of Colours: with observations', *Manchester Memoirs*, **5** (1798): 28-45)『ドルトン』朝日出版 (1988) 所収.

ドルトン (井山弘幸訳)「熱の零点, 温度勾配および密度が高いか非弾性的な流体が熱のため膨張する際の法則に関する観察を含む書簡」(Letter from Mr. Dalton, containing 'Observations concerning the Determination of the Zero of Heat, the thermometrical Gradation, and the Law by which dense or non-elastic Fluids expand by Heat', *Journal of Natural Philosophy*, **5** (1803): 34-36)『ドルトン』朝

日出版（1988）所収。

ドルトン（井山弘幸訳）「弾性流体の相互拡散の傾向について」（‘On the Tendency of Elastic Fluids to Diffusion through each other’, *Manchester Memoirs*, **6** (1805) : 25-36) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

ドルトン（井山弘幸訳）「大気を構成する種々の期待または弾性流体の割合についての実験研究」（‘Experimental inquiry into the proportion of the several gases or elastic fluids constituting the atmosphere’, *Manchester Memoirs*, **6** (1805) : 244-258) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

ドルトン（井山弘幸訳）「水および他の液体による気体の吸収について」（‘On the absorption of gases by water and other liquids’, *Manchester Memoirs*, **6** (1805) : 271-287) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

J. ドールトン（井山弘幸訳）「水および他の液体による気体の吸収について」（‘On the Absorption of Gases by Water and other Liquids’, *Memoirs and Proceedings of the Manchester Library and Philosophical Society*, **1** (1805) : 271-287)（化学史学会編）『原子論・分子論の原典2』学会出版センター（1990），pp. 83-93.

ドルトン『化学哲学の新体系』（*A New System of Chemical Philosophy*, vol. 1, part 1 (1808), part 2 (1810), vol. 2 (1827)).

1) 広重轍訳「化学の新体系」（抄訳：vol. 1, part 1 の第2章第1節・第2節，第3章，part 2 の第4章第1節・第2節，第5章第1節）『世界の名著・現代の科学 I』中央公論社（1973）。

2) 田中豊助ら訳（vols. 1, 2 の全訳）『化学の新体系』内田老鶴園新社（1986）。

3) 井山弘幸訳（vol. 1 の全訳）『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

J. ドールトン（村上嘉一訳）「現代の化学書の著者達が用いている粒子なる語の意味および他の用語や言葉の使い方についての論考」（‘Inquiries concerning the Signification of the word Particle, as used by modern Chemical Writers, as well as concerning some other Terms and Phrases’, (*Nicholson’s Journal of Natural Philosophy, Chemistry and the Arts*, **28** (1811) : 81-88)（化学史学会編）『原子論・分子論の原典2』学会出版センター（1990），pp. 99-108.

ドルトン（井山弘幸訳）「近年の化学書の著者が使用している粒子なる語の意味および他の用語や言葉づかいに関する論考」（‘Inquiries concerning the Significations of the word Particle as used by modern Chemical Writers, as well asw concerning some other Terms and Phrases’, *Journal of Natural Philosophy, Chemistry and the Arts*, **28** (1811) : 81-88) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

J. ドールトン（井山弘幸訳）「ボストック博士による化学の原子論的原理に関する見解についての考察」（‘Observations on Dr. Bostock’s Review of the Atomic Principles of Chemistry’, *Journal of Natural Philosophy, Chemistry and the Arts*, **29** (1811) : 143-151)（化学史学会編）『原子論・分子論の原典2』学会出版センター（1990），pp. 109-116.

ドルトン（井山弘幸訳）「呼吸と動物熱について」（‘On Respiration and Animal Heat’, *Manchester Memoirs*, **7** (1813) : 15-44) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

ドルトン（井山弘幸訳）「化学比例の原因に関するベルツェリウス博士の論文に対する意見」（‘Remarks on the essay of Dr. Berzelius on the cause of Chemical Proportions’, *Annals of Philosophy*, **3** (1814) : 6-8) 『ドルトン』朝日出版（1988）所収。

原光雄『近代化学の父：ジョン・ドールトン』岩波新書（1951）。

大沼正則「近代化学における力と物質との関連について：ベルトレ，プルースト，ドルトン」『東京経大学

会誌』No. 23 (1959.04).

脇岡義人・内田正夫・徳元琴代・小峯としえ「John Dalton (1766-1844) 研究の展望」『化学史研究』第7号 (1978): 46-52.

井山弘幸「John Dalton と倍数比例の法則—その発見をめぐる—」『化学史研究』第17号 (1981): 24-32.

井山弘幸「科学史における John Dalton の役割—方法論的考察—」『科学史研究』[第II期] 第21巻 (No. 143) (1982).

村上嘉一「近代原子論の発展—Dalton と原子論—」『化学史研究』第22号 (1983): 33-42.

井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィ 2: 化学にとって仮説とは何か—ドルトンの原子論を中心に—」『化学』41(5) (1986.05月).

井山弘幸「化学史・常識のウソ 3: ドールトン神話の形成—化学教科書に見られる誤解」『化学教育』34(6) (1986.12).

藤井清久「ドルトン原子論の形成過程—「ドルトンの謎」をめぐる—」『化学史研究』第45号 (1988): 163-184.

井山弘幸「原子量の発見と近代化学」(横山・井山・橋本編)『科学における論争・発見: 科学革命の諸相』木鐸社 (1989), pp. 143-172.

井山弘幸「化学的原子論の歴史的再構成」(化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 65-82.

粟屋裕「化学異聞 10 (完): ドルトン 色盲の化学者」『化学』50(3) (1995.03).

中崎昌雄「近代化学の父」John Dalton 覚書 (下)「化学的原子論」発想について」『中京大学教養論叢』38(1) (1997.06).

井山弘幸「どうやって思いついたの (1) ドルトン: 原子の概念はいかにして生まれたか」『化学と教育』46(5) (1998.05).

荻野博「ドルトンの原子説 200 年」『現代化学』No. 387 (2003.06).

ベルセーリウス

J. J. Berzelius (三田達訳・解説)「化合比の理論および電気の化学的影響について」(“Essai sur la Théorie des Proportions Chimiques et sur l’Influence Chimique de l’Électricité” (1819)) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976) 所収.

ベルセリウス (田中豊助・原田紀子訳)『化学の教科書』(スウェーデン語原著 (1808-1830 年, 6 巻) のヴェーラーによるドイツ語訳 *Lehrbuch der Chemie* (1843-1848 年, 5 巻本) のうちの第 1 巻部分の邦訳) 上・下巻, 内田老鶴圃 (1989).

J. J. ベルセーリウス (川井雄訳)「化合比の原因と、それに付随する若干の事柄についての小論」(Jöns Jacob Berzelius, ‘On the Cause of Chemical Proportions, and on Some Circumstances relating to them...’, *Annales of Philosophy*, 2 (1813): 443-454; 3 (1814): 51-52) (化学史学会編)『原子論・分子論の原典 2』学会出版センター (1990), pp. 117-133.

ファラデー

ファラデー (稲沼瑞穂訳)『力と物質』岩波文庫 (1949).

- ファラデー（矢島祐利訳）『ロウソクの科学』岩波文庫（1956）。
- ファラデー（三石巖訳）『ロウソクの科学』角川文庫（1962）。
- ファラデー（日下実男訳）『ロウソクの科学』旺文社（1969）。
- ファラデー（田中豊助監訳）『電気実験』上・下巻，内田老鶴園新社（1980）。
- ファラデー（山口達明訳）「講演者たちへのアドバイス」『化学史研究』第19号（1982年）：88-92。
- マイケル・ファラデー（白井俊明訳）『ファラデー　ろうそく物語』法政大学出版局 2000, 2005）。
- 愛知敬一『電気學の泰斗ファラデーの傳』岩波書店（1923）。
- 石井悦朗『科學王ファラデー傳：附・科學天才の待望と英俊の養成』桂文閣（1932）。
- 矢島祐利『ファラデー』岩波書店（1940）。
- ダビド・K. C. マクドナルド（原島鮮訳）『ファラデー，マクスウェル，ケルビン：電磁氣学のパイオニア』河出書房新社（1968）。
- ジョン・チンダル（矢島祐利訳編）『発見者ファラデー』社会思想社（1973）。
- 三石巖『ファラデーの発見』岩崎書店（1975）。
- スーチン（小出昭一郎・田村保子訳）『ファラデーの生涯』東京図書（1976）。
- B. ボウアーズ（田村保子訳）『ファラデーと電磁氣』東京図書（1978）。
- 小林卓二『ファラデーのモーターの科学』さ・え・ら書房（1986）。
- 小山慶太『ファラデーが生きたイギリス』日本評論社（1993）。
- ジョン M. トーマス（千原秀昭・黒田玲子訳）『マイケル・ファラデー：天才科学者の軌跡』東京化学同人（1994）。
- 井上勝也『新ファラデー伝：19世紀科学は何を教えているか』研成社（1995）。
- 奥山修平「電気磁気現象研究の先達マイケル・ファラデー」『科学技術ジャーナル』（1996.4）：42-43。
- 小山慶太『ファラデー：実験科学の時代』講談社（1999）。
- 島尾永康『ファラデー：王立研究所と孤独な科学者』岩波書店（2000）。
- 板倉聖宣『わたしもファラデー：たのしい科学の発見物語』仮説社（2003）。

結 晶 学

- R. -J. アユイ「序論」・「鉱物学的方法」（藤井清久訳）（René-Just Haüy, 'Discours préliminaire', 'Des méthodes minéralogiques' in *Traité de minéralogie*, 1801）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター（1993），pp. 17-24。
- W. H. ウラストン（島原健三訳）「ベーカー講演．ある種の結晶の基本粒子について」（William Hyde Wollaston, 'The Bakerian Lecture. On the elementary Particles of certain Crystals', *Philosophical Transactions*, **102** (1813) : 51-63）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター（1993），pp. 27-37。
- ミッテェルリヒ（山口達明訳）「ヒ酸塩およびリン酸塩の結晶構造と化学組成の関係について」（Eilhard Mitscherlich, 'Über das Verhältniss zwischen der chemischen Zusammensetzung und der Krystallform arseniker und phosphorsaurer Salze', *Ostwald Klassiker*, No. 94, 1898. スウェーデン語の原論文は1821年刊行）（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター（1993），pp. 39-53。
- 山口達明「結晶型と物質の基本構造」（化学史学会編）『原子論・分子論の原典 3』学会出版センター（1993），pp. 5-16。

有機化学 (※ 20 世紀も含む)

- E. フィッシャー (桑田智訳)『化学界の偉人エミール・フィッシャーの自叙伝・思い出より』[Emil Fischer, *Aus meinem Leben*, 1922 の翻訳] 広川書店 (1963).
- M. C. Gerhardt (三田達訳・解説)「有機酸無水物に関する研究」(“Recherches sur les Acides Organiques Anhydres”, *Ann. chim. phys.*, [3^e sér.], **37** (1852): 285-342) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976) 所収.
- E. Frankland (右田俊彦訳・解説)「金属を含む一連の新しい化合物について」(“On a New Series of Organic Bodies containing Metals”, *Phil. Trans.*, **142** (1852): 417-444) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976 年) 所収.
- H. Kolbe (柏木肇訳・解説)「有機化合物と無機化合物の自然的関連, すなわち有機化学物質の自然に則した分類法に対する科学的根拠について」(“Ueber den natürlichen Zusammenhang der organischen mit den unorganischen Verbindungen, die wissenschaftliche Grundlage zu einer naturgemäßen Classification der organischen chemischen Körper”, *Annalen der Chemie und Pharmacie*, **113** (1860): 293-332) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976) 所収.
- A. S. Couper (右田俊彦訳・解説)「化学の新しい理論について」(“On a New Chemical Theory”, *London, Edinburgh, and Dublin Phil. Mag. & Journ. Sci.*, 4th ser., **16** (1858): 104-116) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976) 所収.
- A. M. Butlerov (柏木肇訳・解説)「物質の化学構造について」(“Einiges über die chemische Struktur der Körper”, *Zeitschrift für Chemie und Pharmacie*, (1861): 549-560) (日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976) 所収.
- ヴィルシュテッター (高尾檜雄・高尾佐知子訳)『リヒャルト・ヴィルシュテッター自伝: 仕事・余暇・友人達』日本図書刊行会 (2004).
- 都築洋次郎「アドルフ・フォン・バイヤーの生涯と業績」『岩波講座物理学及び化学』(増補; 化学 4, 5, 6) 岩波書店 (1930 年代).
- 園上閑夫 (柏木肇)「有機化学の方法論的確立: 19 世紀初頭における機械論の克服」(民科編)『自然科学』No. 8 (1947): 4-10.
- 桑田智『アドルフ・フォン・バイヤー: 偉大なる化学者の生涯』広川書店 (1955).
- 柏木肇「ブトレロフー西欧との接触」『化学史研究』第 5 号 (1976 年): 12-28.
- 柏木肇「『有機化学構造論』の解説」(日本化学会編)『化学の原典 10』(有機化学構造論) 東京大学出版会 (1976), pp. 157-264.
- 竹林松二「Markownikoff 則—その背景と趣意—」『化学史研究』第 6 号 (1977 年): 25-26.
- 竹林松二「有機化学者 Cannizzaro とその時代」『化学史研究』第 7 号 (1978): 32-33.
- 竹林松二「互変異性に関する概念の発展」『化学史研究』第 16 号 (1981): 1-7.
- 岩倉義男「一重付加反応の研究をめぐって」『化学史研究』第 23 号 (1983): 47-55.
- 竹林松二「Sandmeyer 反応の 100 年に当たって—発見の経緯と反応の解明—」『化学史研究』第 26 号 (1984): 17-20.
- 竹林松二「有機化合物に関する概念の発展」『化学史研究』第 29 号 (1984): 156-160.
- 安江政一「推定構造式と仮想式 (作業仮設)—エフェドリンの構造解明をめぐって—」『化学史研究』第 28 号 (1984 年): 97-105.

- 竹林松二「L. Gattermann と有機合成—その発見をめぐって—」『化学史研究』第 31 号（1985 年）：81-85.
- 竹林松二「ヴァルデン反転—その発見と解明の過程—」『化学史研究』第 34 号（1986）：15-20.
- 竹林松二「化学史・常識のウソ（7）尿素の合成と生気論：ヴェーラーの尿素合成は生気論を打ち破ったか」『化学と教育』35(4)（1987.08）.
- 竹林松二「アセチレンの水和反応—その発見と解明の経過—」『化学史研究』第 42 号（1988）：8-12.
- 竹林松二「シス・トランスの命名百周年に当たって」『化学史研究』第 16 巻（1989）：4-10.
- 竹林松二「酸アジドのクルティウス転位—その発見と解明の経過—」『化学史研究』第 16 巻（1989）：149-153.
- 竹林松二「ゴイターの「二塩化炭素」—ジクロロカルベンの化学の始まりと進展—」『化学史研究』第 18 巻（1991）：4-10.
- 竹林松二「アルミニウム・アルコキシドを用いる還元反応—Meerwein-Ponndorf-Verley 還元の見解と解明の経過—」『化学史研究』第 19 巻（1992）：105-109.
- 竹林松二「L. クライゼンとその人名反応」『化学史研究』第 19 巻（1992）：262-266.
- 日吉芳朗「パーキンと人口紫色染料モーベインの発見と研究」『化学史研究』第 21 巻（1994）：345-357.
- 岩倉義男「ポリメチレンジイソシアナートと水との反応—多員環状尿素化合物を創る—わが研究回想—」『化学史研究』第 28 巻（2001）：86-90.
- 岩倉義男「わが研究回想 4—その 1—ポリメチレンビスエチレン尿素との出会いから反応性接着剤、開環重合付加反応、反応性高分子開発への途」『化学史研究』第 29 巻（2002）：43-48.
- M. D. Gordin（梶雅範訳）「フリードリヒ・パイルシュタインと『有機化学便覧』」『化学史研究』第 32 巻（2005）：217-234.

リービッヒ

- マイヤー、リービッヒ、ファラデー（崎川範行譯編）『エネルギー理論の成立』創元社（1951）.
- リービッヒ（柏木肇訳）『化学通信』I・II、岩波文庫（1952）.
- 山岡望『リービッヒ=ウェーラー往復書簡：ギーセン時代』（化学史談 7）内田老鶴圃新社（1966）.
- 山岡望『リービッヒ=ウェーラー往復書簡：ミュンヘン時代』（化学史談 8）内田老鶴圃新社（1969）.
- ユストゥス・リービッヒ（横田徳郎訳）『農学と生理学に応用した有機化学』（Justus Liebig, *Die organische Chemie in ihrer Anwendung auf Agrikultur und Physilogie*, 1840）自家版（1996）.
- リービヒ（田中豊助・大原共訳）『動物化学』内田老鶴圃（2000）.
- 鈴木千代吉編『リービッヒ先生』肥料研究會（1910）.
- 三沢岳郎「リービッヒの思想とその意義」『農業と経済』15(8)（1949.08）.
- 園上閑夫（柏木肇）『唯物論形成の化学史的背景：リービッヒの「化学事情」論考』白東書館（1949）.
- 飯沼二郎「ユストゥス・フォン・リービッヒの輪作経営論—特にその輪作理論形成上に於ける位置づけ」『農業経済研究』22(1)（1950）.
- 三沢岳郎「西欧農学史に於ける地力均衡論の展開—リービッヒを中心として」『農業技術』5(3)（1950.03）.
- 田中實『化学者リービッヒ』岩波新書（1951）.
- 三沢岳郎「農芸科学の恩人—田中実著「科学者リービッヒ」」『地上』5(12)（1951.12）.
- Tatsumasa Doke, “The Controversy between Liebig and Pasteur”, *Japanese Studies in the History of Science*, No. 6（1967）：87-95.

- 山岡望『続・化学史窓：リービッヒのアルバム』（化学史窓；続）内田老鶴圃新社（1973）。
- 椎名重明『農学の思想：マルクスとリービヒ』東京大学出版会（1976）。
- 山岡望「化学史談II：ギーセンの化学教室」内田老鶴圃新社（1979）。
- W. H. ブロック（板垣良一訳・解説）「リービヒ研究の現状」『化学史研究』第23号（1983年）：61-74。
- 佐藤俊夫「F. G. シュルツェ農学論—シュルツェによる“リービッヒ農耕理論”の方法論的批判の検討を通して」『九州大学農学部学芸雑誌』41(3・4)（1987）。
- 佐藤俊夫「農耕理論の構築におけるテアとリービッヒ」『鳥取大学農学部研究報告』通号40号（1987.11）。
- 柏祐賢「リービッヒの『中国農業』論」（柏祐賢）『ヨーロッパ及びアジアの農業』京都産業大学出版会（1988）所収。
- 菊地重秋「今日的な科学者養成法の創始者ユストス・フォン・リービヒ」『科学技術ジャーナル』（1996.8）：42-43。
- 有本建男「科学技術の体制を築いた人々（7）科学に基礎をおく先端産業の出現—リービッヒとホフマンが築いた実験研究室制度とドイツ染料産業」『情報管理』40(7)（1997.10）。
- 島尾永康「リービッヒの顕彰・普及に励むリービッヒの子孫レヴィツキ氏」『化学史研究』通号87号（1999）：96-98。
- 横田徳郎・阪上正信「窒素肥料に関するLiebigとLawesらの論争」『化学史研究』第31巻（2004）：14-34。
- 渡邊慶昭「Justus von Liebig 生誕200年に寄せて—ある古書目録にみるリービッヒの業績」『化学史研究』通号106号（2004）：40-46。
- 横田徳郎「Liebigによる「大気窒素充足説」の起源—Boussingaultのマメ科による空気窒素固定現象の発見—」『化学史研究』第32巻（2005）：144-152。
- 渡邊慶昭「Justus von Liebig 生誕200年に寄せて—「リービッヒの肉エキス」とそのレシピ」『化学史研究』通号110号（2005）：61-66。
- 渡邊慶昭「Justus von Liebig 生誕200年に寄せて—リービッヒの足跡を尋ねて」『化学史研究』通号112号（2005）：176-180。

ケ ク レ

- A. Kekulé（野村祐次郎訳・解説）「化合物の構造と変化について，ならびに炭素の化学的性質について」（“Ueber die Constitution und die Metamorphosen der chemischen Verbindungen und über die chemische Natur des Kohlenstoffs”, *Annalen der Chemie und Pharmacie*, **106** (1858) : 129-159）（日本化学会編）『化学の原典10』（有機化学構造論）東京大学出版会（1976年）所収。
- John H. Wotiz and Susanna Rudofsky “Kekule's Dreams: Facts or Fiction?”『化学史研究』第29号（1984年）：126-133。
- 井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィー10. ケクレは本当に夢を見たか—科学の創造性と夢」『化学』42(1)（1987.01）。
- 山口達明「ケクレは本当に夢を見たのか—化学史家W教授の推理（化学—夢のある話〈特集〉）—（夢にまつわる話題）」『化学』49(1)（1994.01）。
- クラウス・ハフナー（中辻慎一訳）『化学の建築家ケクレ：ベンゼンいまむかし』内田老鶴圃（1995）。

有本建男「科学技術の体制を築いた人々：8. ドイツ・カールスルーエで開かれた第1回国際化学会議とケクレおよびヴェルツの貢献」『情報管理』**40**(8) (1997.11).

原田馨「どうやって思いついたの (2) ケクレーベンゼンの構造はどのようにして生まれたか」『化学と教育』**46**(7) (1998.07).

周 期 律

D. I. Mendelejeff (阪上正信訳・解説)「元素の性質と原子量の関係について」(“Über die Beziehungen der Eigenschaften zu den Atomgewichten der Elemente”, *Z. Chem.*, **12** (1869) : 405-406) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

D. I. Mendelejeff (阪上正信訳・解説)「化学元素の周期的規則性」(“Die periodische Gesetzmässigkeit der chemische Elemente”, *Ann. d. Chem. u. Pharm. Suppl.* **VIII** (1871) : 133-229) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

L. Meyer (野村昭之助訳・解説)「原子量の関数としての化学元素の性質」(“Die Natur der chemischen Elemente als Funktion ihrer Atomgewichte”, *Ann. d. Chem. u. Pharm. Suppl.* **VII** (1870) : 354-364) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

J. Thomsen (阪上正信訳・解説)「化学元素の系統的分類」(“Systematische Gruppierung der chemischen Elemente”, *Z. anorg. Chem.*, **9** (1895) : 190-193) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

H. G. J. Moseley (奥野久輝訳・解説)「諸元素の高振動数スペクトル第1部」(“The High Frequency Spectra of the Elements. Part I.”, *Phil. Mag.*, **26** (Dec., 1913) : 1024-1034) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

H. G. J. Moseley (奥野久輝訳・解説)「諸元素の高振動数スペクトル第2部」(“The High Frequency Spectra of the Elements. Part II.”, *Phil. Mag.*, **27** (Apr., 1914) : 703-713) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

E. M. McMillan, P. H. Abelson (阪上正信訳・解説)「放射性元素 93」(“Radioactive Element 93”, *Phys. Rev.*, **57** (1940) : 1185-1186) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

G. T. Seaborg (阪上正信訳・解説)「最も重い諸元素の電子構造」(“Electronic Structure of the Heaviest Elements”, *Metallurgical Laboratory Memorandum* MuC-GTS-858 (1944 年 7 月 17 日) および *Metallurgical Project Report* CK-1968 : 55-57 (1944 年 7 月 17 日)) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

G. T. Seaborg (阪上正信訳・解説)「最も重い諸元素の周期系中の位置と電子構造」(“Place in Periodic System and Electronic Structure of the Heaviest Elements”, *Nucleonics*, **5**(5) (1949) : 16-36) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

M. Haissinsky (松浦二郎訳・解説)「シスおよび超ウラン元素の化学」(“La chimie des cis- et trans-uraniens comparée a celle des lanthanides et des éléments de transition”, *XVIIème Congrès International de Chimie Pure et Appliquée* (1957), p. 185-202) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.

メンデレーエフ (田中豊助・福渡共訳)「化学の原論 (上・下)」内田老鶴圃 (2000).

- O. ピザルジェブスキー (広田鋼蔵・小谷照男訳)『メンデレーフ：週期表の発見者の業績と思想』共立出版 (1956).
- バーナード・ヤッフェ (竹内敬人訳)『モーズリーと周期律：元素の点呼者』河出書房新社 (1972).
- ボニファチ・ミハイロビッチ・ケドロフ (大竹三郎訳)『科学的発見のアナトミア：メンデレーフの法則をめぐる』法政大学出版局 (1973).
- ゲルマン・スミルノフ (木下高一郎訳)『メンデレーフ伝：元素周期表はいかにして生まれたか』講談社ブルーバックス (1976).
- 塚原徳道「元素周期表をめぐる一植田式周期表を中心に」『化学』**31**(5) (1976.05).
- J. W. ファン スプロンセン (島原健三訳)『周期系の歴史』上・下巻, 三共出版 (1978).
- 木村健二郎・木村幹「元素の周期律 (化学における発明発見—その芽と発展)」『化学教育』**28**(5) (1980.10).
- 梶雅範・道家達将「メンデレーフ研究-1-メンデレーフの周期律発見過程-1-ジェラルルの化学理論の受容」『東京工業大学人文論叢』通号 9 号 (1983).
- 井山弘幸「化学を学ぶ人のためのサイエンス・フィロソフィー8. メンデレーフの予言は何を意味するか」『化学』**41**(11) (1986.11).
- Ekkehard Fluck・Karl Rumpf (井上秀成訳)「古くて新しい論争—元素の周期表」『化学と工業』**40**(7) (1987.07).
- 島原健三「化学史・常識のウソ (8) 周期律の発見者はだれか：メンデレーフが発見者とされる理由は？」『化学と教育』**35**(5) (1987.10).
- 梶雅範「メンデレーフの周期律発見に至る過程に関する考察—1854-69 年のメンデレーフの研究の分析」『科学史研究』[第 2 期] 通号 163 号 (1988).
- 梶雅範「メンデレーフの化学教科書「化学の原理」初版の歴史的な位置づけ」『科学史研究』[第 2 期] 通号 165 号 (1988).
- 梶雅範「メンデレーフの生地トボリスクを訪ねて」『サジアトール』No. 22 (1993) : 69-81.
- 梶雅範「ボロヴォ村を訪ねて—メンデレーフの夏の別荘の地」『サジアトール』No. 23 (1995) : 32-35 頁.
- 梶雅範「メンデレーフの息子と日本」『サジアトール』No. 24 (1996) : 52-58 頁.
- 梶雅範「元素周期律の発見者メンデレーフ」『科学技術ジャーナル』(1996.6) : 42-43.
- 梶雅範『メンデレーフの周期律発見』北海道大学図書刊行会 (1997).
- 大西寛「周期表と周期律表」『化学史研究』通号 85 号 (1998) : 256-258.
- 竹内敬人「どうしてそれがわかったの (3) 周期律の発見」『化学と教育』**46**(1) (1998.01).
- 梶雅範「メンデレーフの息子と明治日本」『技術文化論叢』**No. 2** (1999) : 1-10.
- I. S. ドミートリエフ (梶雅範訳・解説)「化学者メンデレーフの生涯と業績—その社会的・経済的側面—」『化学史研究』第 26 卷 (1999) : 11-33.
- 梶雅範「メンデレーフの息子の日本訪問に関する新資料」『技術文化論叢』**No. 6** (2003) : 19-30.
- 梶雅範「メンデレーフの伝記」『日本の科学者』**41-2** (2006) : 30-35.

生 化 学

道家達将「生化学史研究序説—生化学における生物学的方法と化学的方法の矛盾と統一」『東京工業大学学

報』通号 31 号 (1966.08).

木村雄吉『ギリシャの生化学』中央公論社 (1975).

ジョセフ・ニーダム (木原弘二訳)『生化学の歴史』みすず書房 (1978).

J. S. フルートン (水上茂樹訳)『生化学史：分子と生命』共立出版 (1978).

T. S. ホール (長野敬訳)『生命と物質—生理学思想の歴史』上・下巻, 平凡社 (1990).

森正保『生化学の魔術師—ポルフィリン』裳華房 (1990).

新井賢一『それは失敗からはじまった—生命分子の合成に賭けた男』羊土社 (1991).

丸山工作『生化学の夜明け：醗酵の謎を追って』中央公論社 (1993).

丸山工作『生化学をつくった人々』裳華房 (2001).

パストゥール

L. Pasteur (中崎昌雄訳・解説)「天然有機物の分子 dissymétrie に関する研究」(“Recherches sur la Dissymétrie moléculaire des Produits organiques naturels” *Oeuvres de Pasteur*, “Dissymétrie moléculaire”, 314-344 (1860). 1860 年のパリ化学会における講演) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収.

パストゥール (長野敬責任編集)『科学の名著 10 アルコール発酵論 (他 25 論文)』朝日出版社 (1981).

L. パストゥール (成定薫編)「フランス科学についての省察」『化学史研究』第 15 号 (1981): 29-41

パストゥール (竹田正一郎・北畠克顕訳)『ビールの研究：ビールの病変, 病変の原因, ビールに変敗耐性を付与する方法および発酵に関する新理論』大阪大学出版会 (1995).

フランシス・E・ベンズ (大江専一訳)『人類の大恩人パストゥール傳』青年書房 (1940).

L. デクール (根津憲三訳)『パストゥールとその業績』三省堂 (1941).

ヴァレリー・ラド (桶谷繁雄訳)『ルキ・パストゥール』富山房 (1941).

平野威馬雄『パストウル』偕成社 (1942).

メチニコフ (宮村定男訳)『近代醫學の建設者：パストゥール・リスター・コッホ』岩波書店 (1944).

桶谷繁雄『ルイ・パストゥールの生涯：愛の科学者』日本科学社 (1947).

澤田謙『パストウル傳』潮文閣 (1950).

平野威馬雄『パストウル：愛の科学者』ポプラ社 (1950).

澤田謙『パストウル傳』多摩書院 (1952).

ジャック・ニコル (萬年甫・萬年徹訳)『科学者パストゥール』みすず書房 (1964).

川喜田愛郎『パストゥール』岩波書店 (1967).

リーン・J・デュボス (竹田美文・竹田多恵訳)『ルイ・パストゥール：驚異の世紀におけるその生涯と業績』納屋書店 (1967).

ルネ・デュボス (長野敬訳)『パストゥール：20 世紀科学の先達』河出書房新社 (1968).

中村浩『パストゥールとコッホの発見』岩崎書店 (1975).

パストゥール・ヴァレリー=ラド (持田勲・持田明子訳)『人間パストゥール』みすず書房 (1979).

『ルイ・パストゥール：人類の恩人』内藤記念くすり博物館 (1979).

ルネ・デュボス (竹田美文訳)『ルイ・パストゥール』1, 2, 3. 講談社 (1979)..

ブルーノ=ラトゥール (岸田るり子・和田美智子訳)『細菌と戦うパストゥール』偕成社 (1988).

ビバリー・バーチ (菊島伊久栄訳)『パストゥール』偕成社 (1992).

スティーヴ・パーカー（百々佑利子訳）『パストゥール』岩波書店（1995）。

ルネ・デュボス（T・D・ブロック編；長木大三・田口文章・岸田綱太郎訳）『パストゥール：世紀を超えた生命科学への洞察』学会出版センター（1996）。

ジェラルド L. ギーソン（長野敬＋太田英彦訳）『パストゥール：実験ノートと未公開の研究』青土社（2000）。

物 理 化 学

S. Arrhenius（桑田敬治訳・解説）「酸によるショ糖転化の反応速度について」（“Über die Reaktionsgeschwindigkeit bei der Inversion von Rohrzucker durch Säuren”, *Z. Physik. Chem.*, **4** (1889) : 226-248）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

Svante Arrhenius（上平恒訳・解説）「水に溶けた物質の解離」（“Über die Dissociation der in Wasser gelösten Stoffe”, *Z. phys. Chem.*, **1** (1887) : 631-648）（日本化学会編）『化学の原典 2（第II期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

W. C. McC. Lewis（安盛岩雄訳・解説）「触媒作用の研究（第九報）気相系の反応速度定数および平衡定数の絶対計算」（“Studies in Catalysis. Part IX. The Calculation in Absolute Measure of Velocity Constants and Equilibrium Constants in Gaseous Systems”, *J. Chem. Soc.*, **113** (1918) : 471-492）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

G. N. Lewis, D. F. Smith（慶伊富長訳・解説）「反応速度の理論」（“The Theory of Reaction Rate”, *J. Am. Chem. Soc.*, **47** (1925) : 1508-1520）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

R. C. Tolman（倉谷健治訳・解説）「化学反応の機構」（“The Mechanism of Chemical Reaction”, *J. Am. Chem. Soc.*, **47** (1925) : 1524-1553）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

C. N. Hinshelwood（土屋荘次訳・解説）「単分子反応の理論について」（“On the Theory of Unimolecular Reaction”, *Proc. Roy. Soc.*, **113A** (1926) : 230-233）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

O. K. Rice, H. C. Ramsperger（天野杲訳・解説）「低圧における単分子気相反応に関する理論」（“Theories of Unimolecular Gas Reactions of Low Pressures”, *J. Am. Chem. Soc.*, **49** (1927) : 1617-1629）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

S. London（佐藤伸訳・解説）「等極結合の機構について」（“Über den Mechanismus der homöopolaren Bindung”, *Sommerfeld Festband* (1928), pp. 104-113）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。

Cato Maximilian Guldberg og Peter Waage（佐佐木行美訳・解説）「親和力の研究」（“Studier over Affiniteten” 1864 年 3 月 11 日ノルウェー科学アカデミーで行われた講演）（日本化学会編）『化学の原典 2（第II期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

Søren Peter Lauritz Sørensen（田中元治訳・解説）「酵素の研究II 酵素反応における水素イオン 濃度の測定と重要性について」（“Études Enzymatiques. II. Sur la Mesure et l'Importance de la Concentration des Ions Hydrogène dans les Réactions Enzymatiques”, *Comptes-Rendus des Travaux du Laboratoire de Carlsberg*, **VIII** (1909-10) : 1-168）（日本化学会編）『化学の原典 2（第II期）』（電解質の溶液化学）

学会出版センター（1984）所収。

Peter Debye und Erich Hückel（玉虫伶太訳・解説）「電解質理論 I 凝固点降下および関連現象」（“Zur Theorie der Elektrolyte. I. Gefrierpunktserniedrigung und verwandte Erscheinungen”, *Phys. Z.*, **24** (1923) : 185-206）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

Niels Bjerrum（宮原豊訳・解説）「イオン会合の研究 I 中程度の会合が起る際にイオンの活量に及ぼす会合の影響」（“Untersuchungen über Ionenassoziation. I. Der Einfluss der Ionenassoziation auf die Aktivität der Ionen bei mittleren Assoziationsgraden”, *Det Kgl. Danske Videnskab. Selskab. Math-fys. Medd.* **7** (1926) : 1-48）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

Jannik Bjerrum（山内脩訳・解説）「銅アンモニア化合物に関する研究 I アンモニア蒸気圧測定ならびに塩基性硝酸銅（ゲルハルトタイト）を用いた溶解度測定によるアンミン銅イオンの錯化定数の決定」（“Untersuchungen über Kupferammoniakverbindungen. I. Bestimmung der Komplexitätskonstanten der Amminkupriionen durch Ammoniak tensionsmessungen und durch Löslichkeitsbestimmungen mit basischem Kuprinitrat (Gerhardt)”, *Kgl. Danske Videnskab. Selskab. Math-fys. Medd.* **11** (1931) : 1-56）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

G. Schwarzenback, E. Kampitsh and R. Steiner（上野景平訳・解説）「コンプレキソン I ニトリロ三酢酸の塩生成挙動」（“Komplexe. I. Über die Salzbildung der Nitrilotriessigsäure”, *Helv. Chim. Acta*, **28** (1945) : 828-840）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

G. Schwarzenback（上野景平訳・解説）「各種金属イオンの新しい定量法」（“Nouvelles Méthodes de Dosage de Certains Cations Metalliques”, *Helv. Chim. Acta*, **29** (1946) : 1338）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

J. Morgan and B. E. Warren（荒川泓訳・解説）「水の構造の X 線解析」（“X-Ray Analysis of the Structure of Water”, *J. Chem. Phys.*, **6** (1938) : 666-673）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

H. Irving and R. J. P. Williams（荻野博訳・解説）「金属錯体の安定度の序列」（“Order of Stability of Metal Complexes”, *Nature*, **162** (1948) : 746-747）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

H. Irving and R. J. P. Williams（荻野博訳・解説）「遷移金属錯体の安定度」（“The Stability of Transition-Metal Complexes”, *J. Chem. Soc.*, **1953** (1948) : 746-747）（日本化学会編『化学の原典 2（第 II 期）』（電解質の溶液化学）学会出版センター（1984）所収。

レオ・ケーニヒスベルグ（宮入慶之助訳）『科学者ヘルマン・フオン・ヘルムホルツ評傳』河出書房（1943）。

K. メンデルスゾーン（藤井かよ・藤井昭彦訳）『ネルンストの世界：ドイツ科学の興亡』岩波書店（1976）。藤井清久「ル・シャトリエの原理の成立過程—化学における類推的想像力—」『化学史研究』第 10 号（1979）：5-14。

宮原孝四郎「化学反応速度論の着想と発展（化学における重要な基本概念—その形成と展開〈特集〉）」『化学教育』**28**(4)（1980.08）。

- 川井雄「質量作用の法則に関するグルベルグとヴォーゲの研究」『化学史研究』第 17 号 (1981) : 33-40.
- 小塩玄也「反応速度の認識と反応速度の形成—ヴィルヘルミを中心として—」『化学史研究』第 18 号 (1982) : 20-31.
- 山口宙平「Helmholtz の電気化学研究と“自由エネルギー”概念」『科学史研究』[第 II 期] 第 21 卷 (No. 141) (1982).
- 称宜田久男「化学親和力の概念」『化学史研究』第 24 号 (1983) : 111-115.
- 藤井清久「化学における類比的想像力の働き—ファント・ホフと近代溶液理論の成立—」『化学史研究』第 26 号 (1984) : 21-29.
- メアリー・ジョー・ナイ (古川安訳・解説)「フランス物理化学の出現とジャン・ペランの成功」『化学史研究』第 27 号 (1984) : 57-67.
- 立花太郎「物理化学のこの百年(1887~1987)—論文誌の変遷からの考察—」『化学史研究』第 39 号 (1987) : 61-72.
- 小岩昌宏「資料 アレニウスと反応速度論—伝記に見るその人間像」『まてりあ』39(1) (2000.01).
- 小岩昌宏「資料 アイリング, 絶対反応速度論, 活性化エネルギー」『まてりあ』39(2) (2000.02).
- 小岩昌宏「金属学プロムナード (13) 反応速度論・アレニウス・アイリング」『金属』通号 999 号 (2003.4).

オストヴァルト

- オストワルト (文部省科学教育局訳)『科学の体系—科学的な思考と労作への道—』岩波書店 (1947).
- W. オストワルド (都築洋次郎訳)『オストワルド自伝』東京図書 (1979).
- Friedrich Wilhelm Ostwald (谷口吉弘・鈴木啓三訳・鈴木啓三解説)「液体理論について」(“Zur Theorie der Flüssigkeiten”, *Z. phys. Chem.*, 2 (1888) : 36-37) (日本化学会編)『化学の原典 2 (第 II 期)』(電解質の溶液化学) 学会出版センター (1984) 所収.
- 田中実「Wilhelm Ostwald における原子仮説—原子論史の 1 問題—」『科学史研究』第 II 期 No. 82 (1967).

立体化学

- J. Wislicenus (中崎昌雄訳・解説)「乳酸の異性体について (第二報)」(“Ueber die isomeren Milchsäure. Zweite Abhandlung. Ueber die optisch-active Milchsäure der Fleischflüssigkeit, die Paramilchsäure”, *Ann.*, 167 (1873) : 302) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収.
- J. H. Van't Hoff (中崎昌雄訳・解説)「現在, 化学で使われている構造式を空間に拡張する提案, ならびにそれに関連して光学活性と有機化合物の化学構造との関係についての考察」(“Voorstel tot Uitbreiding der tegenwoordig in de scheikunde gebruikte Structuur-Formules in de ruimte; benevens een daarmee samenhangende opmerking omtrent het verband tusschen optisch actief Vermogen en Chemische Constitutie van Organische Verbindingen”, *Archives Néerlandaises des Sciences exactes et naturelles*, 9 (1874) : 445-454) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収.
- J. A. Le Bel (中崎昌雄訳・解説)「有機物の分子式とその溶液の旋光能との関係について」(“Sur les Relations qui existent entre les Formules atomiques des Corps organiques et le Pouvoir rotatoire de leurs Dissolutions”, *Bulletin de la Société chimique de France*, (2), 22(1874) : 337-34) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収.

- W. H. Perkin, Jr. (中崎昌雄訳・解説)「炭素環合成の初期の歴史」(“The Early History of the Synthesis of Closed Carbon Chains”, *J. Chem. Soc.*, **1929**, 1347 日本化学会編『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- A. Von Baeyer (中崎昌雄訳・解説)「ポリアセチレン化合物について (第二報)」“Über Polyacetylenverbindungen. Zweite Mitteilung” *Ber.*, **18**, 2269 (1885) 日本化学会編『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975), 所収。
- H. Sachse (中崎昌雄訳・解説)「ヘキサメチレン誘導体の幾何学異性について」(“Ueber die geometrischen Isomeren der Hexamethylen-derivate”, *Ber.*, **23** (1890) : 1363) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- E. Mohr (中崎昌雄訳・解説)「BAEYER の張力説とダイヤモンドの構造」(“Die Baeyersche Spannungstheorie und die Struktur des Diamanten”, *J. Prakt. Chem.*, [2], **98** (1918) : 315) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- D. H. R. Barton (中崎昌雄訳・解説)「ステロイド核の立体配座」(“The Conformation of the Steroid Nucleus”, *Experientia*, **6** (1950) : 316) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- F. Fischer (中崎昌雄訳・解説)「ブドウ糖およびその異性体の配置について (第二報)」(“Über die Konfiguration des Traubenzuckers und seiner Isomeren. II”. *Ber.*, **24** (1891) : 2683) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- J. M. Bijvoet, A. F. Peerdeman, A. J. Van Bommel (中崎昌雄訳・解説)「X 線による光学活性体の絶対配置の決定」(“Determination of the Absolute Configuration of Optically Active Compounds by Means of X-rays”, *Nature*, **271** (1951)) (日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975) 所収。
- ファン・ホッフ (田中豊助・石橋・原田紀子訳)『立体化学』内田老鶴圃 (2000)。
- 中崎昌雄「『有機立体化学』の解説」(日本化学会編)『化学の原典 11』(有機立体化学) 東京大学出版会 (1975), pp. 175-221。
- 西尾元宏「立体化学への招待—人類の自然認識過程におけるひとつの断面-1-巨匠の時代—混沌とロマンの世紀」『化学の領域』**30** (2) (1976.02)。
- 西尾元宏「立体化学への招待—人類の自然認識過程におけるひとつの断面-2-ある方法論的試論」『化学の領域』**30** (3) (1976.03)。
- 竹内敬人「生命の秘密に挑む有機化学—糖, アミノ酸と立体化学 (世紀末は大発見の時代 <特集>)—(新世紀を拓いた大発見—19 世紀末の科学者群像)」『化学』**49** (12) (1994.12)。

希 ガ ス

- Lord Rayleigh (奥野久輝訳・解説)「窒素の密度の測定において遭遇した異常について」(“On an Anomally encountered in Determinations of the Density of Nitrogen Gas”, *Proc. Roy. Soc.*, **55** (1894) : 340-344) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収。
- Lord Rayleigh, W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「大気中の新成分, アルゴン」(“Argon, a New Constituent of the Atmosphere”, *Phil. Trans.*, **186** (1895) : 187-241) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収。

- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「ヘリウムの発見」(“Discovery of Helium”, *Chem. News*, **71** (Mar. 29, 1895) : 151) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Crookes (奥野久輝訳・解説)「クレープ石からの気体のスペクトル」(“The Spectrum of the Gas from Cleveite”, *Chem. News*, **71** (Mar. 29, 1895) : 151) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「地上のヘリウム (?)」(“Terrestrial Helium (?)”, *Nature*, **51** (Mar. 28, 1895) : 512) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「アルゴンおよびヘリウムに関する Ramsay 教授の新研究」(“Nouvelles recherches de M. Ramsay sur l’argon et sur l’hélium”, *Compt. Rend.*, **120** (Mar. 25, 1895) : 12, 660 ; *Chem. News*, **71** (Apr. 11, 1895) : 176) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「ヘリウム (コロナスペクトル中の線の一つである D₃ 線の原因と称される元素) のスペクトルを示す気体について (予報)」(“On a Gas showing the Spectrum of Helium, the reputed Cause of D₃, One of the Lines in the Coronal Spectrum. Preliminary Note”, *Proc. Roy. Soc.*, **58** (Apr. 25, 1895) : 65-67) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「ヘリウム, ある種の鉱物の一気体成分 (第一部)」(“Helium, a Gaseous Constituent of certain Minerals. Part I”. *Proc. Roy. Soc.*, **58** (May 2, 1895) : 81-89) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, J. N. Collie, M. Travers (奥野久輝訳・解説)「ヘリウム, ある種の鉱物の一成分」(“Helium, a Constituent of certain Minerals”, *Trans. Chem. Soc.*, **67** (1895) : 684-701) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- P. T. Clève (奥野久輝訳・解説)「クレープ石中のヘリウムの存在について」(“On the Presence of Helium in Clèveite”, *Chem. News*, **71** (May 3, 1895) : 212) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, J. N. Collie (奥野久輝訳・解説)「ヘリウムおよびアルゴン III これらの元素の不活性を示す諸実験」(“Helium and Argon. Part III. Experiments which show the Inactivity of these Elements”, *Proc. Roy. Soc.*, **60** (1896) : 53-56) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, J. N. Collie (奥野久輝訳・解説)「ヘリウムおよびアルゴンの均質性」(“The Homogeneity of Helium and of Argon”, *Proc. Roy. Soc.*, **60** (1896) : 206-216) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, M. W. Travers (奥野久輝訳・解説)「ヘリウムの均質性」(“The Homogeneity of Helium”, *Proc. Roy. Soc.*, **62** (1898) : 316-324) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「ある未発見気体」(“An Undiscovered Gas”, *Chem. News*, **76** (Aug. 20, 1897) : 91-93, 97-99) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究)学会出版センター (1976) 所収.

- W. Ramsay, M. W. Travers (奥野久輝訳・解説)「大気空気の新成分について」(“On a new Constituent of Atmospheric Air”, *Proc. Roy. Soc.*, **63** (1898) : 405-408) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, M. W. Travers (奥野久輝訳・解説)「アルゴンの仲間について」(“On the Companions of Argon”, *Proc. Roy. Soc.*, **63** (1898) : 437-440) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay, M. W. Travers (奥野久輝訳・解説)「アルゴンの同類元素の抽出およびネオンについて」(“On the Extraction of the Companions of Argon and on Neon”, *Chem. News*, **78** (Sept. 23, 1898) : 154-155) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- W. Ramsay (奥野久輝訳・解説)「最近発見された諸気体と、その周期律との関係について」(“Ueber die neuerdings entdeckten Gase und ihre Beziehung zum periodischen Gesetz”, *Ber.*, **31** (1898) : 3111-3121) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976 年) 所収.
- N. Bartlett (水町邦彦訳・解説)「ヘキサフルオロ白金 (V) 酸キセノン $\text{Xe}^+[\text{PtF}_6]^-$ 」(“Xenon Hexafluoroplatinate (V) $\text{Xe}^+[\text{PtF}_6]^-$ ”, *Proc. Chem. Soc.*, **218** (1962)) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- H. H. Claassen, H. Selig, J. G. Malm (水町邦彦訳・解説)「四フッ化キセノン」(“Xenon Tetrafluoride”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **84** (1962) : 3593) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- R. Hoppe, W. Dähne, H. Mattauch, K. M. Rödder (水町邦彦訳・解説)「キセノンのフッ素化」(“Fluorierung von Xenon”, *Angew. Chem*, **74** (1962) : 903) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- J. J. Turner, G. C. Pimentel (水町邦彦訳・解説)「クリプトンのフッ化物：マトリックス隔離法による合成」(“Krypton Fluoride: Preparation by the Matrix Isolation Technique”, *Science*, **140** (1963) : 974-975) (日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976) 所収.
- 奥野久輝『『希ガスの発見と研究』の解説』(日本化学会編)『化学の原典 9』(希ガスの発見と研究) 学会出版センター (1976), pp. 203-208.

20 世紀

- カール・ホルダーマン (和田野基訳)『カール・ボッシュ：その生涯と業績』文陽社 (1964).
- Tetu Hirose, “The van den Broek Hypothesis,” *Japanese Studies of History of Science*, No. 10 (1971) : 143-162.
- 野副鉄男「研究回顧—トロポイド化学のおいたち—」『化学史研究』第 5 号 (1976) : 1-11.
- 河原林泰雄「アメリカの化学史運動の側面—Edgar Fahs Smith をめぐって—」『化学史研究』第 6 号 (1977 年) : 6-19.
- 木村健二郎「ハフニウムの発見と X 線分光分析の創始」『化学史研究』第 6 号 (1977) : 1-5.
- メンデルスゾーン (大島恵一訳)『絶対零度への挑戦：低温の世界を求めた科学のドラマ』講談社 (1978).
- 河原林泰雄「初期のアメリカ化学会化学教育部会の組織と活動 (1)・(2)」『化学史研究』第 9 号 (1979) : 1-8, 第 10 号 (1979) : 27-38.
- 植村琢「Urbain と Perrin—フランス留学の思い出—」『化学史研究』第 10 号 (1979) : 1-4.

- 菅原健「地球化学概念の内包と外延」『化学史研究』第15号(1981):1-7.
- 立花太郎「化学からみたエネルギー-課外授業-2完-化学史とエネルギー-2-ソディと池田菊苗の場合(講座)」『化学』37(2)(1982.02).
- 徳元琴代「現代化学史をどう見るか」(山崎正勝・兵藤友博・奥山修平・大沼正則編著)『科学史:その課題と方法』青木書店(1987):172-193.
- 宮下晋吉「炉産業と高温の科学」(山崎正勝・兵藤友博・奥山修平・大沼正則編著)『科学史:その課題と方法』青木書店(1987):151-169.
- 岡本達明「合成化学労働の初期形態について」『化学史研究』第17巻(1990):8-29.
- シャルロット・ケルナー(平野卿子訳)『核分裂を発見した人:リーゼ・マイトナーの生涯』晶文社(1990).
- Chiyoko Fujisaki, "The Role of T. Heurlinger in the Development of Modern Visible Molecular Spectroscopy", *Historia Scientiarum*, 1 (1991): 133-162.
- 高木俊夫「ウプサラのバイオ分離科学学派の研究史事始」『化学史研究』第19巻(1992):205-211.
- 立花太郎「液晶研究の初期とその背景および現代化学への寄与」『化学史研究』第19巻(1992):1-13.
- ジョルジュ・ロシャク(宇田川博訳)『ルイ・ド・ブロイ:二十世紀物理学の貴公子』国文社(1995).
- 梶雅範「イパーチエフ:祖国の運命に翻弄された化学者」『科学技術ジャーナル』(1997.6) 30-43.
- 姜雄「放射性炭素による年代決定法を確立したウィラード・リビー」『科学技術ジャーナル』(1999.12): 30-31.
- 梶雅範「ヴェルナツキー-科学者と国家」*Science & Technology Journal* (2001): 46-47.
- 田畑米穂「私の放射線化学史」『放射線と産業』No. 89 (2001), No. 90-92 (2001), No. 93-96 (2002), No. 97-99 (2003), No. 101-103 (2004), No. 105・106 (2005).
- 松下至『クロマトグラフィーの創始者 M. S. ツウットの生涯と業績』恒星社厚生閣(2002).
- R. L. サイム(鈴木淑美訳)『リーゼ・マイトナー:嵐の時代を生き抜いた女性科学者:1878-1968』シュプリンガー・フェアラーク東京(2004).

原子構造

- A. L. Parson(藤崎千代子訳・解説)「磁子説による原子構造論」『化学史研究』第1号(1974):42-49, 第4号(1975):34-47.

物理学史研究刊行会編『原子構造論』(物理学古典論文叢書10)東海大学出版会(1969).

内容:原子の核-惑星構造=La structure nucleo-planetaire des atomes / Jean Perrin [著];八木江里訳;円軌道をえがく粒子(電子)系の磁氣的性質=The magnetic properties of systems of corpuscles describing circular orbits / J. J. Thomson [著];後藤順子訳;線および帯スペクトルと放射能現象を示す粒子(電子)系の運動=Kinetics of a system of particles illustrating the line and the band spectrum and the phenomena of radioactivity / 長岡半太郎著;八木江里訳;原子の構造について=on the structure of the atom / J. J. Thomson [著];後藤順子訳;磁気原子場と系列スペクトル=Magnetische Atomfelder und Serienspektren / Walther Ritz [著];井田幸次郎訳;Planckの輻射法則の電気力学的な意義および電気素量と水素原子の大きさに関する新しい決定について=Über die elektrodynamische Bedeutung des Planck'schen Strahlungsgesetzes und über eine neue Bestimmung des elektrischen Elementarquantums und der Dimensionen des Wasserstoffatoms / A. E. Haas [著];井田幸次郎訳;黒体輻射の法則の基礎について=Über die Begründung des Gesetzes der schwarzen Strahlung / Max

Planck [著];井田幸次郎訳;原子および分子の構造について=On the constitution of atoms and molecules / Niels Bohr [著];後藤鉄男訳;長岡-Schott 論争 / G. A. Schott, 長岡半太郎 [著];八木江里訳
物理学史研究刊行会編『放射能』(物理学古典論文叢書 7) 東海大学出版会 (1970)。

内容:新しい型の放射線について=Ueber eine neue Art von Strahlen / W. C. Röntgen [著];木村豊
訳;Röntgen 線にさらされた気体中の電気の通過について=On the passage of electricity through gases
exposed to Röntgen rays / J. J. Thomson and E. Rutherford [著];萱沼和子訳;りん光によって発せら
れる放射について=Sur les radiations emises par phosphorescence / H. Becquerel [著];西尾成子訳;
りん光体によって発せられる不可視放射について=Sur les radiations invisibles emises par les corps
phosphorecents / H. Becquerel [著];西尾成子訳;金属ウランからの新放射の放出=Emission de rad-
iations nouvelles par l'uranium metallique / H. Becquerel [著];西尾成子訳;ウランおよびトリウムの
化合物から出る放射線=Rayons emis par les composes de l'uranium et du thorium / M. Curie [著];
西尾成子訳;ピッチブレンドに含まれる新放射性物質について=Sur une substance nouvelle radio-
active, contenue dans la pechblende / M. Curie et P. Curie [著];西尾成子訳;放射性新物質とその放
射線=Les nouvelles substances radioactives et les rayons qu'elles emettent / M. Curie et P. Curie
[著];小川和成訳;放射能の原因と本性=The cause and nature of radioactivity / E. Rutherford and F.
Soddy [著];江渕文昭訳;放射性変化=Radioactive change / E. Rutherford and F. Soddy [著];萱沼
和子訳;ラジウム塩によって自然に発散される熱について=Sur la chaleur degagee spontanement par
les sels de radium / P. Curie et A. Laborde [著];西尾成子訳; α 粒子の電荷と本性=The charge and
nature of the α particle / E. Rutherford and H. Geiger [著];江渕文昭訳;放射性物質からの α 粒子の
本性=The nature of the α particle from radioactive substances / E. Rutherford and T. Royds [著];
萱沼和子訳;放射性元素と周期律=The radio-elements and the periodic law / F. Soddy [著];西尾成
子訳;放射性元素と周期律=The radio-elements and the periodic law / F. Soddy [著];西尾成子訳
西尾成子「 α 線と原子核」『科学史研究』第II期 No. 76 (1965)。

Eri Yagi, "The Development of Nagaoka's Saturian Atomic Model I—Dispersion on Light—(1905)—",
Japanese Studies in the History of Science, No. 6 (1967): 19-25.

ジョージ・P. トムソン (伏見康治訳)『J. J. トムソン: 電子の発見者』河出書房新社 (1969)。

Eri Yagi, "The Development of Nagaoka's Saturianian Atomic Model II (1904-05) —Nagaoka's Theory
of the Structure of Matter", *Japanese Studies in the History of Science*, No. 11 (1972): 73-89.

藤崎千代子「Langmuir 原子論への新しいアプローチ—8 隅説形成に果たした結晶構造の役割—」『科学史研
究』第II期 No. 107 (1973)。

Eri Yagi and Tosaku Kimura, "A Stastical Approach to Nagaoka's Research in Spectroscopy", *Japanese
Studies in the History of Science*, No. 12 (1973): 93-97.

大沼正則「化学結合論における物理的方法と化学的方法について—Lewis と Bohr を中心に一」『化学史研
究』第1号 (1974): 31-37。

奥野久輝「放射性アイソトープの発見と研究」『化学史研究』第12号 (1980): 1-9。

藤崎千代子「P. Drude の分散理論と原子模型 (II)—その受容過程 (1904~1913 年)—」『科学史研究』[第
II期] 第20巻 (No. 137) (1981)。

宮下晋吉「J. J. Thomson と気体放電研究 (1880~1895 年)—物質の運動形態・構造形態と電子の発見—
(「電子の発見」の研究, 第I部)」『科学史研究』[第II期] 第20巻 (No. 137) (1981)。

- 宮下晋吉・板倉聖宣他「J. J. Thomson の X 線研究 (1896 年) — 電子の発見の歴史的契機 — (「電子の発見」の研究, 第 II 部)」『科学史研究』[第 II 期] 第 20 卷 (No. 138) (1981).
- 宮下晋吉・石山洋他「J. J. Thomson の陰極研究 (1896~97 年) (II) — イオンから電子へ, 現代的構造形態へ — (「電子の発見」の研究, 第 III 部)」『科学史研究』[第 II 期] 第 20 卷 (No. 140) (1981).
- 宮下晋吉「‘X 線の発見’ と実験・技術・社会 (I) — T. Kuhn らの科学的発見論の検討」『科学史研究』[第 II 期] 第 21 卷 (No. 143) (1982).
- 宮下晋吉「‘X 線の発見’ と実験・技術・社会 (II) — 1890~95 年代の ‘Strahlen’ 研究の展開 —」『科学史研究』[第 II 期] 第 21 卷 (No. 144) (1982).
- 藤崎千代子「赤外帯スペクトルの起源に関する研究の歴史, 1880~1920 (I) (1880~1911)」, 『科学史研究』[第 II 期] 第 22 卷 (No. 145) (1983).
- 藤崎千代子「赤外帯スペクトルの起源に関する研究の歴史, 1880~1920 (II) (1912~1920)」『科学史研究』[第 II 期] 第 22 卷 (No. 146) (1983).
- 宮下晋吉「‘X 線の発見’ と実験・技術・社会 (III) — 科学的発見における偶然と必然」『科学史研究』[第 II 期] 第 22 卷 (No. 145) (1983).
- 川合葉子「X 線の粒子理論と結晶構造」『科学史研究』[第 II 期] 第 23 卷 (No. 149) (1984).
- 奥山修平「原子構造論を確証した J・フランクの実験」*Science & Technology Journal* (2002.2): 44-45.

ボ ー ア

- N. ボーア (菅井準一ら訳)『著作集』(世界大思想全集, 社会・宗教・科学思想篇 35) 河出書房新社 (1960).
- N. ボーア [ほか] (林一訳編)『アインシュタインとの論争』東京図書 (1969).
- N. Bohr (奥野久輝訳・解説)「原子の構造」(“The Structure of the Atom”, *Nature*, **112** (1923): Supplement, 30-44) (日本化学会編)『化学の原典 8』(元素の周期系) 東京大学出版会 (1976) 所収.
- ニールス・ボーア (玉木英彦ほか訳・解説)『国連への公開状: 1950 年 6 月 9 日』仁科記念財団 No. 29 (1988).
- ニールス・ボーア (井上健訳)『原子理論と自然記述』みすず書房 (1990).
- ニールス・ボーア (山本義隆編訳)『因果性と相補性』(ニールス・ボーア論文集 1) 岩波文庫, 1999.
- ニールス・ボーア (山本義隆編訳)『量子力学の誕生』(ニールス・ボーア論文集 2) 岩波文庫, 2000.
- 広重徹他「Bohr の原子構造論の起源」『科学史研究』第 II 期 No. 71 (1964).
- Sigeko Nisio, “The Role of the Chemical Considerations in the Development of Bohr Atom Model”, *Japanese Studies of History of Science*, No. 6 (1967): 26-40.
- 西尾成子「Bohr 原子模型の発展における化学的考察の役割」『科学史研究』第 II 期 No. 88 (1968).
- ルース・ムーア (藤岡由夫訳)『ニールス・ボーア: 世界を変えた科学者』河出書房 (1968).
- S. ハイゼンベルクら (中川毅訳)『ボーアと量子論』東京図書 (1969).
- Tetu Hirose and Sigeko Nisio, “The Genesis of the Bohr Atom Model and Planck’s Theory of Radiation,” *Japanese Studies of History of Science*, No. 8 (1969): 35-47.
- ローゼンタール編 (豊田利幸訳)『ニールス・ボーア: その友と同僚より見た生涯と業績』岩波書店 (1970).
- 西尾成子「化学史・常識のウソ (9) 原子構造論の誕生とスペクトル: ボーアはバルマー公式を説明したかったのか」『化学と教育』**35**(6) (1987.12).

Mendel Sachs（原田稔・杉元賢治訳）『アインシュタイン vs ボーア：はてしない物理学の論争』丸善（1991）。

西尾成子『現代物理学の父ニールス・ボーア：開かれた研究所から開かれた世界へ』中公新書（1993）。

日本物理学会編『アインシュタインとボーア：相対論・量子論のフロンティア』裳華房（1999）。

ラザフォード

J. ローランド（中村誠太郎ら訳）『ラザフォード：原子の開拓者』鱒書房（1956）。

エドワード・N. ダ・C. アンドレード（三輪光雄訳）『ラザフォード：20世紀の錬金術師』河出書房新社（1967）。

カピッツァ（亀井理訳）『原子物理学の父・ラザフォードの思い出』中央公論社（1971）。

八木江里『ラザフォードと長岡半太郎』中央公論社（1971）。

T. J. トレン（島原健三訳）『自壊する原子：ラザフォードとソディの共同研究史』三共出版（1982）。

レントゲン

F. L. ネーエル（常木實訳）『レントゲン』天然社（1942, 43）。

平野威馬雄『レントゲン：X線の発見者』ポプラ社（1953）。

瀬木嘉一『レントゲン先生の生涯』私家版（1966）。

瀬木嘉一『科学の使徒・レントゲン』Xレイ・ジャーナル（1971）。

山崎岐男『レントゲンの生涯：X線発見の栄光と影』富士書院（1986）。

小林敏雄『ゲーテとレントゲン：私のエッセイ集』檸檬社（1987）。

W. Robert Nitske（山崎岐男訳）『レントゲンの生涯：X線の発見者』考古堂書店（1989）。

山崎岐男『孤高の科学者 W. C. レントゲン』医療科学社（1995）。

清水榮『レントゲン：その人と物理学の発展：レントゲンのX線発見100周年記念・京都フォーラム』京都フォーラム・将来世代国際財団（1995）。

青柳泰司『レントゲンとX線の発見：近代科学の扉を開いた人』恒星社厚生閣（2000）。

大場覚『レントゲン博士の旅』日本シエーリング社（2001）。

マリー・キュリー

イレヌ・キュリー（内山敏訳）『わが母マリー・キュリーの思い出』筑摩書房（1956）。

ロバート・リード（木村絹子訳）『キュリー夫人の素顔』共立出版（1975）。

フランソワーズ・ジルー（山口昌子訳）『マリー・キュリー』新潮社（1984）。

高木仁三郎『マリー・キュリーが考えたこと』岩波書店（1992）。

桜井邦朋『マリー・キュリー：激動の時代に生きた女性科学者の素顔』地人書館（1995）。

スティヴ・パーカー（百々佑利子訳）『マリー・キュリー』岩波書店（1995）。

梶雅範「試練の中のノーベル化学賞受賞：マリー・キュリー」『科学技術ジャーナル』（1999.4）：30-31。

スーザン・クイン（田中京子訳）『マリー・キュリー』1・2，みすず書房（1999）。

リチャード・テームズ（内藤ゆかり訳）『マリー・キュリー：未来科学のとびらを開いた女性』国土社（1999）。

川島慶子「変貌する聖女：マリー・キュリーと20世紀の女性科学者伝」『化学史研究』第28巻（2001）：

145-162.

ポーリング

- L. Pauling (小泉正夫訳・東健一解説)「化学結合の性質。量子力学および常磁性磁化率の理論から得られる結果の分子構造への応用」(“The Nature of the Chemical Bond. Application of Results obtained from the Quantum Mechanics and from a Theory of Paramagnetic Susceptibility to the Structure of Molecules”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **53** (1931) : 1367-1400) (日本化学会編)『化学の原点 1』(化学結合論 I) 学会出版センター (1975) 所収。
- L. Pauling (桐山良一訳・解説)「複雑なイオン結晶の構造を決定する原理」(“The Principles Determining the Structure of Complex Ionic Crystals”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **51** (1929) : 1010-1026) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- L. Pauling (今堀和友訳・解説)「抗体の構造と生成過程についての一説」(“A Theory of the Structure and Process Formation of Antibodies”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **62** (1940) : 2643-2657) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収。
- L. Pauling, R. B. Corey and H. R. Branson (宮沢辰雄訳・解説)「タンパク質の構造：水素結合したポリペプチド鎖の 2 種のヘリックス構造」(“The Structure of Proteins: Two Hydrogen-bonded Helical Configurations of the Polypeptide Chain”, *Proc. Natl. Acad. Sci.*, **37** (1951) : 205-211) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収。
- L. Pauling and R. B. Corey (宮沢辰雄訳・解説)「ポリペプチド鎖の 2 種のヘリックス構造の原子座標と構造因子」(“Atomic Coordinates and Structure Factors for Two Helical Configurations of Polypeptide Chains”, *Proc. Natl. Acad. Sci.*, **37** (1951) : 235-240) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収。
- ライナス・ポーリング (村田晃訳)『ライナス・ポーリングのビタミン C とかぜ、インフルエンザ』共立出版 (1977)。
- ライナス・ポーリング (村田晃訳)『ポーリング博士の快適長寿学』平凡社 (1987)。
- L. ポーリング (村田晃訳)『ポーリング博士のビタミン C 健康法』平凡社 (1995)。
- 近藤敦「Pauling の共鳴理論の批判をめぐって」『科学史研究』第 25 号 (1953) : 6-11。
- 阿部裕子「Pauling 化学結合論の形成について」『化学史研究』第 12 号 (1980) : 10-19。
- Yuko Abe, “Pauling’s Revolutionary Role in the Development of Quantum Chemistry”, *Historia Scientiarum*, No. 20 (1981) : 107-124。
- 村田晃『ライナス・ポーリングの八十三年』共立出版 (1984)。
- フローレンス・メイマン・ホワイト (多田舜保訳)『ライナス・ポーリング：二度のノーベル賞に輝いた科学者・平和運動家』[多田舜保] (1986)。
- Anthony Serafini (加藤郁之進監訳)『ライナス・ポーリング：その実像と業績』宝酒造 (1994)。
- 菊地重秋「アイデアと反戦平和の人ライナス・ポーリング」『科学技術ジャーナル』(1997.4) : 42-43。
- テッド・ゲーツェル, ベン・ゲーツェル (石館康平訳)『ポーリングの生涯—化学結合・平和運動・ビタミン C』朝日新聞社 (1999)。

フェルミ

- エンリコ・フェルミ&ジェームス・チャドウィック（木村一治・玉木英彦訳）『中性子の発見と研究』大日本出版（1950）。
- ローラ・フェルミ（崎川範行訳）『原子力の父フェルミの生涯』法政大学出版局（1955）。
- ローラ・フェルミ（崎川範行訳）『わが夫エンリコ・フェルミ：原子力時代を築いた人』法政大学出版局（1966）。
- ピエール・ド・ラティル（遠藤真二訳）『エンリーコ・フェルミ』河出書房新社（1969）。
- エミリオ・セグレ（久保亮五・久保千鶴子訳）『エンリコ・フェルミ伝：原子の火を点じた人』みすず書房（1976）。
- ラウラ・フェルミ（崎川範行訳）『フェルミの生涯：家族の中の原子』法政大学出版局（1977）。

量子化学

- W. Heitler, F. London（大野公男訳・解説）「量子力学による中性原子の相互作用と等極結合」（“Wechselwirkung neutraler Atome und homöopolare Bindung nach der Quantenmechanik”, *Z. Physik*, **44**（1927）：455-472）（日本化学会編）『化学の原典 1』（化学結合論 I）学会出版センター（1975）所収。
- J. C. Slater（井早康正訳・解説）「分子のエネルギー準位と原子価結合」（“Molecular Energy Levels and Valence Bonds”, *Phys. Rev.*, **38**（1931）：1109-1144）（日本化学会編）『化学の原典 1』（化学結合論 I）学会出版センター（1975 年）所収。
- M. Born, R. Oppenheimer（坪井正道・平川暁子訳・解説）「分子の量子論について」（“Zur Quantentheorie der Molekeln”, *Ann. Physik*, **84**（1927）：457-484）（日本化学会編）『化学の原典 2』（化学結合論 II）学会出版センター（1975）所収。
- R. S. Mulliken（田仲二朗訳・解説）「分子内の電子の量子数の決定（第一報）」（“The Assignment of Quantum Numbers for Electrons in Molecules. I”, *Phys. Rev.*, **32**（1928）：186-222）（日本化学会編）『化学の原典 2』（化学結合論 II）学会出版センター（1975）所収。
- J. E. Lennard-Jones（中島威訳・解説）「二、三の二原子分子の電子構造」（“The Electronic Structure of Some Diatomic Molecules”, *Trans. Faraday Soc.*, **25**（1929）：668-686）（日本化学会編）『化学の原典 2』（化学結合論 II）学会出版センター（1975）所収。
- E. Hückel（米澤貞次郎訳・解説）「ベンゼン問題への量子論的寄与（第一報）」（“Quantentheoretische Beiträge zum Benzolproblem. I. Die Elektronenkonfiguration des Benzols und verwandter Verbindungen”, *Z. Physik*, **70**（1931）：204-262）（日本化学会編）『化学の原典 2』（化学結合論 II）学会出版センター（1975）所収。
- H. Eyring（田丸謙二訳・解説）「水素とハロゲンとの二分子反応における活性化エネルギーの量子力学的計算」（“The Energy of Activation for Bimolecular Reactions involving Hydrogen and the Halogens, According to the Quantum Mechanics”, *J. Am. Chem. Soc.*, **53**（1931）：2537-2549）（日本化学会編）『化学の原典 5』（反応速度論）学会出版センター（1975）所収。
- 田辺振太郎「量子化学への動きははじめについて」『化学史研究』第 2 号（1974）：3-10。
- 東健一「量子化学 50 年の進歩—有機電子説の発展への寄与—」『化学史研究』第 6 号（1977）：29-32。
- 丹羽淳「分子軌道法への大型コンピュータの導入と有機化学方法論の新しい展開」『化学史研究』第 42 号（1988 年）：21-28。

菊地重秋「芳香族7員環化合物と量子力学—ヒュッケル則の初の検証とその影響—」『科学史研究』[第II期] 第29巻 (No. 174) (1990)。

構造化学

- W. Friedrich, P. Knipping and M. Laue (桐山良一訳・解説)「レントゲン線による干渉現象」(“Interferenz-Erscheinungen bei Röntgenstrahlen”, *Ann. Physik*, **41** (1913) : 971-988) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- W. H. Bragg and W. L. Bragg (桐山良一訳・解説)「結晶による X 線の反射」(“The Reflection of X-rays by Crystals”, *Proc. Roy. Soc.*, **88A** (1913) : 428-438) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- I. Nitta (桐山良一訳・解説)「ペンタエリトリトールの結晶構造について」(“On the Crystal Structure of Penta-erythritol”, *Bull. Chem. Soc. Japan*, **1** (1926) : 62-63) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- P. Debye (久保昌二訳・解説)「誘電体の動的理論の結論」(“Einige Resultate einer kinetischen Theorie der Isolatoren”, *Physik. Z.*, **13** (1912) : 97-100) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- J. Errera (久保昌二訳・解説)「有機化合物の電気分極, 幾何異性と位置異性」(“Die elektrischen Polarisationen einiger Kohlenstoffverbindungen: Geometrische und Stellungs-Isomeren”, *Physik. Z.*, **27** (1926) : 764-769) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- S. Mizushima (東健一訳・解説)「電波の異常分散と吸収について」(“On the Anomalous Dispersion and Absorption of Electric Waves”, *Bull. Chem. Soc. Japan*, **1** (1926) : 47-53) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- C. V. Raman and K. S. Krishnan (森野米三訳・解説)「新しいタイプの二次放射」(“On the New Types of Secondary Radiation”, *Nature*, **121** (1928) : 501-502) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- P. Debye, L. Bewilogua und F. Ehrhardt (朽津耕三訳・解説)「単独の分子による X 線の散乱 (予報)」(“Zerstreuung von Röntgenstrahlen an einzelnen Molekeln”, *Physik. Z.*, **30** (1929) : 84-87) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- H. Mark und R. Wierl (朽津耕三訳・解説)「蒸気流での電子の回折による分子構造の研究」(“Die Ermittlung von Molekülstrukturen durch Beugung von Elektronen an einem Dampfstrahl”, *Z. Elektrochem.*, **36** (1930) : 675-676) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- J. D. Bernal and R. H. Fowler (菅宏・関集三訳・関集三解説)「水およびイオン水溶液の理論, とくに水素イオンと水酸基イオンに準拠して」(“A Theory of Water and Ionic Solution, with Particular Reference to Hydrogen and Hydroxyl Ions”, *J. Chem. Phys.*, **1** (1933) : 515-548) (日本化学会編)『化学の原典 3』(構造化学 I) 学会出版センター (1974) 所収。
- S. Mizushima, Y. Morino and K. Higasi (児島邦夫訳・解説)「自由回転に関連してのラマン効果と双極子モーメント (第一報)」(“Raman Effect and Dipole Moment in Relation to Free Rotation. I.”, *Sci. Papers. Inst. Phys. Chem. Res.*, **25** (1934) : 159-221) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収。

- O. Bastiansen and O. Hassel (児島邦夫訳・解説)「シクロヘキサン誘導体の分離できない立体異性形間の平衡」(“Equilibrium between Non-separable Stereo-isomeric Forms of Cyclohexane Derivatives”, *Tids. Kjem. Bergvesen Met.*, **8** (1946) : 96-97) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- E. Bright Wilson, Jr., and J. B. Howard (広田栄治訳・解説)「多原子分子の振動回転エネルギー準位 (第一報) 半剛体非対称コマ分子の数学的理論」(“The Vibration-Rotation Energy Levels of Polyatomic Molecules. I. Mathematical Theory of Semirigid Asymmetrical Top Molecules”, *J. Chem. Phys.*, **4** (1936) : 260-268) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- B. Bright Wilson, Jr. (島内武彦訳・解説)「分子の固有振動数のための展開永年方程式を得る方法」(“A Method of Obtaining the Expanded Secular Equation for the Vibration Frequencies of a Molecule”, *J. Chem. Phys.*, **7** (1939) : 1047-1052) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- 島内武彦「多原子分子の基準振動の研究 (第一報) メタン誘導体分子の基準振動の一般的取り扱い」(『理化学研究所集報』**21** (1941) : 825-833) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- M. Goepfert-Mayer and A. L. Sklar (馬場宏明訳・解説)「ベンゼンの低い励起準位の計算」(“Calculations of the Lower Excited Levels of Benzene”, *J. Chem. Phys.*, **6** (1938) : 645-652) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- R. S. Mulliken (坪村宏訳・解説)「分子化合物とそのスペクトル」(“Molecular Compounds and their Spectra. II.”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **74** (1952) : 811-824) (日本化学会編)『化学の原典 4』(構造化学 II) 学会出版センター (1974) 所収.
- 水島三一郎「分子科学 (構造化学) の始まった頃」『化学史研究』第 3 号 (1975) : 1-3.
- 中垣良一「透明純液体の可視部吸収帯の発見と高振動励起状態の化学」『化学史研究』第 18 号 (1982) : 17-19.
- 川井雄「非化学量論化合物の展開—原子価制御理論を中心に—」『化学史研究』第 30 号 (1985) : 47-56.
- 中島三喜男「アミノトリアリジン化合物の構造化学」『化学史研究』第 30 号 (1985) : 31-46.
- 川井雄「常磁性緩和—核磁気共鳴への発展—」『化学史研究』第 39 号 (1987) : 77-85.
- 山寺秀雄「配位結合の理論の変遷」『化学史研究』第 21 巻 (1994) : 219-233.

触媒・界面化学

- J. A. Christiansen (安盛岩雄訳・解説)「水素と臭素との間の反応について」(“On the Reaction between Hydrogen and Bromine”, *Det. Kgl. Danske Vid. Selskab., Math. Medd.*, **I** (1919) : 14, 1-19) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収.
- J. N. Brønsted, Kai Pedersen (田部浩三訳・解説)「ニトロアミドの触媒による分解とその物理化学的意義」(“Die katalytische Zersetzung des Nitramids und ihre physikalisch-chemische Bedeutung”, *Z. Physik. Chem.*, **A108** (1924) : 185) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収.
- F. A. Lindemann (天野杲訳・解説)「化学作用に関する輻射説」(“Discussion on “The Radiation Theory of Chemical Action”, *Trans. Faraday Soc.*, **17** (1922) : 598-599) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学

反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

H. Beutler, M. Polanyi (土屋莊次訳・解説)「単一管中の炎、反応機構の暫定的解析、反応速度と発光過程」(“Über hochverdünnte Flammen. I. Flammen im einfachen Rohr. Vorläufige Analyse des Reaktionsmechanismus. Reaktionsgeschwindigkeit, Leuchtvorgang”, *Z. physik. Chem.*, **B1** (1928) : 3-23) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

M. G. Evans, M. Polanyi (森川陽・慶伊富長訳・解説)「化学反応の慣性と推進力」(“Inertia and Driving Force of Chemical Reactions”, *Trans. Faraday Soc.*, **34** (1938) : 11-24) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

J. Horiuti, M. Ikusima (延与三知夫・慶伊富長訳・解説)「白金水素電極反応の機作」(“The Mechanism of the Hydrogen Electrode Process on Platinum”, *Proc. Imp. Acad. Japan*, **15** (1939) : 39-44) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

H. S. Taylor (田丸謙二訳・解説)「触媒表面の理論」(“A Theory of the Catalytic Surface”, *Proc. Roy. Soc.*, **A108** (1925) : 105) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

玉虫文一「界面化学への道一片山正夫教授生誕 100 年にちなんで」『化学史研究』第 8 号 (1978) : 1-6。

川井雄「金属触媒作用についてのテーラーの活性中心説」『化学史研究』第 23 号 (1983) : 75-82。

ラングミュア

I. Langmuir (田中虔一訳・解説)「表面における化学反応」(“Chemical Reaction on Surfaces”, *Trans. Faraday Soc.*, **17** (1921) : 607-620) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

I. Langmuir (田中虔一訳・解説)「 $2\text{CO} + \text{O}_2 = 2\text{CO}_2$ および $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ の反応における白金の触媒作用機構」(“The Mechanism of the Catalytic Action of Platinum in the Reactions $2\text{CO} + \text{O}_2 = 2\text{CO}_2$ and $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ ”, *Trans. Faraday Soc.*, **17** (1921) 621-654) (日本化学会編)『化学の原典 6』(化学反応論) 学会出版センター (1976) 所収。

Irving Langmuir (立花太郎訳・解説)「固体および液体の構造と基本的な性質 第 1 部 固体」(“The Constitution and Fundamental Properties of Solids and Liquids. Part I. Solids”, *J. Am. Chem. Soc.*, **38** (1916) : 2221-2295) (日本化学会編)『化学の原典 7』(界面化学) 学会出版センター (1975) 所収。

Irving Langmuir (福田清成訳・解説)「固体および液体の構造と基本的な性質 第 2 部 液体」(“The Constitution and Fundamental Properties of Solids and Liquids. II. Liquids”, *J. Am. Chem. Soc.*, **39** (1917) : 1848-1906) (日本化学会編)『化学の原典 7』(界面化学) 学会出版センター (1975) 所収。

アルバート・ローゼンフェルド (兵藤申一・兵藤雅子訳)『ラングミュア伝：ある企業研究者の生き方』アグネ (1978)。

中川正澄「企業の研究者アービング・ラングミュア」『化学史研究』第 27 号 (1984) : 68-74。

有機電子論

G. N. Lewis (竹林松二訳・解説)「原子と分子」(“The Atom and the Molecule”, *J. Amer. Chem. Soc.*, **38** (1916) : 762-785) (日本化学会編)『化学の原典 12』(有機電子説) 学会出版センター (1976) 所収。

R. Robinson (竹林松二訳・解説)「有機化学反応の過程に関する電子説の概要」(“Outline of an Electro-

chemical (Electronic) Theory of the Course of Organic Reactions”, Two Lectures on an ‘Outline of an Electrochemical (Electronic) Theory of the Course of Organic Reactions’, The Institute of Chemistry of Great Britain and Ireland, London (1932)) (日本化学会編)『化学の原典 12』(有機電子説) 学会出版センター (1976) 所収。

C. K. Ingold (井畑敏一訳・解説)「有機反応に関する電子説の諸原理」(“Principles of an Electronic Theory of Organic Reactions”, *Chem. Rev.*, **15** (1934) : 225-274) (日本化学会編)『化学の原典 12』(有機電子説) 学会出版センター (1976) 所収。

竹林松二「『有機電子説』の解説」(日本化学会編)『化学の原典 12』(有機電子説) 学会出版センター (1976), pp. 149-154.

徳元琴代「有機電子論史-1-R. Robinson における有機電子論形成過程について」『科学史集刊』通号 9 号 (1976)。

徳元琴代「R. Robinson による有機電子論の歴史的役割について」『科学史研究』[第 2 期] 通号 162 号 (1987)。

高分子化学

スタウディングー (小林義郎訳)『研究回顧—高分子化学への道—』岩波書店 (1966)。

井本稔『ナイロンの発見』高分子化学刊行会 (1960)。

垣内弘「人物・プラスチック技術史-6-「ナイロンの発見」と「有機電子論」と井本稔」『工業材料』**30**(6) (1982.06)。

Yasu Furukawa, “Hermann Staudinger and the Emergence of the Macromolecular Concept”, *Historia Scientiarum*, No. 22 (1982) : 1-18.

古川安「巨大分子からナイロン発見へ—科学者カローザスの軌跡」『科学と実験』(1983) 8 月号 : 14-48, 9 月号 : 46-49, 10 月号 : 34-38, 11 月号 : 55-58, 12 月号 : 28-32。

古川安「高分子化学の成立史」『科学史研究』150 号 (1984) : 88-95。

田中穆「H. Staudinger—門によるポリオキシメチレンの研究について—高分子化学開拓史の一断面—」『化学史研究』第 37 号 (1986) : 169-185。

和田武「Harries - Pickles ゴム構造論争」『化学史研究』(I) 第 38 号 (1987) : 16-28, (II) 第 39 号 (1987) : 49-60。

鶴田四郎『熱硬化性樹脂化学史』日立化成工業 (1990)。

田中穆「高分子概念論争—巨大分子説 vs. ミセル説 (現代化学論争—論争は新しい化学を創造する〈特集〉—(化学の有名な論争—論争が残したものは?))」『化学』**46**(1) (1991.01)。

木岡護・広瀬敬治・柏典夫「チーグラ—触媒によるポリエチレンの製造法」『化学史研究』, 第 19 巻 (1992) : 40-49。

田中穆「H. Staudinger の研究とドイツ高分子化学工業の誕生—Staudinger のゴムに関する研究と合成ゴムへの道—(その 1)・(その 2)」『化学史研究』第 19 巻 (1992) : 172-187, 247-261。

田中穆「H. Staudinger の研究とドイツ高分子化学工業の誕生—ポリ酢酸ビニルの研究開発をめぐる Staudinger とドイツ化学工業界の人たち」『化学史研究』第 20 巻 (1993) : 243-258。

古川安「シュタウディングーの科学活動と政治的葛藤」『化学史研究』第 20 巻 (1993) : 1-19。

古川安「化学研究におけるアメリカニズム」『岩波講座・現代思想 11, 精密科学の思想』岩波書店 (1995),

pp. 291-315.

梶雅範「ナイロンの発明者カローザスー産業界の科学者のジレンマー」『科学技術ジャーナル』(1996.10): 52-53.

田中穆「H. Staudinger の研究とドイツ高分子化学工業の誕生ーポリスチロールおよびポリ塩化ビニルの工業化に至るまで(その1)(その2)」『化学史研究』第23巻(1996): 1-14, 147-166.

竹内敬人「エミール・フィッシャーと高分子説(特集 高分子の科学と技術のあゆみ)」『高分子』47(1)(1998.01).

田中穆「H. Staudinger の研究とドイツ高分子化学工業の誕生: Staudinger およびドイツ化学工業界の化学者たちによるポリインデン, ポリイソブチレン, ポリアクリレート等の重合物に関する研究開発」『化学史研究』第25巻(1998): 177-194.

岩倉義男「わが研究回想: ポリウレタン系合成繊維ポルランを創る」『化学史研究』第27巻(2000): 42-46.

井上尚之『ナイロン発明の衝撃ーナイロンが日本に与えた影響』関西学院大学出版会(2006).

古川安「高分子化学から分子生物学へー学問間の歴史的連関をめぐってー」『人間科学研究』(日本大学生物資源科学部) No. 3 (2006): 1-16.

ノーベル賞

中村誠太郎・小沼通二編『ノーベル賞講演物理学①〜⑫』講談社(1978-1980).

世界最良書普及会編『ノーベル傳: 世界的偉人ダイナマイト王』世界最良書普及会(1909).

西澤勇志智『ノーベル兄弟』朝日新聞社(1941).

R. ゴールマン・H. シュック(菊池武一訳)『大ノーベル傳』東峰書房(1942).

榎尾榮『ノーベル傳』富山房(1942).

高橋清『ノーベル物理化学賞: 人とその業績』北隆館(1950).

沢田謙『ノーベル: 世界文化の恩人』偕成社(1955).

ニルス・コー・ストレー『アルフレッド・ノーベルとノーベル賞』ノーベル財団(1960).

近藤釧三『ノーベル』ポプラ社(1969).

イーディス・パターソン・メイヤー(河田智雄訳)『ダイナマイトと平和: ノーベル』学習研究社(1973).

T. I. ウィリアムズ(崎川範行訳)『ノーベル: ダイナマイトの発明者』東京図書(1978).

中島都美子『ノーベル』フレーベル館(1979).

大野進『ノーベル』ぎょうせい(1980).

大野進『ノーベル: 人類に進歩と平和を』講談社(1983).

三宅恵子『ノーベル: 平和を愛した科学者』教会新報社(1983).

N. ウェイド(丸山工作・林泉訳)『ノーベル賞の決闘』岩波書店(1984).

ノーベル賞人名事典編集委員会編『ノーベル賞受賞者業績事典』日外アソシエーツ(1994).

ケンネ・ファント(服部まこと訳)『アルフレッド・ノーベル伝: ゴッティエへの218通の手紙から』新評論(1996).

丸山工作編『ノーベル賞ゲーム: 科学的発見の神話と実話』岩波書店(1998).

谷田和一郎『ノーベル化学賞: 物質の謎を解明した人びと』ポプラ社(2003).

山口真「C. V. ラマン「ラマン効果」の発見でアジア初のノーベル物理学賞を受賞」*Science & Technology*

Journal (2001.11) : 44-45.

DNA 構造

- ジェームス・D. ワトソン（江上不二夫，中村桂子訳）『二重らせん：DNA の構造を発見した科学者の記録』タイムライフインターナショナル（1968）。
- フランシス・クリック（中村桂子訳）『熱き探究の日々—DNA 二重らせん発見者の記録』ティビーエス・ブリタニカ（1989）。
- アン・セイヤー（深町真理子訳）『ロザリンド・フランクリンと DNA：ぬすまれた栄光』草思社（1979）。
- T. ハワード，J. リフキン（磯野直秀訳）『遺伝工学の時代—誰が神に代わりうるか—』岩波書店（1979）。
- ジェームス・D・ワトソン（中村桂子・江上不二夫訳）『二重らせん』講談社（1986）。
- E. シャルガフ（村上陽一郎訳）『ヘラクレイトスの火：自然科学者の回想的文明批判』岩波書店（1980）。
- F. H. ポートガル & J. S. コーエン（杉野義信・杉野菜保野訳）『DNA の一世紀』全2冊，岩波書店（1980）。
- ロバート・オルビー（長野敬訳）『二重らせんへの道 上—分子生物学の成立（1）』，（道家達将・木原弘二訳）『二重らせんへの道 下—DNA 構造の発見』紀伊國屋書店（1982・1996）。
- 篠原兵庫『生命科学の先駆者—ホブキンス，ワールブルク，サムナー—』講談社（1983）。
- E. ビュニンング（田沢仁他訳）『ヴィルヘルム・ペッファ：分子生理学の先駆者：現代に生きるその研究と洞察』学会出版センター（1988）。
- J. D. ワトソン他（今成啓子他訳）『遺伝子の分子生物学』上・下巻，トッパン（1990）。
- ジョイス・ボールドウィン（寺門和夫訳）『ジェームス・ワトソン：DNA のパイオニア』ニュートンプレス（2000）。
- ジェイムズ・D・ワトソン（大貫昌子訳）『ぼくとガモフと遺伝情報：ワトソン博士が語る DNA パラダイム誕生の舞台裏』白揚社（2004）。
- モーリス・ウィルキンズ（長野敬・丸山敬訳）『二重らせん第三の男』岩波書店（2005）。
- マドックス（福岡伸一監訳・鹿田昌美訳）『ダークレディと呼ばれて—二重らせん発見とロザリンド・フランクリンの真実—』化学同人（2005）。
- ジェームス・D・ワトソン&アンドリュー・ベリー（青木薫訳）『二重らせんの発見からヒトゲノム計画まで』講談社（2005）。

化学技術史

- フリッツ・ハーバー（田丸節郎訳）『ハーバー博士講演集：国家と学術の研究』岩波書店（1931）。
- 小林良正『石鹼の歴史』河出書房（1943）。
- 山崎俊雄「近代化学技術の—成立過程—漂白業の革命と酸・アルカリ生産技術」『科学史研究』第12号（1949）：10-17。
- 岡本洋三「高分子化学形成の技術的背景」第33号（1955）：22-28。
- 鎌谷親善「高分子生産と高分子化学—その連関と統一にたいする過程—」『科学史研究』第49号（1959）：12-19。
- 鎌谷親善「高分子化学技術の発展とその特徴」『科学史研究』第53号（1966）：16-23。
- Heizo Nambo, “Who Invented the Explosives?”, *Japanese Studies of History of Science*, No. 8 (1969) :

49-98.

K・ウィンナッカー（児玉信次郎・関英夫・向井幸雄訳）『化学工業に生きる』鹿島出版会（1974）.

L. F. ハーバー（水野五郎訳）『近代化学工業の研究：その技術・経済史的分析』北海道大学図書刊行会（1977）.

素木洋一『セラミックスの技術史』技報堂出版（1984）.

中川鶴太郎『ゴム物語』大月書店（1984）.

L. F. ハーバー（鈴木治雄監修，佐藤正弥・北村美都穂訳）『世界巨大化学企業形成史』日本評論社（1984）.

寺田裕「高圧法ポリエチレン—その発見と開発の歴史—」『化学史研究』第18巻（1991）：221-231.

佐伯康治「合成ゴムの技術とその工業」『化学史研究』第19巻（1992）：267-281.

川合智「硝酸製造技術の歴史—工業物理化学の視点から—」『化学史研究』第20巻（1993）：259-282.

慈道裕治「資本主義発達と化学工学史—化学工業の発達と科学・技術の関連をめぐって」『科学史研究』[第II期]第32巻（No.186）（1993）.

城島俊夫「尿素肥料の開発の歴史」『化学史研究』第20巻（1993）：161-200.

山本為親「放電による天然ガスよりアセチレンの製造とイソオクタン合成の工業化」『化学史研究』第20巻（1993）：122-128.

江崎正直・大谷真夫「メタノール合成技術」『化学史研究』第21巻（1994）：250-277.

太田静行「うま味調味料の歴史」『化学史研究』第21巻（1994）：186-202.

佐伯康治「企業における研究開発—ポリマー企業を中心に—」『化学史研究』第21巻（1994）：333-344.

佐藤正弥「ポリ塩化ビニリデンフィルムの社会史」『化学史研究』第21巻（1994）：234-249.

田中直「石油脱硫技術の歴史をめぐって」『化学史研究』第21巻（1994）：60-69.

江崎正直「アンモニア合成技術(1)-(3)」『化学史研究』第22巻（1995）：15-49, 197-225, 第23巻（1996）：15-53.

大場健吉・武井玲子「環境問題からみた合成洗剤の技術開発史」『化学史研究』第22巻（1995）：127-141.

刈米孝夫「合成洗剤の歴史」『化学史研究』第22巻（1995）：114-126.

佐藤正弥「塩化ビニリデン技術の二つの系譜」『化学史研究』第24巻（1997）：33-41.

砂川茂「ヨウ素生産の歴史」『化学史研究』第24巻（1997）：281-294.

工藤章『現代ドイツ化学企業史—IG ファルベンの成立・展開・解体—』ミネルヴァ書房（1999）.

遠藤徹『プラスチックの文化史—可塑性物質の神話学』水声社（1999）.

村井幸一「界面活性剤の技術社会史」『鉱業博物館』通号32号（1999）.

簗崎由記「ヨウ素利用の歴史—ヨウ素系殺菌・消毒剤の歴史—」『化学史研究』第27巻（2000）：197-209.

江崎正直「アンモニア合成と工業触媒」『化学史研究』第28巻（2001）：226-237.

上仲博「m, p-クレゾール物語」『化学史研究』第28巻（2001）：215-225.

仲野泰裕「万国博覧会と陶磁技術」『化学史研究』第28巻（2001）：38-44.

化学史学会編『20世紀の日本の化学技術—21世紀が見えてくる—』TIC（2004）.

上仲博・江崎正直「インジゴ合成技術の歴史」『化学史研究』第31巻（2004）：195-214.

戦争と化学

田中実「戦争と化学についての断片」『科学史研究』第8号（1944）：75-78.

- 宮田親平『毒ガスと科学者：化学兵器はいかに造られたか』光人社（1991）。
- 大槻義彦『核時代の科学者たち』丸善（1994）。
- 梶雅範「第二次大戦期のソ連の対英米原爆諜報活動—公文書館資料から」『東京工大・科学史集刊』第13号（1994）：31-63。
- O. ハーン（山崎和夫訳）『オットー・ハーン自伝』みすず書房（1997）。
- L. F. ハーバー（佐藤正弥訳）『魔性の煙霧—第一次世界大戦の毒ガス戦攻防史—』原書房（2001）。
- アンジェロ・デル・ボカ（高橋武智訳）『ムッソリーニの毒ガス—植民地戦争におけるイタリアの化学戦』大月書店（2000）。
- E・クロディー（常石敬一・杉島正秋訳）『生物化学兵器の真実』シュプリンガー・フェアラーク東京（2003）。
- 吉見義明『毒ガス戦と日本軍』岩波書店（2004）。

環境と化学

- レイチェル・カーソン（青樹繁一訳）『沈黙の春：生と死の妙薬—自然均衡破壊者〈化学薬品〉—』新潮社（1964, 1972）。
- 有吉佐和子『複合汚染』上・下，新潮社（1975）。
- セロン・ランドルフ（松村龍雄・富所隆三訳）『人間エコロジーと環境汚染病—公害医学序説—』農産漁村文化協会（1986）。
- K-ヴィルヘルム・ヴェーバー（野田倬訳）『アッティカの大気汚染：古代ギリシア・ローマの環境破壊』鳥影社（発売：星雲社）（1996）。
- シア・コルボーン他（長尾力訳）『奪われし未来』翔泳社（1997，増補改訂版2001）。
- 内田正夫「殺虫剤 DDT の登場と初期の毒性研究」『和光大学人間関係学部紀要』**3**（1999）：101-111。
- シェルドン・クリムスキー（松崎早苗・斉藤陽子訳）『ホルモン・カオス：「環境エンドクリン仮説」の科学的・社会的起源』藤原書店（2001）。
- 井上尚之『科学技術の発達と環境問題—科学技術の発展が人類にもたらした光と影』東京書籍；2訂版版（2002）。
- P. J. ボウラー（小川真里子・森脇靖子・財部香枝・桑原康子訳）『環境科学の歴史』I, II, 朝倉書店（2002）。
- ドミニク・ラピエール，ハビエル・モロ（長谷泰訳）『ボーパール午前零時五分 上下』河出書房新社（2002）。
- 古川安「合成化学物質の功罪—DDT と有鉛ガソリンのたどった道—」『サイエンスネット』（数研出版）**23**（2005.5）：6-9。
- 内田正夫「環境と化学の半世紀—生物濃縮，オゾン層破壊，地球温暖化—」『サイエンスネット』（数研出版）**25**（2005.11）：6-9。
- 藤原辰史『ナチスドイツの有機農法—「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」—』柏書房（2005）。

資 料

2005 年化学史文献リスト

以下のリストは、2005 年に刊行された欧文の雑誌論文と書籍および和文の雑誌論文を、化学史およびそれに近い関連分野に限ってリストアップしたものです。ただし、2005 年以前のものも少数含まれます。また、和文雑誌論文のうち『化学史研究』に掲載されたものは除きます。それぞれ著者姓の ABC 順、50 音順です。

(欧文雑誌論文) 著者姓の ABC 順

- Anderson, J. L., "War on weeds: Iowa farmers and growth regulator herbicides," *Technology and Culture*, **46** (2005) : 719-744.
- Behrman, E. J., "Karl Elbs, 1858-1933," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 19-22.
- Brakel, J. van, "On the inventors of XYZ," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 57-84.
- Balaban, A. T., "Reflections about mathematical chemistry," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 289-306.
- Bayer, Penny, "Lady Margaret Clifford's alchemical receipt book and the John Dee Circle," *Ambix*, **52** (2005) : 271-284.
- Brooks, Nathan M, "Growing links between chemistry and industry in Russia and the Soviet Union, 1900-1953," *Ambix*, **52** (2005) : 27-44.
- Bud, Robert, "Antibiotics, big business, and consumers: The context of government investigations into the postwar American drug industry," *Technology and Culture*, **46** (2005) : 329-349.
- Chayut, Michael, "From the Periphery to Scientific Revolutions," *Historia Scientiarum*, **15** (2005) : 1-22.
- Clulee, Nicholas H., "The Monas Hieroglyphica and the alchemical thread of John Dee's career," *Ambix*, **52** (2005) : 197-215.
- Crosland, Maurice, "Early laboratories c.1600-c.1800 and the location of experimental science," *Annals of Science*, **62** (2005) : 233-254.
- Davids, Karel, "Craft secrecy in Europe in the early modern period: A comparative view," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 341-348.
- Davids, Karel, "Public knowledge and common secrets. Secrecy and its limits in the early-modern Netherlands," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 411-427.
- Earley, Joseph E., "Why there is no salt in the sea," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 85-102.
- Egolf, Roger A., "The history of chemical education at Lafayette College," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 41-50.
- Fauque, Danielle, "Organisation des laboratoires de chimie à Paris sous le ministère Duruy (1863-1869) :

- Cas des laboratoires de Fremy et de Wurtz 1," *Annals of Science*, **62** (2005) : 501-532.
- Forshaw, Peter J., "The early alchemical reception of John Dee's *Monas Hieroglyphica*," *Ambix*, **52** (2005) : 247-269.
- Franckowiak, Rémi, & Luc Peterschmitt, "La chimie de Homberg: Une vérité certaine dans une physique contestable," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 65-90.
- Garber, Margaret D., "Chymical wonders of light: J. Marcus Marci's seventeenth-century Bohemian optics," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 478-509.
- Ginsberg, Judah B., "Priestley, Jefferson, and Adams: the émigré and American politics," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 91-102.
- Halabi, Selman, "A useful anachronism: John Locke, the corpuscular philosophy, and inference to the best explanation," *Studies in History and Philosophy of Science*, **36** (2005) : 241-259.
- Harré, Rom, "Chemical kinds and essences revisited," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 7-30.
- Hendry, Robin Findlay, "Lavoisier and Mendeleev on the elements," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 31-48.
- Hentschel, Klaus, "Macedonio Melloni über strahlende Wärme," *NTM*, **13** (2005) : 216-237.
- Hirai, Hiro, "Alter Galenus: Jean Fernel et son interprétation platonico-chrétienne de Galien," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 1-35.
- Hirai, Hiro, and Hideyuki Yoshimoto, "Anatomizing the Sceptical Chymist: Robert Boyle and the secret of his early sources on the growth of metals," *Early Science and Medicine*, **10** (2005) : 453-477.
- Homburg, Ernst, "Shifting centres and emerging peripheries: Global patterns in twentieth-century chemistry," *Ambix*, **52** (2005) : 3-6.
- Hsu, Elisabeth, "Tactility and the body in early Chinese medicine," *Science in Context*, **18** (2005) : 7-34.
- Hunter, Michael, "Robert Boyle for the twenty-first century," *Notes and Records of the Royal Society of London*, **59** (2005) : 87-90.
- Jacob, Claus & Adam Walters, "Risk and responsibility in chemical research: The case of Agent Orange," *Hyle*, **11** (2005) : 147-166.
- Jones, Jan-Erik, "Boyle, classification and the workmanship of the understanding thesis," *Journal of the History of Philosophy*, **43** (2005) : 171-183.
- Kawashima, Keiko, "The Issue of Gender and Science: A Case Study of Madame du Chatelet's Dissertation sur le feu," *Historia Scientiarum*, **15** (2005) : 23-43.
- Keblusek, Marika, "Keeping it secret: The identity and status of an early-modern inventor," *History of Science*, **43** (2005) : 37-56.
- Ke, Jie, & Poliakov, Martyn, "The critical point of $\text{CO}_2 + \text{N}_2$: an experiment inspired by Notes and Records," *Notes and Records of the Royal Society of London*, **59** (2005) : 171-174.
- Kidwai, M. & Mohan, R., "Green chemistry: An innovative technology," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 269-287.
- Klein, Ursula, "Contexts and limits of Lavoisier's analytical plant chemistry: Plant materials and their classification," *Ambix*, **52** (2005) : 107-158.
- Korobov, A., "Simple chemical reactions in the solid state: Towards elaborating a conception,"

- Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 307-314.
- Kurzmann, Peter, "Ein Manuskript mit Zeichnungen und Benennungen alchemistischer Geräte aus dem 14. Jahrhundert," *Sudhoffs Archiv*, **89** (2005) : 151-169.
- Laing, Michael, "A revised periodic table : With the lanthanides repositioned," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 203-233.
- Lambert, Joseph B., "The 2004 Edelstein Award Address—The deep history of chemistry," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 1-9.
- Laurent, Louis & Jean-Claude Petit, "Nanosciences and its convergence with other technologies : New golden age or apocalypse," *Hyle*, **11** (2005) : 45-76.
- Le Poidevin, Robin, "Missing elements and missing premises : A combinatorial argument for the ontological reduction of chemistry," *British Journal for the Philosophy of Science*, **56** (2005) : 117-134.
- Levy, Ken, "Is Descartes a temporal atomist?" *British Journal for the History of Philosophy*, **13** (2005) : 627-674.
- Lewenstein, Bruce V., "What counts as a <Social and Ethical Issue> in Nanotechnology?" *Hyle*, **11** (2005) : 5-18.
- Lombardi, Olimpia & Labarca, Mart'n, "The ontological autonomy of the chemical world," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 125-148.
- Needham, Paul, "Mixtures and modality," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 103-118.
- Neeley, Kathleen L., "Esteem, regard, and respect for rationality : Joseph Priestley's female connections," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 77-90.
- Norrgrén, Hilde, "Interpretation and the hieroglyphic monad : John Dee's reading of Pantheus's Voarchadumia," *Ambix*, **52** (2005) : 217-245.
- Novaro, Octavio, "Activity of closed d-shells in noble metal atoms," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 241-268.
- Oltra, Lluís Garrigós, "François Joseph Houtou de Labillardière (1796-1867) : a case of desertion in nineteenth-century chemistry," *Ambix*, **52** (2005) : 159-174.
- Ord, Margery G., & Stocken, Lloyd A., "The Oxford biochemistry department in wartime, 1939-45," *Notes and Records of the Royal Society of London*, **59** (2005) : 37-144.
- Ostrovsky, Valentin N., "Towards a philosophy of approximations in the <Exact> sciences," *Hyle*, **11** (2005) : 101-126.
- Ostrovsky, V., "On recent discussion concerning quantum justification of the periodic table of the elements," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 235-239.
- Preston, J. Christopher, "The promise and threat of nanotechnology : Can environmental ethics guide us?" *Hyle*, **11** (2005) : 19-44.
- Quinn, Terry, "Plates from Royal Society publications. Experiments of Henry Cavendish," *Notes and Records of the Royal Society of London*, **59** (2005) : 215.
- Rae, Ian D, "Chemistry in Australia : Growing up, down under," *Ambix*, **52** (2005) : 7-26.
- Rae, Ian D., "Granville Perkins and leprosy chemotherapy in the Philippines," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 10-18.

- Russo, Ruth, "The heart of steel: A metallurgical interpretation of iron in Homer," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 23-29.
- Scerri, Eric R., "Some aspects of the metaphysics of chemistry and the nature of the elements," *Hyle*, **11** (2005) : 127-145.
- Schiemann, Gregor, "Nanotechnology and nature: On two criteria for understanding their relationship," *Hyle*, **11** (2005) : 77-96.
- Schofield, Robert E., "Joseph Priestley, natural philosopher," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 57-62.
- Schwenk, Ernst F., "Friedrich Runge and his capillary designs," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 30-34.
- Seitz, Frederick, "Henry Cavendish: the catalyst for the chemical revolution," *Notes and Records of the Royal Society of London*, **59** (2005) : 175-200.
- Simonian, Joseph, "The paradoxes of chemical classification: Why 'water is H₂O' is not an identity statement," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 49-56.
- Stock, John T., "John Hughes Davies. The effect or the silent electrical discharge on the ammonia system," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 35-40.
- Stapleton, Darwin H., "A lost chapter in the early history of DDT: The development of anti-typhus technologies by the Rockefeller Foundation's Louse Laboratory, 1942-1944," *Technology and Culture*, **46** (2005) : 513-540.
- Stock, John T. & James D. Stuart, "The decomposition of hydrogen peroxide by blood: George Senter's discovery of the enzyme involved," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 113-117.
- Swain, Patricia A., "Bernard Courtois (1777-1838), famed for discovering iodine (1811) and his life in Paris from 1798," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 103-112.
- Usselman, Melvyn, Alan Rocke, Christina Reinhart, & Kelly Foulser, "Restaging Liebig: A study in the replication of experiments," *Annals of Science*, **62** (2005) : 1-56.
- Vallance, John, "Minerals, morals, and the hidden purpose of nature," *Science in Context*, **18** (2005) : 55-68.
- Vihalemm, Rein, "Chemistry and a theoretical model of science: On the occasion of a recent debate with the Christies," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 171-182.
- Wetzel, Walter, "Entdeckungsgeschichte der Polyfluorethylene," *NTM*, **13** (2005) : 79-91.
- White, J. Edmund, "Pantisocracy and Pennsylvania: Plans of Coleridge and Southey and of Cooper and Priestley," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 70-76.
- Wilholt, Torsten, "Explaining models: Theoretical and phenomenological models and their role for the first explanation of the hydrogen spectrum," *Foundation of Chemistry*, **7** (2005) : 149-169.
- Woodcock, Leslie V., "Phlogiston theory and chemical revolutions," *Bulletin for the History of Chemistry*, **30** (2005) : 63-69.
- Yoshihara, H. Kenji; Kobayashi, Teiji; Kaji, Masanori, "Ogawa Family and Their 'Nipponium' Research: Successful Separation of the Element 75 before Its Discovery by Noddacks," *Historia Scientiarum*, **15** (2005) : 177-190.

- Zaitseva, Elena A. & Ernst Homburg, "Catalytic chemistry under Stalin : Science and scientists in times of repression," *Ambix*, **52** (2005) : 67-84.
- Zingales, Roberto, "From masurium to trinacrium : The troubled story of element 43," *Journal of Chemical Education*, **82** (2005) : 221-227.
- Zuidervaart, Huib J., "An eighteenth-century medical-meteorological society in the Netherlands : an investigation of early organization, instrumentation and quantification. Part 1," *British Journal for the History of Science*, **38** (2005) : 379-410.

(欧文書籍) 著者姓の ABC 順

- Se libérer de la matière ? : Fantasmies autour des nouvelles technologies*, Inra, 2005, ISBN : 2738011853, EUR 7.5.
- Aftalion, Fred, *History of the International Chemical Industry : From the "Early Days" to 2000*, 2nd edition, Chemical Heritage Foundation, 2005, 436 p., ISBN : 0941901297.
- Anderson, Stuart, ed., *Making medicines : a brief history of pharmacy and pharmaceuticals*, London : Pharmaceutical Press, 2005, xviii + 318 p, ISBN : 0-85369-597-0.
- Anstey, Peter R., and John A. Achuster., *The Science of Nature in the Seventeenth Century : Patterns of Change in Early Modern Natural Philosophy*, (Australasian studies in history and philosophy of science, v. 19), Dordrecht ; [Great Britain] : Springer, 2005, viii + 248 p., ill.
- Archer, Mary D. & Christopher D. Haley, eds., *The 1702 Chair of Chemistry at Cambridge : Transformation and Change*, Cambridge : Cambridge University Press, 2005, ISBN : 0521828732.
- Barbara, Goldsmith, *Obsessive Genius : The Inner World of Marie Curie*, New York : W. W. Norton, 2005. 256 p., ill., bib., index, ISBN : 0-393-05137-4.
- Bell, Madison Smartt, *Lavoisier in the Year One : The Birth of a New Science in an Age of Revolution*, New York : Norton, 2005.
- Bensaude-Vincent, Bernadette, Antonio Garcia Belmar, et José-Ramon Bertomeu Sanchez, *L'Émergence d'une science des manuels : Les Livres de chimie en France (1789-1852)*, Nouvelle, 2003, ISBN : 2914610130.
- Bensaude-Vincent, Bernadette, *Histoire de la chimie*, La Découverte, 2005, ISBN : 2707121924.
- Beretta, Marco ed., *When glass matters : Studies in the history of science and art from Graeco-Roman antiquity to early modern era*, Olschki, 2004, EUR 38.00, ISBN 8822253183.
- Berube, David M., *Nano-Hype : The Truth Behind the Nanotechnology Buzz*, 521 p., Prometheus Books, ISBN : 1591023513.
- Bork, Robert, ed., *De Re Metallica : The Use of Metal in the Middle Ages*, Aldershot : Ashgate, 2005, xxii + 420 p, ill., maps, plans. \$99.95, ISBN 0754650480.
- Bowden, Mary Ellen, with Lisa Rosner, eds., *Joseph Priestley, Radical Thinker*, Chemical Heritage Foundation, 2005, 72 pp, illus., bibl, \$19.95.
- Buckingham, John, *Chasing the Molecule*, Sutton Publishing, 2005, ISBN : 0750933461.
- Carson, Cathryn, *Reappraising Oppenheimer : Centennial Studies and Reflections*, 413 p., Publisher : Office for History of Science and Technology, University of California, Berkeley, 2005, ISBN :

0967261732.

- Cathcart, Brian, *The Fly in the Cathedral : How a Group of Cambridge Scientists Won the International Race to Split the Atom*, New York : Farrar, Straus & Giroux, 2005, xii+308 p., ill., bib., index.
- Chandler, Jr., Alfred Dupont., *Shaping the Industrial Century : The Remarkable Story of the Evolution of the Modern Chemical and Pharmaceutical Industries*, Cambridge, Mass. ; London : Harvard University Press, 2005, viii+366 p., ISBN 0-674-01720-X.
- Charles, Daniel, *Master Mind : The Rise and Fall of Fritz Haber, the Nobel Laureate Who Launched the Age of Chemical Warfare*, New York : Ecco, 2005, 336 p., ISBN : 0-060562-72-2, \$24.95.
- Coleman, Kim, *A History of Chemical Warfare*, (Paperback) Palgrave MacMillan, 2005, 198 p.
- Daniel, Pete, *Toxic Drift : Pesticides and Health in the Post-World War II South*, Baton Rouge and Washington, D. C. : Louisiana State University Press in cooperation with the Smithsonian National Museum of American History, 2005, xii+209 p., \$26.95.
- Declan O'Reilly, ed., *Makers of Modernity : Members of the Pittcon Hall of Fame*, Chemical Heritage Foundation, 2005, 40 pp, illus., \$5.00.
- Diarmuid Jeffreys, *Aspirin : The Remarkable Story of a Wonder Drug*, Bloomsbury USA, 2005, 352 pp, \$13.95, ISBN 1582346003.
- Evans, Chris, and Göran Rydén, eds., *The Industrial Revolution in Iron : The Impact of British Coal Technology in Nineteenth-Century Europe*, Aldershot, Hants : Ashgate, 2005, ix+200, \$94.95.
- Fisher, Saul, *Pierre Gassendi's Philosophy and Science : Atomism for Empiricists*, Leiden : Brill, 2005, \$172.50, ISBN 9004119965.
- Force J. E. and S. Hutton, eds., *Newton and Newtonianism : New Studies* (International Archives of the History of Ideas), Springer, 2005, ISBN : 1402019696.
- Glauber, Johann Rudolph, *Opera Chymica, Bücher und Schrifften*, Reprint of Frankfurt 1658 edition, Olms, 2004, EUR 148.0, ISBN 3487127652.
- Glauber, Johann Rudolph, *Continuatio Operum Chymicorum*, Reprint of Frankfurt 1659 edition, Olms, 2004, EUR 148.0, ISBN 3487127660.
- Gosnell, Mariana, *Ice : The Nature, the History, and the Uses of an Astonishing Substance*, 576 p., Alfred A. Knopf, 2005.
- Greenfield, Amy Butler, *A Perfect Red : Empire, Espionage, and the Quest for the Color of Desire*, New York : Harper-Collins, 2005, viii+338 pp. \$26.95.
- Hempstead, Colin, and William E. Worthington, eds., *Encyclopedia of 20th Century Technology*, xxxi+474 p., illus., index, Routledge : New York and London, 2005, \$325.00, ISBN : 1-57958-386-5.
- Hirai, Hiro, *Le concept de semence dans les théories de la matière à la Renaissance : de Marsile Ficini à Pierre Gassendi*, Turnhout : Brepols, 2005.
- Hofmann, Klaus, *Otto Hahn—Forschung und Verantwortung*, Waldemar Kramer Verlag Gm, 2005, ISBN : 3782905601.
- Horchler, Michael, *Die Alchemie in der deutschen Literatur des Mittelalters : ein Forschungsbericht über die deutsche alchemistische Fachliteratur des ausgehenden Mittelalters*, Baden-Baden : Deutscher Wissenschafts-Verlag, 2005, 539 p.

- Hunter, Michael, and Harriet Knight, *Unpublished Material Relating to Robert Boyle's Memoirs for the Natural History of Human Blood*, (Robert Boyle project occasional papers, no. 2), London : Robert Boyle Project, 2005, xv+48 p.
- Iliffe, Rob, Milo Keynes, and Rebekah Higgitt, eds., *Early Biographies of Isaac Newton : 1660-1885*, 928p., Pickering Publications, 2005, ISBN : 1851967788.
- Jackson, Joe, *A World on Fire : A Heretic, an Aristocrat, and the Race to Discover Oxygen*, Viking Adult, 2005, ISBN 0670034347.
- Keen, Robin, and Johannes Büttner, *The Life and Work of Friedrich Wöhler (1800-1882)*, vi+495 p., illus., index., Verlag Traugott Bautz : Nordhausen, 2005, ISBN 3-88309-224-X.
- Kinas, Sven, *Adolf Butenandt (1903-1995) und seine Schule*. 260 pp., figs., Berlin Veröffentlichungen aus den Archiv zur Geschichte der Max-Planck-Gesellschaft.
- Lerner, Steve, *Diamond : A Struggle for Environmental Justice in Louisiana's Chemical Corridor*, Cambridge, MA : MIT Press, 2005, xiv+344 pp. \$27.95.
- Leslie, Esther, *Synthetic Worlds : Nature, Art, and the Chemical Industry*, 280 p., illus., bibl., index. Chicago : The University of Chicago Press, \$45.
- Lightman, Alan P., *The Discoveries : Great Breakthroughs in 20th Century Science*, New York : Pantheon Books, 2005, xviii+553 p., plates, ill., ports., ISBN 0-375-42168-8.
- Moran, Bruce T., *Distilling Knowledge : Alchemy, Chemistry, and the Scientific Revolution*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 2005, \$24.95, ISBN 0674014952.
- Morris, Peter J. T., *Polymer Pioneers : A Popular History of the Science and Technology of Large Molecules*, Chemical Heritage Foundation, 2005, \$12.00, ISBN : 0941901033.
- Morris, Richard, *The Last Sorcerers : The Path from Alchemy to the Periodic Table*, (Paperback), Joseph Henry Press, 2005, ISBN : 0309095077, \$15.95.
- Nakamura, Ellen Gardner, *Practical Pursuits : Takano Choei, Takahashi Keisaku, and Western Medicine in Nineteenth-Century Japan*, Harvard East Asian Monographs, 255, x+236 p., figs., maps, apps., bibl., index, Cambridge, MA : Harvard University Asia Center, 2005, \$40 ISBN : 0674019520.
- Newman, William R., *Promethean Ambitions : Alchemy and the Quest to Perfect Nature*, Chicago : University of Chicago Press, 2005, \$22.50, ISBN 0226575241 (paper).
- Paquot, Catherine, *Henri Sainte Claire Deville : chimie, recherche et industrie*, Paris : Vuibert ; [Genevilliers] : Institut pour l'histoire de l'aluminium, 2005, 225 p. : ill., map, ports.
- Pelling, Margaret, and Scott Mandelbrote, *The Practice of Reform in Health, Medicine, and Science, 1500-2000 : Essays for Charles Webster*, Aldershot : Ashgate, 2005, xv+376 p.
- Photiades, Constantin, *Count Cagliostro : An Authentic Story of a Mysterious Life*, trans. by K. S. Shelvankar, London : Kegan Paul International, 2005.
- Pomata, Gianna & Nancy G. Siraisi, eds., *Historia : Empiricism and Erudition in Early Modern Europe*, Cambridge, Mass. : MIT Press, 2005, \$50.00, ISBN 0262162296.
- Reill, Peter Hanns, *Vitalizing Nature in the Enlightenment*, Berkeley : University of California Press, 2005, x+388 p., bib., index, ISBN : 0-520-24135-5.
- Romocki, S. J. von, *Geschichte der Explosivstoffe, Band 1. Sprengstoffchemie, Sprengtechnik und Torped-*

- owesen, Survival Press, 2003, ISBN : 3833007028.
- Romocki, S. J. von, *Geschichte der Explosivstoffe, Band 2*. Survival Press, 2004, ISBN : 393793300 X.
- Schieder, Wolfgang, *Adolf Butenandt und die Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft. Wissenschaft, Industrie und Politik im Dritten Reich*, Wallstein, 450 p., 2004, ISBN : 3892447527.
- Schramm, Helmar, Ludger Schwarte, & Jan Lazardzig, eds., *Collection—Laboratory—Stage : Scenes of Knowledge in the 17th Century*, Walter de Gruyter, 2005, \$154.00, ISBN 3110177366.
- Simon, Jonathan, *Chemistry, Pharmacy and Revolution in France, 1777-1809*, Aldershot : Ashgate, 2005.
- Sneader, Walter, *Drug Discovery : A History*, New York : John Wiley & Sons, 2005, xi+468 pp. \$65.
- Solway, Andrew, *A History of Super Science : Atoms and Elements*, Raintree, 2005, ISBN : 141091920 X.
- Steele, Brett D. and Tamera Dorland, eds., *The Heirs of Archimedes : Science and the Art of War through the Age of Enlightenment*, Cambridge, Mass. ; London : MIT, 2005, vi,+397 p., ill.
- U. S. Department of Agriculture, *The Cotton Plant : Its History, Botany, Chemistry, Culture, Enemies, and Uses*, Reprint of 1896, Hawaii : University Press of Hawaii, 2005, ISBN : 141022516 X.
- Viano, Cristina, *Aristoteles chemicus. Il IV libro dei Meteorologica nella tradizione antiqua e medievale*, Academia, 2002, EUR 38.50, ISBN 3896651749.
- Vilensky, Joel A., *Dew of Death : The Story of Lewisite, America's World War I Weapon of Mass Destruction*, Bloomington, IN : Indiana University Press, 2005, xxiii+213 p., ill., ISBN 0-253-34612-6.
- Vlasak, Weldon, ed., *Planck's Columbia Lectures*, Clatonia, NE : Adaptive Enterprises, 2005, 479 pp. \$28.95.

(和文雑誌論文) 著者姓の50音順

- アグリコラ, ゲオルグ『『地下の事物の起源と原因について』(杳掛俊夫・山田俊弘・矢島道子訳) その4～その5』『地質学史懇談会会報』, **24**(2005) : 30-37 ; **25** (2005) : 31-40.
- 荒尾美代「寛政年間における池上太郎左衛門幸豊の白砂糖生産法一生成技術「分蜜法」を中心にして」『科学史研究』[第2期] **44**(233) : 33-38, (2005).
- 岩本振武「「ツァイゼの塩」の発見は早過ぎたか?」『いわき明星大学理工学部研究紀要』**18** : 11-17, (2005.3).
- 内田正夫「環境と化学の半世紀—生物濃縮, オゾン層破壊, 地球温暖化—」『サイエンスネット』(数研出版) **25**(2005.11) : 6-9.
- 金子務「科学史の風雲児たち」(25)～(最終回)『歴史読本』**50**(1)～(12) (2005) 各回の内容: 宇田川榕菴, 国友一貫斎, 本木昌造, シドッチ, 田中久重, 木村兼霞堂, 河村瑞賢, 山片蟠桃, 林子平, 橋本左内, 玉川兄弟, 前野良沢.
- 川崎勝「ひとつの史料論として—福沢諭吉「書簡」と『時事新報』(1)』『南山経済研究』**19**(3) (通号52) : 413~421 (2005.3).
- 越野正義「化学肥料の歴史」(戦後編パート1)『肥料』**100** (2005.2) : 45-57.
- 西條敏美「「原子と分子」の考え方とその成立過程に重点をおいた指導例」『サイエンスネット』(数研出版) **23** (2005.5) : 2-5.

- 西條敏美「探訪 科学者の史跡（第8回）お茶の化学成分を明らかにした 辻村みちよ」『S & Tジャーナル』**14**(11) (2005) : 54-56.
- 坂井裕介, 磯崎哲夫「理化学生徒実験に関する歴史的研究—静岡県の中学校および師範学校の実態史を中心として」『日本理科教育学会理科教育学研究』**46**(1) (2005.9) : 43-52.
- 芝哲夫「福沢諭吉と適塾：適塾生との交流」『福沢諭吉年鑑』**32** : 117-128, (2005).
- 芝哲夫「招待講演1 北里柴三郎と適塾」『日本医史学雑誌』**51**(2) : 145-147, (2005).
- 柴田修一「光ファイバー：研究と開発の歴史」『セラミックス』**40**(12) (2005) : 980-999.
- 嶋澤るみ子「人類は水銀をどのように利用してきたのか—科学史における水銀の役割—」『化学と教育』**53** (2005) : 148-150.
- 高橋哲郎「実施3年目に入る「理科基礎」をめぐる諸問題—教科書づくりから現状と今後の課題—」『科学史研究』[第2期] **44**(234) : 106-110, (2005).
- 田畑米穂「私の放射線化学史 (15) (16)」『放射線と産業』**105** : 75-82 ; **106** : 60-63, (2005).
- 徳丸克己「光触媒研究前史」『光化学 = Photochemistry』**36**(2) (2005) : 153-162.
- 〈特集〉「科学の不正 どう立ち向かうか」『化学』2005年6月号.
- 〈特集〉「科学で歴史に秘められた謎を解け！」『化学』2005年7月号.
- 〈特集〉「戦後日本の科学観」『科学』2005年9月号.
- 中村征樹「復古王制期フランスの技術書出版ブーム」『科学史研究』[第2期] **44**(233) : 1-12, (2005).
- 西脇康「江戸幕府金銀貨の化学分析品位について：いわゆる「甲賀表」の再検討」『計量史研究』**27**(1) (2005) : 1-13.
- 古川安「合成化学物質の功罪—DDTと有鉛ガソリンのたどった道—」『サイエンスネット』(数研出版) **23** (2005.5) : 6-9.
- 本間栄男「Jacob de Back (1594-1658) の生理学」『哲学・科学史論叢』, **7** (2005) : 1-38.
- 村上弘陽「石炭化学の歴史的意義と新たな展開 (上) (下)」『JETI』**53**(3)~(4) (2005.3~4).
- 吉本秀之「弱視の貴族科学者ロバート・ボイル」『サイエンスネット』(数研出版) **24** (2005.9) : 6-9.
- 「現代糖業技術史 精製糖業編 (1) 第二次大戦終了以後」『精糖技術研究会誌』**53** (2005) : 25-53.
- 山本明夫「化学, 隕石, 北海道—榎本武揚とウィリアム・クラークを結ぶ糸—その1—その2」『化学と工業』**58**(7)~(8) (2005) : 824, 927.
- 山本明夫「近代化学工業の盛衰—19世紀ヨーロッパの歴史に学ぶ (1)~(4)」『化学経済』**52**(5)~(8) (2005.4~7) (1) なぜ英国からドイツに国力のシフトが起きたか (2) 英国化学工業の衰退とドイツの興隆 (3) 国の盛衰に影響した合成化学の研究水準 (4) 化学工業の盛衰の理由に関する一考察.
- 吉原賢二「挫折から再生へ—大正・昭和の化学者たち (7)~(最終回)」『現代化学』(7)「うるしこそ日本の象徴—眞島利行 天然物有機化学の開拓—」2005年1月号, 14-20 ; (8)「紅花の女性化学者—黒田チカ 天然色素にかけた生涯—」2月号, 14-18 ; (9)「七員環の芳香族有機化合物の発見—野副鐵男 ひとすじの道」3月号, 16-21 ; (10)「第五の栄養素ビタミンの発見—鈴木梅太郎と弟子たち 利権を支えた実学的化学者—」4月号, 16-21 ; (11)「しょう油の香りから酵素の世界へ—赤堀四郎 生化学・タンパク質研究の開拓—」5月号, 16-20 ; (最終回)「終わりからの展望—遠くなったあの夏の日—」7月号, 16-19.
- Levere, Trevor H., (内田正夫訳)「科学史のための「弁明」—科学史とはなにか, それはなぜ重要か」『東西南北 2005』(和光大学総合文化研究所) : 212-238.
- 渡部智博「旧制中学校の教科書に見られる周期表」『教科書フォーラム』**4** : 50-60, (2005).

化学会共催行事『化学アーカイブズ小委員会春季年会』のお知らせ

日 時：平成 19 年 3 月 28 日(水) 13 時～16 時 55 分

会 場：関西大学千里キャンパス（吹田市山手町 3-3-35）

主 催：日本化学会・同化学教育協議会・化学史学会ほか

協 賛：大阪市立科学館・島津創業記念資料館ほか

参加費：無料

プログラム

総合司会 伊藤 卓（日本化学会化学教育協議会議長/横浜国立大学名誉教授）

※開会挨拶・紹介（13：00～13：15）「日本化学会化学アーカイブズ事業のいま、これから」

植村 榮（日本化学会化学教育協議会化学アーカイブズ小委員会委員長/京都大学名誉教授・岡山理科大学教授）

※講 演（一般市民公開講座）

1. 「日本の化学を始めた人々」（13：15～14：05）（仮題）

芝哲夫（大阪大学名誉教授・蛋白質研究奨励会ペプチド研究所所長）

2. 「日本の女性化学者教育の夜明け」（14：05～14：55）（仮題）

蟻川 芳子（日本女子大学副学長）

3. 「日本の化学技術は如何に発展してきたか」（仮題）（15：05～15：55）

上 仲 博（元住友化学(株)）

4. 「人材養成は日本の将来に如何に大切な：化学者の一視点」（仮題）（15：55～16：45）

山本明夫（東京工業大学名誉教授）

※閉会挨拶（16：45～16：50）

この度『化学史研究』第 33 巻 3 号におきまして表紙 2，と表紙 3 の印刷が入れ替わるという不手際により，読みにくい雑誌となりましたこと深くお詫び申し上げます。

日頃より『化学史研究』の作成につきましては，充分なる注意を持って行っているところでございますが，この度面付けミスが発生し誠に申し訳ありませんでした。二度とこのようなミスの発生することがないようにチェック体制を強化し再発防止に努めますので，今回に限り，ご寛容賜りますようお願い申し上げます。

中央印刷株式会社

編 集 後 記

まず会員、読者の皆さんにおわびしなければなりません。前第3号は印刷をお願いしている中央印刷のミスで、表紙2と表紙3の印刷が入れ替わってしまいました。しかし実害は少ないとの編集委員会の判断でとくに刷り直しの要求はしませんでした。中央印刷からは謝罪文をいただきましたので、本号に掲載しました。

2006年10月31日から12月21日まで約2ヶ月間、私が勤務している東京工業大学に、ロシアのサンクト・ペテルブルク大学附属メンデレーエフ博物館文書館の館長イーゴリ・セルゲーヴィチ・ドミートリエフ先生をお迎えしました。実は8年半ほど前にも、三週間ほどドミートリエフ先生をお招きし講演旅行をしたことがあります。本誌の第26巻(1999)に掲載された先生の論文(拙訳、11-33頁、「化学者メンデレーエフの生涯と業績—その社会的・経済的側面」)は、そのときの成果です。

今回、ドミートリエフ先生の講演を開催して、印象的だったのは、メンデレーエフの伝記的研究でまだ残る問題はあるかという聴講者からの質問に対する先生の答えでした。まだ、残る問題の中で、メンデレーエフ20代の西欧留学(ハイデルベルク滞在)時代のことを挙げられていました。私は、メンデレーエフの留学については、よく知られているように思っていました。しかし、実は、ソ連時代のロシアの研究者はおいそれとはドイツ(当時は西ドイツ)に研究に行けなかったし、ドイツの研究者はメンデレーエフにはほとんど関心がないので調べられていないといえます。同じようなことは、日本の明治大正の化学者の留学についても言えるのではないのでしょうか。留学時代の話は、本人の回想記の記述に頼ることが多く、留学先での調査はまだ十分でないように思います。

2004年に化学史学会創立30周年記念事業の一環としてカナダのトロント大学からトレヴァ・ルヴィア教授をお招きしました。化学史分野でもこうした外国人研究者との交流を、さらに推し進めたいものです。

私の編集後記は、今回が最後になります。次回からは、吉本秀之新編集委員長が書いてくださるでしょう。短い間でしたが、その間の会員の皆さんのご協力に感謝します。引き続き、皆さんからの投稿をお待ちしています。

(梶 雅範)

編 集 委 員

委員長: 梶 雅範

委員: 内田正夫 大野 誠 河野俊哉
田中浩朗 中村征樹 古川 安
吉本秀之

編 集 協 力 委 員

小川眞里子 隠岐さや香 上 仲 博 川島慶子
菊池好行 菊地原洋平 瀬戸口明久 塚原東吾
徳元琴代 八耳俊文 山田俊弘

維 持 会 員

味の素(株) 住友化学工業(株)
カネカ 三菱化学(株)

賛 助 会 員

(株)東京教学社 三 共 (株)
(財)日本分析センター 三 共 出 版 (株)
(財)肥料科学研究所 (株)第一学習社
和光純薬工業(株) (財)武田科学振興財団
金沢工業大学ライブラリーセンター 日 揮 (株)
内藤記念くすり博物館 川合化学技術研究事務所

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡下さい。

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル
学術著作権協会

Tel : 03-3745-5618 Fax : 03-3745-5619

E-mail : kammori@msh.biglobe.ne.jp

化学史研究 第33巻 第4号(通巻117号)

2006年12月10日発行

KAGAKUSHI Vol. 33, No. 4. (2006)

年4回発行 定価2,625円(本体2,500円)

編集・発行 ©化学史学会 (JSHC)

The Japanese Society for the History of Chemistry
会 長: 亀山 哲也

President : Tetsuya KAMEYAMA

編集代表者: 梶 雅範

Editor in Chief : Masanori KAJI

学会事務局 Office

愛知県立大学外国語学部大野研究室

% Prof. Makoto Ohno, Aichi Prefectural University
Faculty of Foreign Studies, Kumabari, Nagakute,
Aichi, 480-1198, Japan

Phone 0561-64-1111; Fax 0561-64-1107

印刷 中央印刷(株)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町4-24

Tel. 03-3269-0221(代) Fax 03-3267-3051

Overseas Distributor : Maruzen Co., Ltd.

P.O. Box 5050, Tokyo International, 100-3199 Japan

Phone 03-3272-7211; Telex J-26517

昭和52年3月24日 郵政省学術刊行物指定